

佐賀県立九州陶磁文化館

研 究 紀 要

第 7 号

実体顕微鏡写真による有田磁器の呉須の変遷研究

・・・・・・ 井上康彦・大橋康二

19 世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究―薄手磁器を中心として―

・・・・・・ 鈴田 由紀夫

柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 2 ― 延宝様式の時代 ―

・・・・・・ 宮木 貴史

2022

佐賀県立九州陶磁文化館

はじめに

このたび佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第7号を刊行しました。

当館は、昭和55年（1980年）に九州陶磁に関する文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与する目的で設立され、以来、多面的な活動を行ってきましたが、重要な活動の一つとして調査研究にも力を尽くし、研究紀要や展覧会図録等でその成果を公にしてきました。

当館における調査研究活動をより充実させ、今後の展示及び教育普及に活用するために、研究紀要の刊行を進めており、第7号では、染付磁器に欠かせない顔料である呉須の変遷を研究した論考や、有田と三川内の薄手磁器についての研究、前号に引き続き柴田夫妻コレクションにみられる銘の紹介といった調査研究の成果を収録しました。

今後も、当館の設立目的にありますように、九州の陶芸文化の発展に寄与するべく九州陶磁に関する調査研究に尽力し、その成果を逐次報告したいと存じますので、皆様方の御叱正、御指導をお願い申し上げます。

令和4年（2022年）3月

佐賀県立九州陶磁文化館

館長 鈴田 由紀夫

目次

はじめに

論考

実体顕微鏡写真による有田磁器の呉須の変遷研究

・・・ 井上 康彦・大橋 康二 ・・・ 1～37 頁

19 世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究－薄手磁器を中心として－

・・・ 鈴田 由紀夫 ・・・ 38～67 頁

柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 2－延宝様式の時代－

・・・ 宮木 貴史 ・・・ 68～85 頁

実体顕微鏡写真による有田磁器の呉須の変遷研究

井上康彦・大橋康二

1. 実体顕微鏡による有田磁器の写真撮影について

(1) 用いた機材

●実体顕微鏡・LEIKA MSS

・接眼レンズ×10・対物レンズ×1・ズーム機能は0.63・1.0・1.6・2.5・4.0がある。

* 高ズーム機能は被写体の明るさに問題があり1.6ズームを選択した。

●デジタルカメラ・RICOH WG-20

・白磁部の撮影は適正露出で行うと目立たない。露出はややマイナスにする。

(2) 観察方法

①デジタルカメラ通常撮影

・全形、一部の通常撮影はRICOH WG-20で撮影した。

②デジタルカメラ拡大撮影

・拡大撮影はRICOH WG-20で焦点距離1cmにセットし5cm～10cmで撮影した。

③実体顕微鏡+デジタルカメラ拡大撮影

・実体顕微鏡は1.6ズームでセットした。RICOH WG-20を2.7ズームに統一し、実体顕微鏡の接眼レンズにセットし撮影した。

・RICOH WG-20 焦点距離1cmは拡大撮影となる。

・実体顕微鏡の対物レンズは1×、接眼レンズは10×である。ズーム拡大機能は0.63、1.0、1.6、2.5、4.0がある。今回の撮影で1.6ズームの実体顕微鏡倍率は16倍となる。

2.6、4.0ズームで撮影するにはリングライトなどを設置して被写体を明るくすれば可能である。

・RICOH WG-20 焦点距離1cmの撮影の倍率は不明。2.7ズームを選択、実体顕微鏡+RICOH WG-20の倍率は43.2倍となる。撮影写真をパソコンに入力する。パソコン画像を拡大ズームで観察すれば100倍以上の観察ができる。例；中国磁器・清朝前期官窯と推測される作品の白磁部を拡大すればムライト($3\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$)の柱状結晶が観察できる。日本磁器、中国磁器民窯作品は釉薬内の気泡が多くムライトは観察できない。断面を磨き観察する方法が考えられる。

④寸法の計測について

・顕微鏡の被写体の計測方法の一つに対物マクロメータ 1 cm (0.1 mm×100) を採用した。磁器片撮影と同じ条件で対物マクロメータを撮影し画像をパソコンに取り込む。パソコンのペイント機能を用いて対物マクロメータ写真を 1 mm (0.1 mm×10) に切り取りを行う。切り取りした写真を磁器片写真に貼り付けを行った。これにより気泡、呉須粒子、未熔融粒子 (0.01 mm以下も確認可) などの寸法が確認できた。

釉薬・素地の融点について

釉薬の主成分は長石である。長石の融点は通常 1300℃で熔け出す。塩基物質 (木灰・石灰など) を入れることで融点が下がる。この時の長石の融点 (浜野 1956、李・浜野 1973) は 1150℃で熔け始め 1300℃で完全に熔ける。

江戸時代の釉薬配合は分からないが窯内の温度は観察材料の熱膨張粒子の有無と割合、半熔融粒子の有無と割合、気泡の透明度・大きさの計測、半透明に熔融したガラス質化で判断した。

(3) 観察結果 (呉須を中心に記載する)

●天神森窯 (有田町)・生掛け・1610～1630 年代・5 点の観察結果

釉薬、素地は熔融し半透明になったガラス質の中に熱膨張、半熔融した粒子が混在。

釉薬層は半熔融～熱膨張した粒子が多く混じる作品と、粒子が熔融した半透明でガラス質の試料がある。ガラス化した釉薬層内の気泡は大きく数も多い。気泡も透明と白濁している試料がある。白濁気泡は窯内の温度不足が原因であろう。

釉薬層に呉須粒子が点在し数量も多い。

素地は生掛けで水分蒸発と結晶水の放出時に呉須が剥離したのでであろう。

呉須発色が悪い試料がある。呉須発色の悪い試料は素地も熱膨張～半熔融粒子が多い。窯の構造による還元温度の不足と酸化炎の発生が考えられる。

●天神森窯のまとめ

・釉薬内に熱膨張した長石の粒子があり、窯内温度は 1000℃～1150℃の範囲であろう。短時間、1200℃に達した可能性がある。素地の中心部は熱膨張粒子が観察され 1150℃の可能性がある。
・試料 5 点を観察した。“白い焼き物”を作るため窯内温度を上げるのに苦労している。苦労の跡が試料にあらわれている。

●窯ノ辻窯 (武雄市山内町)・生掛け・1630～1640 年代・10 点の観察結果

窯の構造・釉薬が天神森窯より改善されたのでであろう。釉薬・素地に熱膨張粒子は観察できな

かった。半熔融した長石粒子は観察される。

釉薬層は見たためには完全熔融に近いが半熔融の粒子が多く点在する。粒子は天神森窯より少ないが混在する。釉薬層内の気泡が小さくなり透明度が上がった。

釉薬内に呉須粒子が点在するが天神森窯よりも少ない。

呉須発色の悪い試料がある。呉須発色の悪い試料は素地も半熔融状態で還元温度の不足、窯の構造により酸化炎が発生したのであろう。

●窯ノ辻窯のまとめ

- ・天神森窯より試料のレベルが上がっている。レベルを上げるため、窯設計、釉薬が改善されたのであろう。
- ・試料の仕上がりは安定してきた。熱膨張した長石の粒子は確認できない。半熔融状態の粒子は観察できた。窯の温度は天神森窯よりも高いことが分かる。1150℃～1200℃の範囲であろう。
- ・天神森窯と比較して白濁の気泡は少ない。気泡の大きさは同程度である。窯の構造が変わり還元焼成温度が上がり、呉須発色も良くなった。
- ・呉須粒子は天神森窯と比較して少ない。

●長吉谷窯（有田町）・素焼・1655～1670年代・7点の観察結果

中国から技術が導入され、窯ノ辻窯より試料のレベルは格段に上がり現代試料に近い。

釉薬内に半透明になった長石の微粒子が存在する作品もあった。現代試料でも半熔融した粒子は存在する。

釉薬内の気泡は窯ノ辻窯よりも小さくなった。釉薬内の気泡が多いのは日本磁器の特徴である。

清朝前期・官窯磁器と推測される作品は釉薬内の気泡は小さく少ない。この試料は日本磁器より焼成温度が高く1350℃～1400℃であろう。

素地は素焼きされている。素地から結晶水が放出されない。呉須層は安定し、粒子の浮き上がりは少なくなった。試料5点とも呉須粒子を観察できなかった。呉須発色は安定した。

●長吉谷窯のまとめ

観察をする限り現代試料と変わらない。自宅に50年前～40年前に集めた各地のコーヒーマグがある。染付試料を同じ方法で観察した。現代作品でも長石の半熔融粒子が存在する試料から微粒子が観察できない完全熔融の試料まである。

- ・素地はまだ完全熔融に至っていないが、有田の窯業技術は長吉谷窯で確立された。
- ・窯内の温度は1200℃～1250℃であろう。

●樋口窯・素焼・1690～1860年代・36点、柿右衛門窯・素焼・1690～1730年代・1点、南川原窯ノ辻窯・素焼・1690～1730年代・1点の観察結果

樋口窯は操業年代が長く、観察試料の年代も幅がある。大まかに分けると1690～1730年代、1690～1740年代、1700～1750年代、1730～1750年代、1740～1750年代、1740～1760年代、1750～1770年代、1780～1810年代、1800～1840年代、1810～1840年代、1820～1860年代、1840～1870年代に分けることができる。

窯の操業年代が長いことにより製品にバラツキがある。1700年代末期までバラツキがある。1800年代に入り、安定した試料ができるようになった。素地は完全なガラス質化となった。1790年代に入ると呉須原材料の質が落ち呉須剥離が目立つ試料が出てきた。窯業技術は確立したが新たに呉須材料による問題が出てきた。製品の中に剥離が目立たない試料がある。良質の呉須確保ができたのか？、呉須を精製したのか？、良質呉須とそうでない呉須を配合したのか？

●樋口窯・柿右衛門窯・南川原窯ノ辻窯のまとめ

・登窯が大規模となり、焼成窯数も増加したことに伴い高温焼成温度のバラツキ、製品の出来具合が試料に表れている。

・素地のガラス質化にもバラツキがあり、窯内の温度は1150℃～1300℃の範囲と思われる。

・1850年以降の試料をみる限り素地は完全に熔けている。有田窯業技術の完全な確立はこの時代であろう。その中で柿右衛門窯・南川原窯ノ辻窯・蔵春亭三保作品の出来はよく焼成温度(1250℃～1300℃)は高く安定し呉須の発色も良い。

(井上康彦)

2. 肥前染付磁器に用いられた呉須の研究について

(1) 呉須の差異に影響を与える要因について

肥前の染付磁器生産は1610年代頃に始まった。染付の顔料である呉須、コバルト青料は中国から輸入されたものを用いたと考えられている。記録から「絵薬は中国から輸入された。その手続きは、まず、長崎の輸入業者によって落札させ、仲買人の手を経て荷改めを受け、その証明書を副えて皿山へ送られたものを、郡目附が荷改めをしたのち買主へ渡された。」(宮田1975)しかし、中国から輸入された呉須の品質差があり、長崎の「目利」がこの品質差を決め、価格にも反映されたとされることから、当然、窯によって品質の差がある呉須を使用したと考えられる。

記録から磁器の絵葉（呉須）が享保年代（1716～1736）に輸入禁止になったが、間もなく解除されたことがあるが、これは佐賀（鍋島藩）と平戸（松浦藩）が磁器は将軍への献上に必要であると主張した結果と推測されている（山脇 1964）。

この呉須によって描かれた染付は肉眼観察では時代によって青色の色調が異なってみえる。その要因として考えられる点をあげると、1650年代頃を境に、それまでは生掛け焼成という、素焼をせず本焼1回だけの焼成から、1650年代には有田で素焼が始まる。この影響がどの程度あるかどうかである（イ）。

そして、中国から輸入される呉須が時代によってどの程度、品質の変遷があったかである（ロ）。江戸後期に呉須の輸入量が減少するとともに、品質も低下したことは、後述する享和2年（1802）の記録（宮田 1975）に「皿山窯焼用茶碗葉の儀、近年払底」したことが記されることなどからうかがえる。

（2）観察資料の選定について

上記（イ）、（ロ）の2つの点を考慮して、佐賀県立九州陶磁文化館（以下、九陶と略す）保管の陶片資料から生産窯の試料の選定を行った。

（イ）の点を明らかにするために、素焼をしない生掛け焼成の時代の有田町天神森窯（1610～1630年代）と武雄市山内町窯ノ辻窯（1630～1640年代）を選定した。この窯ノ辻窯がある板ノ川内山は、当時、有田皿山の1つであり、技術水準からも有田と考えてよい。そして素焼を行い始めた段階の主要な窯として、有田町長吉谷窯（1655～1660年代）を選んだ。

（ロ）の点を明らかにするために、有田磁器の色絵が1690年代頃に柿右衛門様式から金襴手様式に変化し、染付磁器の海外輸出は1684年の清の展海令以後、減退したと推測されるが、その影響があるか否かをみるため、1690～18世紀前半に位置づけられる有田町柿右衛門窯出土品1点（これは柿右衛門古窯で焼成されたものではなく、おそらく有田町南川原窯ノ辻窯で焼成されたものと推測される）、南川原窯ノ辻窯出土品1点、有田町樋口窯出土品9点、18世紀中葉～1770年代までの樋口窯出土品6点を選ぶ。その後の19世紀までの試料として、次にあげる分析結果から選定した1780～19世紀中葉の樋口窯出土品17点である。

シンクロトン光による呉須顔料の非破壊分析ではマンガン、鉄、コバルト三角座標ダイアグラムで検討した（太田他 2019）が、17世紀では顕著な違いは認められない。17世紀前半の方が17世紀後半のものよりマンガン量が比較的多い程度の違いである。18世紀の樋口窯の例は17世紀前半の初期伊万里のものとマンガン量は同程度である。ところが19世紀の樋口窯の例は2例だけであるが、コバルト量が減り、マンガン量が極めて多く、江戸後期の記録で呉須の質が落ちたとあることや、実際の製品の呉須の色調など肉眼でも大きく違ってみえることに

つながることを指摘した。

このようにシンクロトン光による呉須顔料の分析で、肥前磁器の(イ)と(ロ)の変化によって、呉須の成分も変化があることが認められた。さらに肉眼観察で変化が認められることについて、その変化の観察を実体顕微鏡観察するという新たな方法を井上康彦氏に提案され、有田の窯跡出土品から適当な陶片を選び実施していただいた。呉須部分が拡大写真でどのようにみえるかを観察した。有田磁器 1610～1890 年代・64 点、有田磁器明治～大正・2 点、有田現代作品・1 点、中国清朝前期乾隆帝時代官窯（推定）・2 点、中国嘉慶年間民窯・1 点、中華民国居人堂銘 1916 年・1 点の計 71 点行ったが、同様の状態の試料や今回のテーマと直接関係ない試料は紙数の関係で割愛した。

(3) 観察結果 (図 1～図 24)

1610～1630 年代の天神森窯の染付の呉須をみると、線書部の呉須上の釉の気泡は大小が集まって複雑に絡み、呉須粒子はみられない。2 や 4 のように呉須線書部分の濃く溜まった部分は上の気泡はほとんどみられない。5 は窯の温度が低く、釉の気泡は多く大きい。中には白濁したものもあり、他と違い斑らにみえる。これが肉眼でみると黄ばんでみえるのであろう。そして呉須部分は気泡が少なく、呉須粒子が顕著にみえる。肉眼観察では黒ずんでみえる。

1630～1640 年代の窯ノ辻窯の染付の呉須をみると、6 では線書とダミの呉須に濃淡が明らかである。呉須上の気泡は複雑に絡まり、不透明にみえる。呉須の粒子も認められない。

8 は肉眼観察では、呉須の発色が良い。拡大写真では染付線書部分の周りに大きな気泡が集まり、呉須線上にはかえって疎らにみえる。呉須線の濃さが濃いためかもしれない。9 も呉須の濃い部分は気泡がみえず周りに気泡が集まってみえる。10 は肉眼で呉須が黒ずんでみえる。より黒い線の部分は暗褐色で気泡は少ない。ダミの部分は暗い色であるが、茶色い気泡が並んでみえる部分がある。呉須粒子がかすかにみえる。11 は呉須の濃い溜まりには気泡はなく錆色を呈す。他の呉須部分に大きな気泡が集まってみえる。12 は肉眼観察で呉須が黒ずんでみえる。呉須部分の気泡は大きいものと小さなものが密集している。暗褐色の周りにいくらか青みを帯びた部分を取り巻いてみえ、呉須の微粒子がみえる。

1655～1670 年代の長吉谷窯では素焼を行うようになる。13 の呉須は青く発色がよい。線書とダミで濃さが異なる呉須である。ダミの方が薄く、上に複雑に絡まり合った気泡で不透明にみえる。呉須の粒子はみられない。14 は呉須の線書とダミの両方ともに小さい気泡が散布してみえる。16 は呉須部分に大きな気泡が散布している。17 は肉眼観察で呉須の発色はやや暗い。呉須部分の上には気泡が少なく、周りに大きな気泡が集まってみえる。

1690～1730 年代の柿右衛門窯や樋口窯、南川原窯ノ辻窯の染付をみると、18 は呉須の線書で

あるが、呉須上に大小の気泡が集まって見える。呉須の発色は良い。19も同様に呉須の発色がよく、呉須部分の上に大小の気泡が集まり、微細な気泡が連なって見える。20は線書と薄ダミがあるが、線書部分に大小の気泡が集まり、薄ダミの方は小さい気泡のみが見える。21は色絵素地であるが、薄い線書と濃淡のあるダミ部分である。淡いダミ部分の上に大小の気泡が多くみられる。濃いダミ部分の上には気泡は少なく黒っぽい。22は呉須の濃い部分の上に大きな気泡が散布し、薄い部分に大中小の気泡が密集して不透明に見える。23の呉須も肉眼観察では黒ずんで見える。線書とダミに濃淡がある。濃い線書の方が黒ずんでおり、上の気泡も少ない。濃さが淡い方が大小の気泡が多く散布し、白磁部分との境に気泡の密集がみられる。24は呉須の線書が淡い色であり、大小の気泡が多く集まっている。25は肉眼観察でも呉須の発色は良い。呉須の周縁に大中小の気泡が密集して見える。26は欧州向けの染付皿である。呉須の濃淡はあるが、呉須の淡い部分を中心に大小の気泡が散布している。

1730～1770年代頃の樋口窯の染付の呉須をみると、27は肉眼観察では呉須の発色は良い。呉須の部分は大小の気泡が散布する。白磁部分との境に気泡の密集がみられる。28は肉眼観察では呉須の発色は良い。呉須の線書とダミ部分である。呉須の上に気泡が複雑に絡み合っており、不透明である。よって呉須粒子は不鮮明である。29は28に近い。呉須の線書とダミの上に気泡が複雑に密集している。ダミの濃い部分は気泡が少なく見える。30は呉須の線書部分であるが、大きな気泡が密集している。31は呉須の線書とダミの部分であり、線書の方が淡く、上に気泡が複雑に密集しており、不透明である。ダミの部分がより暗い色で気泡も少なく見える。32は呉須の線書とダミの部分である。線書の方が暗い色である。より明るい青のダミの部分の上に、小さい気泡が厚く覆い、不透明である。33は釉が熔けず灰色を帯びる。釉が熔けていないため白っぽく、きれいな気泡になっていない。呉須はこの白濁した気泡に覆われ、不明瞭である。

1780～1820年代の樋口窯の染付の呉須をみると、34は肉眼観察によると、呉須の色は暗い色調であるが、呉須のダミ部分なので淡い色である。そのため上に大きい気泡が散布する。呉須の浮遊粒子がみられる。35は釉の熔け方が不十分である。呉須の線書とダミ部分であるが、線書の方が濃い。釉が十分熔けていないため、気泡も不鮮明である。36は肉眼観察では呉須が暗い色調である。呉須の線書部分であるが、呉須の上に気泡が多く散布する。呉須の浮遊粒子がみられる。

1800～1850年代の樋口窯の染付の呉須をみると、37は「松甫」銘の皿。肉眼観察では呉須が暗い色調である。呉須の線書部分は呉須が剥離し、表層に浮き上がって見えるのが特徴である。今までみてきた呉須の状態とは著しく異なる。呉須の浮遊粒子が多くみられる。38は色絵素地であるが、呉須は肉眼観察では暗い色調である。鉢の見込に描かれた龍の眼の部分であるが、

呉須が剥離し、浮き上がってみえる。呉須の周囲に気泡が集まってみえる。39は肉眼観察では呉須は青黒い。呉須部分は周縁に小さい気泡が集まってみえる。呉須の濃い滓が散在するが、点というよりつながったものが多い。ダミと思われるより淡い青の部分には小さい気泡がみえる。呉須の粒子も多い。茶色いものが少し点在するが、窯の天井からの落下物の一部であろう。40は肉眼観察によると呉須は青黒い。呉須のダミと思われる部分の拡大写真であり、呉須の滓が浮き上がり密集してみえる。周縁はそれが列をなしてみえ、ダミの重なりも認められる。呉須の上に気泡が散在してみえるが、ダミが重なり、より暗い色の上には気泡が少ない。41は肉眼観察によると呉須が青黒く、ギラッとした感じにみえる。拡大写真をみると、呉須の線書とダミ部分であるが、濃い線書に呉須の粒子がみえ、気泡の大きいものが点在するとともに小さい気泡が密集してみえる。淡いダミ部分は気泡が複雑に絡み合っており、不透明にみえる。42は焼成が不十分であり、肉眼観察でも呉須が黒ずんでみえる。拡大写真をみると、呉須の線書であるが、剥離して浮き上がり、黒くみえる。呉須の上に気泡はほとんどみえず、この回りの白磁部に小さな気泡がみえる。43は「南川原樋口造」銘の皿。肉眼観察では呉須は青黒い。拡大写真の呉須は線書とダミの部分である。濃い線書にダミをのせた部分の上には気泡はほとんどみられない。より淡い線書にダミ部分との境あたりに小さい気泡がみられる。44は「ヒ造」（樋口造）銘の皿。肉眼観察では呉須は暗い色調である。拡大写真は呉須の線書と淡いダミが加えられた部分である。白磁部と呉須線の境には大小の気泡が密集している。線書部分に呉須の粒子がみられる。45は「ヒ」（樋口）銘の皿。肉眼観察では呉須は暗い色調である。拡大写真は呉須の線書部分である。呉須線の周縁に大小の気泡が集まってみえる。呉須線部分には呉須の粒子がみられる。46は呉須の線書とダミの部分であり、呉須のより濃い方に大中小の気泡が多く集まってみえる。よって、呉須粒子はほとんどみられない。

1840～1870年代の樋口窯の染付の呉須をみると、47は「蔵春亭三保造」銘の皿。肉眼観察では呉須の色調は暗くみえる。拡大写真では、呉須の線書とダミの部分があり、線書部分の上に気泡が複雑に絡み合ってみえるので不透明である。ダミの濃い方には気泡はみられない。48は「蔵春亭三保造」銘の皿。肉眼観察では呉須の色調は暗くみえる。拡大写真ではダミ部分と思われるが、白磁部との境に大中小の気泡が集まってみえる。

3. まとめ

肉眼観察でみる呉須の違いがどのような理由によるものか、実体顕微鏡による観察結果でみてきたが、その要点を図25～27でまとめた。

焼成状態が良く、呉須の発色が良いと考えるもので、年代的な変遷でみたものが「呉須の比較1」、一方、焼成状態が悪くなく、呉須が黒ずんでみえるものを年代変遷で比較したものを

「呉須の比較2」としてまとめた。「呉須の比較1」の呉須の色調が良いものの変遷をみる。初期伊万里の6では線書部分とダミ部分の上に大中小の気泡が複雑に絡み合ってみえる。次の13に比べると、呉須線が6の方が明瞭にみえる。この差には素焼をするか否かが影響している可能性が考えられる。13の方が白濁しているようであり、小さい気泡列が複雑に絡まり合っているようにみえる。19は良質の線書の呉須で描いているが、呉須の上に大きな気泡が集まって見え、小さい気泡列もみられる。白磁部ではより小さい気泡がみえる。35は享和2年(1802)の有田の皿山庄屋勘右衛門からの願書に(宮田1975)、

皿山窯焼用茶碗絵葉の儀、近年払底つかまつり、その上、よろしき葉持ち渡り申さず、一統難儀に及び、罷り在り候処(窯焼一同が困っているところへ)近頃、幸い相応の葉見えきたり候につき、段々手を入れ示談に及び候処(略)

などであり、1802年の前の近い頃、中国からの呉須輸入が減り、質が落ちて困っていたが、近頃、幸いにも適当な質の呉須がみつき、交渉し試し焼きなどして、質が良いことを確かめたが、個人の力で購入することが困難であることなどを記す。文化6年(1809)にも皿山会所が呉須は中国の方でも手薄になり、日本への輸入が減って、価格が高騰し難渋していることを記す(宮田1975)ように、呉須の輸入量が減り、供給が不安定となったことが知られる。それを反映したものとして、肉眼観察でも、それまでとは違ってみえるのが、35であるが、焼成の具合で透明釉が完全に溶けていないように見え、筆者が感じるギラツとした呉須の見え方ではない。それは35のように呉須の線書の上に大中小の気泡で覆われている。しかし、より淡いダミの中に線書の輪郭が6・13に比べてくっきりと見え、強い呉須の濃さを感じる。これより、年代的に後になる図47は線書とダミの部分の気泡の集まり具合と輪郭が不鮮明である点は13・19に近いといえる。これは有田の豪商「蔵春亭三保造」銘を持つ皿であるが、こうした有田で豪商銘を入れるものは前述の記録にみえる、より良質の呉須を入手できることなどとの関係があるのであろうか。今後の検討課題である。

次に「呉須の比較2」にみる黒ずんだ色調の呉須の変遷である。生掛け焼成の初期伊万里の4では呉須線部分に大きな気泡がまばらにみえ、同じ初期伊万里でも良い色調の図25-6とはずいぶん異なることが一目瞭然である。さらに素焼を行う段階の17でもそれほど著しい差はなく、呉須の上の黒ずみが強いところにはほとんど気泡がみられない。周縁に大きい気泡が集まってみえるのである。そして18世紀末の34でも呉須のダミ部分にまばらに大きな気泡が散在的にみえる。大きく異なるのは前述の記録後とみられる40である。呉須のダミ上にも呉須の滓で覆われ、縁に滓が連なってみえる。呉須ダミの薄い部分中心に大きな気泡が散在してみえる。近い年代の図26-35とはずいぶん異なってみえるが、焼成状態の具合で35の釉が完全に溶けていないためと考えられる。

以上の観察結果から、有田での呉須の顕著な変化はシンクロトン光分析でもみられたことであるが、19世紀になり、コバルト量が減りマンガン量が極めて多く、記録上も18世紀末以降呉須の質が落ちたとあること、肉眼観察でも呉須の色調が青黒く、時にはギラつとした照りがみられるなどの変化があることを、今回の実体顕微鏡観察により、呉須が剥離し浮き上がってみえること、また、呉須の浮遊粒子が多くみえることにもとづくことを明示した。

有田の初期伊万里段階でも、呉須が肉眼観察で黒ずんでみえる場合（図26-4）、呉須部分の気泡が少ないこと、そこに呉須粒子がみえることによることも明らかになった。そして、1650年代以降、素焼を行う段階で、17世紀後半に呉須が青く発色良好な場合（図25-13）、呉須の上に、気泡が複雑に絡まり合い呉須を覆う場合に青くみえるのであり、同時期でも図27-17のように、呉須上に気泡がほとんどないと青黒くみえることも分かった。

そして、草創期に多いが焼成不良で酸化気味の場合（図3-5）、釉は黄ばみ、呉須が黒ずんでみえると説明してきたが、その場合の呉須部分には気泡がほとんどみられず、呉須粒子が多くみられ、白磁部分の釉は焼成良好の図3-6とはずいぶん違い、気泡も雑然とした状態で斑らに黄ばんだ凹凸のような状態にみえることもわかる。

以上のような肉眼観察だけでは明らかでなかった呉須の見え方の変化のメカニズムを解明するうえで、この実体顕微鏡を用いた観察は、一つの有効な方法として試みられたものである。

（大橋康二）

参考文献

- 太田典公・大橋康二・梅本孝征・佐藤文子・澤岡織里部 2019 「シンクロトン光による呉須顔料の非破壊分析と比較研究」『東洋陶磁第48号』東洋陶磁学会
- 浜野健也 1956 「長石質熔融物中における石英結晶粒子の溶解の微構造的な研究」『窯業協会誌64』
- 李應相・浜野健也 1973 「カオリンー長石系素地の焼き締め過程に関する研究」『窯業協会誌81』
- 宮田幸太郎 1975 『有田皿山の制度と生活』神近桂二
- 山脇悌二郎 1964 『長崎の唐人貿易』吉川弘文館

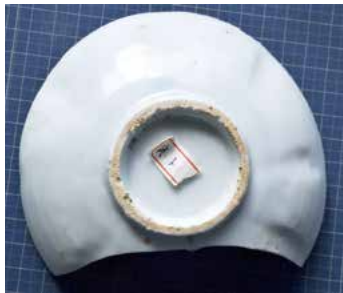
図版の凡例

- ・図は試料の内外面写真（内面だけのものもある）と実体顕微鏡による拡大写真をあげた。
- ・試料名の表記は次の順で表した。
通し番号、試料の種類と器種、試料番号、出土窯跡名（所在地）、焼成が生掛け（素焼きをせずに本焼1回で焼く）か素焼きをしたものかの別、推定製作年代
- ・拡大写真をみる上で参考となる特徴、推定焼成温度などを井上が記載した。
- ・写真は基本的に井上が撮影したものである。ただし一部試料の内外面写真で大橋が撮影したものがある。
通し番号で記すと、28の内面、29の内面、32の内面、34の内面、40の内外面である。
- ・試料は全て佐賀県立九州陶磁文化館保管資料であるが、所蔵については、天神森窯、長吉谷窯、柿右衛門窯、樋口窯（19のみ佐賀県立九州陶磁文化館蔵）については有田町教育委員会所蔵であり、他は佐賀県立九州陶磁文化館所蔵資料である。

1. 染付皿 No. 1・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・表面染付部・実態顕微鏡+デジタルカメラ拡大撮影(以下同じ)
- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化の中に熱膨張した未溶解の白い粒子（長石・石英？）が数多く混在する。窯の温度は低く 1150℃～1200℃であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。



2. 染付皿 No. 3・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150℃～1200℃であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。

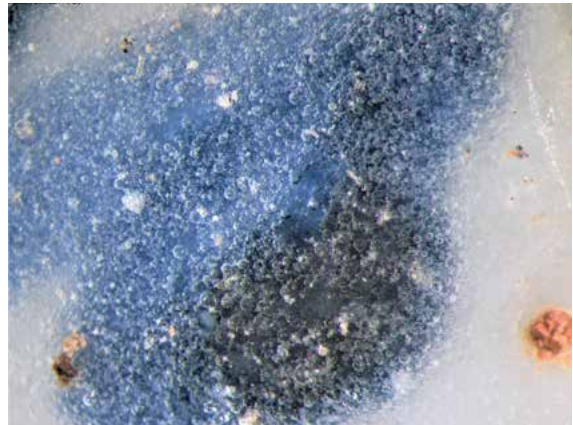


図 1

3. 染付皿 No. 5・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150℃～1200℃であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。
- ・釉薬上に窯から落下した粘土粒がある。粘土粒子は中央に孔がない。



4. 染付皿 No. 4・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150℃～1200℃であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。

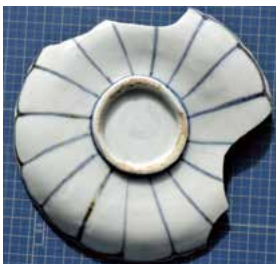
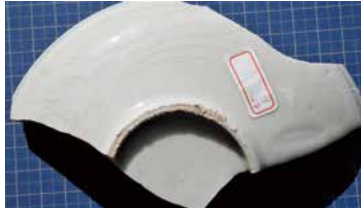


図 2

5. 染付皿 No. 2・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



- ・窯の温度は低く 1150℃～1200℃であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。
- ・この作品では釉薬内の気泡は透光性が改善し数量も多く大きい。呉須粒子が顕著にみえる。



6. 染付皿 No. 9・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。

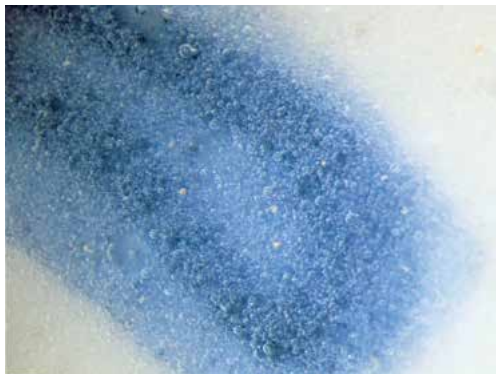
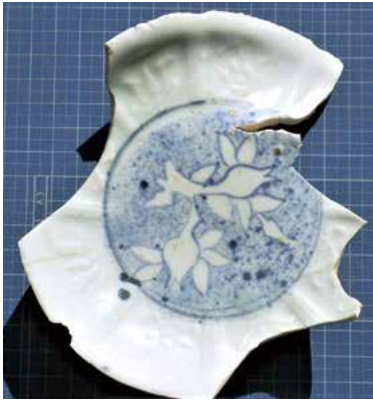


図3

7. 染付皿 No. 8・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



8. 染付皿 No. 11・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。・釉薬内の気泡は多く大きい。

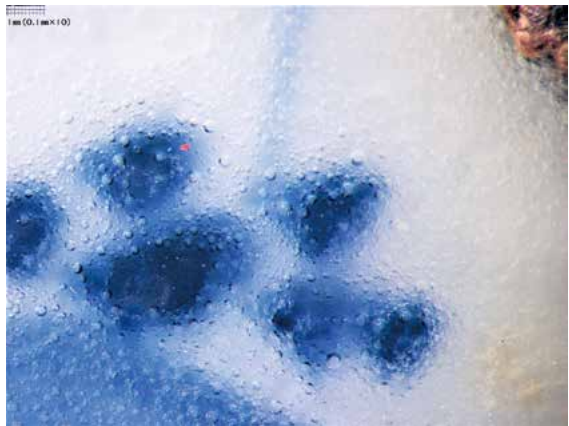


図 4

9. 染付皿 No. 13・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



10. 染付絵皿 No. 7・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。

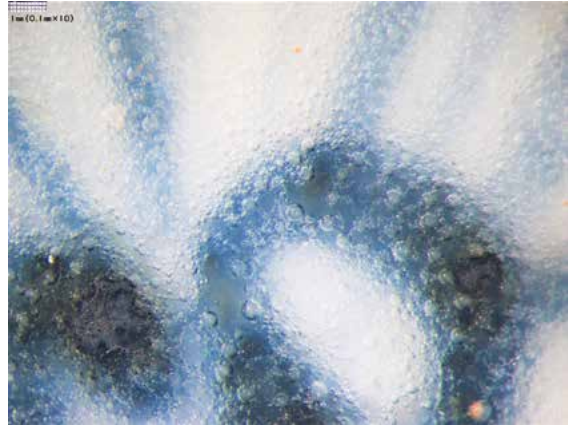


図 5

11. 染付皿 No. 10・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。
- ・呉須は天神森窯に比較し発色も良く、釉薬内の呉須粒子も少ない。



12. 染付皿 No. 12・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



- ・窯の温度は天神森より改善され 1200℃～1250℃であろう。気泡も多く、大きい透光性が高い。
- ・この製品の呉須は発色が悪い。釉薬内の呉須粒子も少ない。
- ・釉薬内の気泡は多く大きい。



図 6

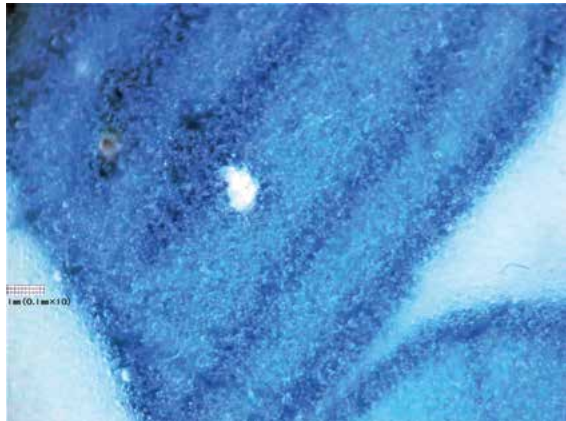
13. 染付皿 No. 20・長吉谷窯(有田町)・素焼・1655-1670年代



・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未熔融の微細な白い粒子(長石・石英?)がわずかに観察される。窯の温度は1200℃～1250℃であろう。気泡は小さく透光性が高い。

・素地は素焼きされ、生掛けタイプと比較して気泡の量が減り小さい。呉須粒子・生地は素焼きされ、釉薬内に呉須粒子は確認できず発色も良い。

・釉薬内の気泡は天神森窯・窯ノ辻窯に比較して小さい。



14. 染付皿 No. 19・長吉谷窯(有田町)・素焼・1655-1670年代



・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未熔融の微細な白い粒子(長石・石英?)がわずかに観察される。窯の温度は1200℃～1250℃であろう。気泡は小さく透光性が高い。

・素地は素焼きされ、生掛けタイプと比較して気泡の量が減り小さい。呉須粒子・素地は素焼きされているので釉薬内に呉須粒子は確認できず発色良い。

・釉薬内の気泡は天神森・窯ノ辻窯に比較して小さい。

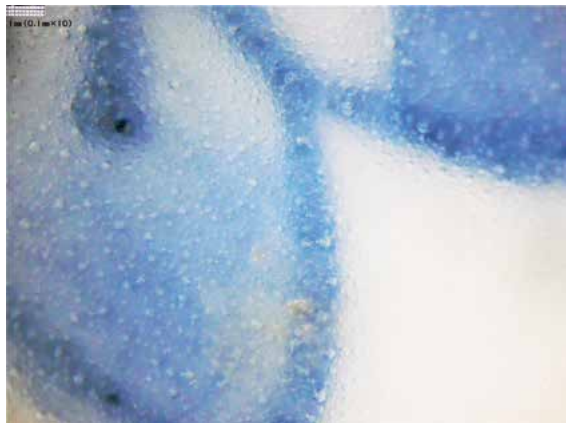
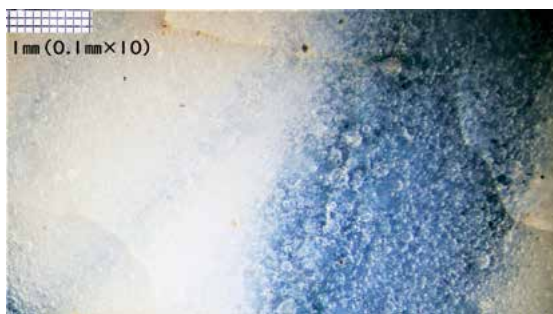


図7

15. 染付碗（東南アジア向）No. 21・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



- ・表面染付部・実体顕微鏡+デジタルカメラ拡大撮影（以下同じ）
- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化の中に熱膨張した未溶解の白い粒子（長石・石英?）が数多く混在する。窯の温度は低く 1150℃～1200℃であろう。気泡も多く、大きい。中には白濁したものがみられる。
- ・素地の結晶水は放出時に呉須粒子が浮き上がり微細な粒子となって釉薬内に多く点在する。



16. 染付皿 No. 18・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未溶解の微細な白い粒子（長石・石英?）がわずかに観察される。窯の温度は 1200℃～1250℃であろう。気泡は小さく透光性が高い。
- ・生地は素焼きされているので釉薬内に呉須粒子は確認できず発色も良い。

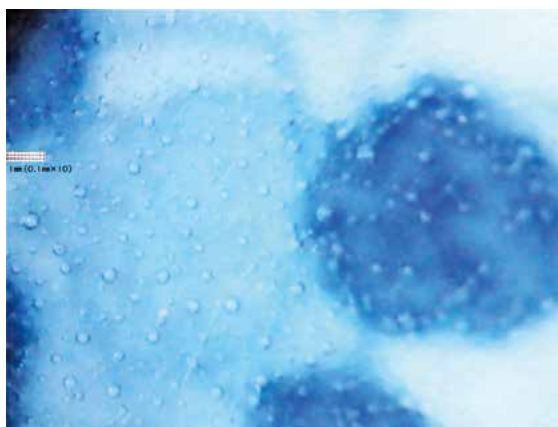
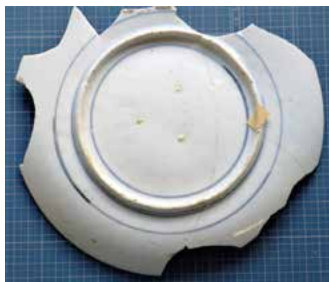
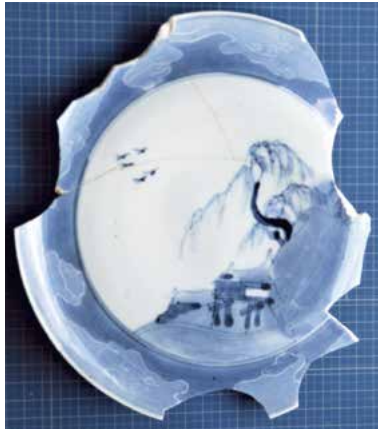
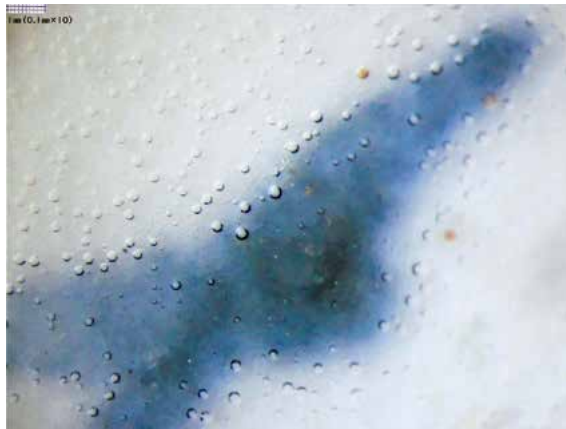


図 8

17. 染付皿 No. 16・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



- ・素地・釉薬は半透明のガラス質化している。中に未熔融の微細な白い粒子（長石・石英？）がわずかに観察される。窯の温度は 1200℃～1250℃であろう。気泡は小さく透光性が高い。
- ・生地は素焼きされているので釉薬内に呉須粒子は確認できず発色も良い。
- ・釉薬上に窯から落下した粘土粒（中央に孔）がある。



18. 染付小鉢 No. 24・柿右衛門窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・線傷は発掘作業時の傷であろう。
- ・釉薬層に未熔融粒子が観察できる。
- ・還元焼成温度に達し呉須の発色は良い。呉須の剥離状態、浮遊粒子はない。還元焼成温度もぎりぎりと思われる。
- ・気泡の透明性は低い。

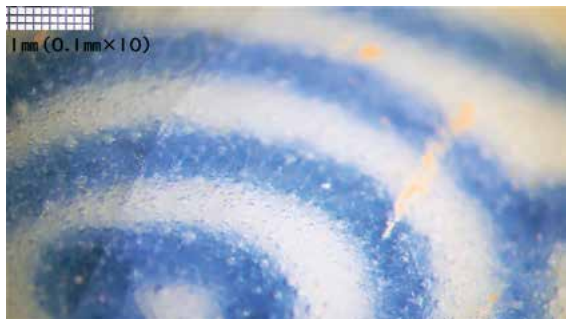
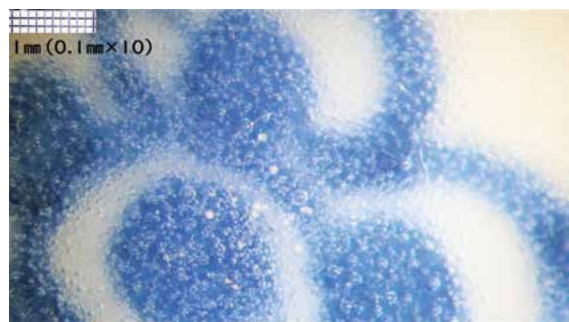


図 9

19. 染付猪口 No. 23・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子がある。
- ・還元焼成温度に達し呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡が多く観察できない。還元焼成温度もぎりぎりと思われる。
- ・気泡の透明度は低い。



20. 染付皿 No. 30・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1740 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子はなく適正な高温焼成がおこなわれた。
- ・呉須発色もよく釉薬内に呉須の剥離、浮遊粒子が僅かにある。還元焼成も確保された。
- ・気泡の透明性も良い。
- ・線傷は発掘時の傷であろう。

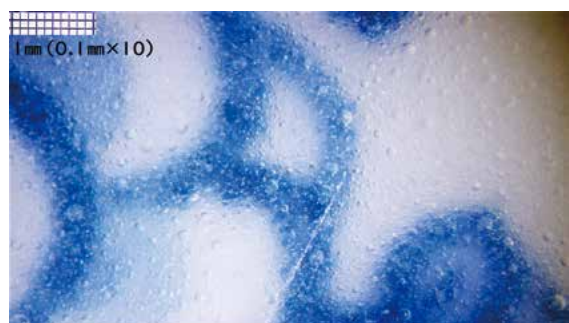


図 10

21. 染付皿（色絵素地）No. 25・南川原窯ノ辻窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層に未熔融粒子は確認できない。適正な高温焼成が行われた。
- ・呉須発色良い。呉須付近の気泡は大きい。呉須の浮遊粒子がわずかにある。
- ・気泡に透明性は低い。



22. 染付皿 No. 29・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層の未熔融粒子は1個、確認された。適正な高温焼成がおこなわれた。
- ・呉須発色もよく釉薬内に呉須の剥離、浮遊粒子はない。還元焼成も確保された。
- ・気泡の透明性も良い。
- ・焼成温度は1200℃～1250℃であろう。

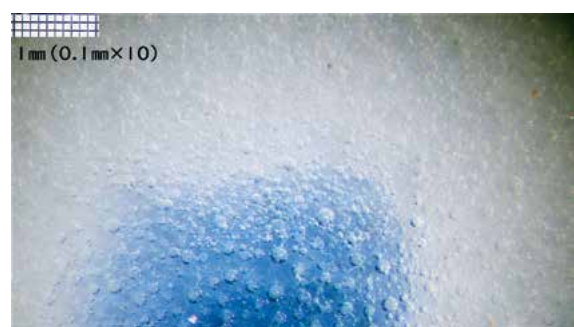


図 11

23. 染付皿 No. 28・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・呉須の薄い個所の発色は良いが濃色個所の発色は不完全である。呉須の剥離、浮遊粒子はない。
- ・焼成温度は還元焼成温度の前後であろう。
- ・落下粘土粒子がある。中央に水蒸気がでた孔がある。



24. 染付皿 No. 26・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代



- ・釉薬層に未溶融粒子は観察できない。
- ・呉須発色良い。呉須付近の気泡は大きい。呉須の剥離、浮遊粒子はない。
- ・気泡に透明性がある。

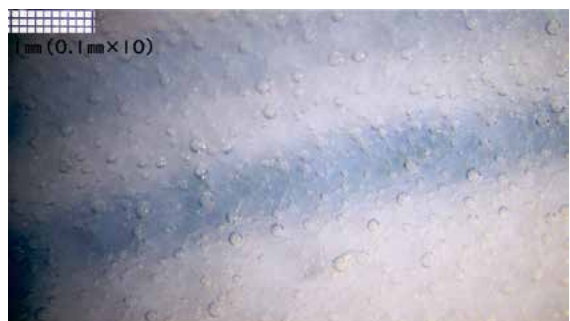
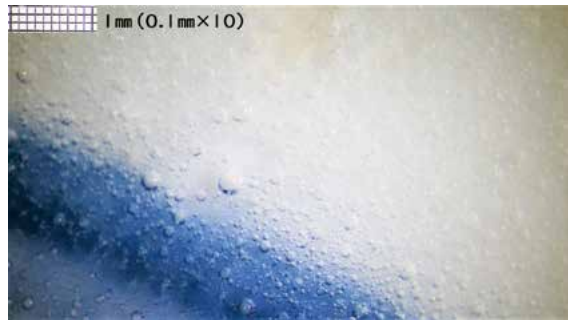


図 12

25. 染付皿 No. 34・樋口窯 (有田町)・素焼・1730-1760 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子はなく完全に溶解している。
- ・呉須発色もよく呉須の浮遊粒子が僅かにある。
- ・気泡の透明性が高い。



26. 染付皿 (欧州向) No. 33・樋口窯 (有田町)・素焼・1700-1750 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子が観察できる。
- ・呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡が多く観察ができない。
- ・線傷は発掘時についたものであろう。
- ・還元焼成温度に近い温度で焼成されたのであろう。



図 13

27. 染付皿（色絵素地）No. 32・樋口窯（有田町）・素焼・1730-1750 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子もなく完璧な仕上がり状態である。
- ・呉須の剥離、浮遊粒子がある。
- ・現代窯業技術と遜色がない。



28. 染付皿 No. 31・樋口窯（有田町）・素焼・1730-1750 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子が多く散見され適正な高温焼成が確保できなかった。
- ・呉須発色はよく、呉須の剥離、浮遊粒子が観察できる。
- ・気泡の透明度は悪い。

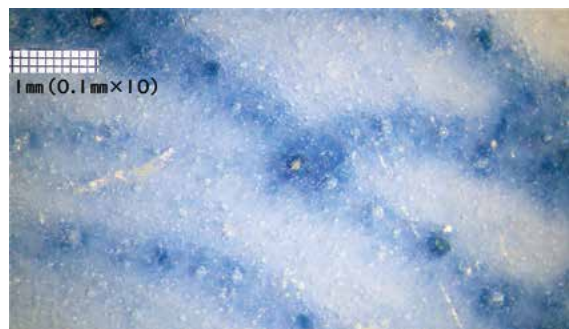
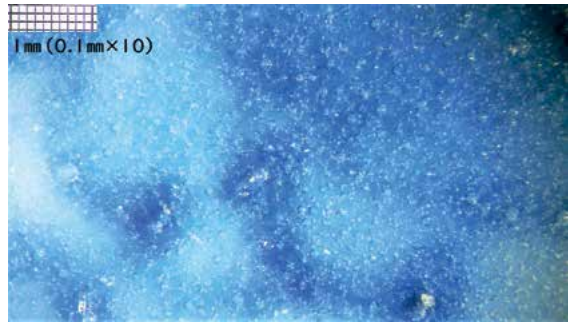


図 14

29. 染付皿 No. 38・樋口窯 (有田町)・素焼・1730-1760 年代



- ・釉薬層に微小な未熔融粒子が観察される。完全な熔融に至っている。このような状態の製品は現代製品でもある。
- ・呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡の影響で観察ができない。
- ・気泡の透明性もある。
- ・釉薬層に微小な未熔融粒子が観察される。完全な熔融に至っている。このような状態の製品は現代製品でもある。



30. 染付皿 No. 36・樋口窯 (有田町)・素焼・1740-1760 年代



- ・未熔融粒子はあるが還元焼成温度に達している。現代製品でも未熔融粒子はある。
- ・呉須の発色は良く、呉須の浮遊粒子が僅かに観察される。
- ・気泡の透明性も良い。

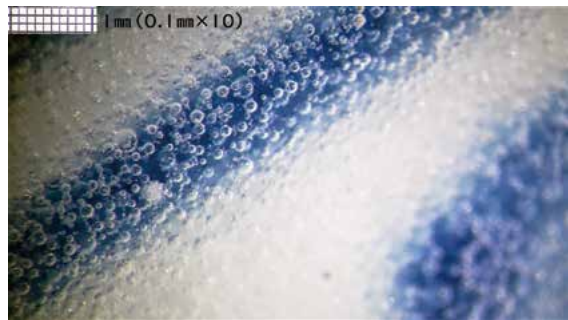
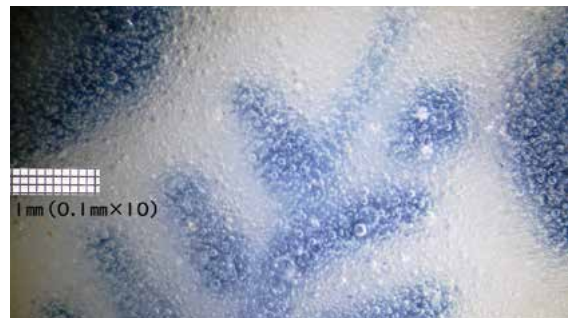


図 15

31. 染付皿 No. 37・樋口窯（有田町）・素焼・1750-1770 年代



- ・完全溶融していない。未溶融粒子が観察される。
- ・呉須の発色は良い。呉須の剥離、浮遊粒子は気泡が多く観察ができない。
- ・気泡の透明性もわるい。適正な高温焼成が確保できなかった。



32. 染付皿 No. 39・樋口窯（有田町）・素焼・1750-1770 年代



- ・未溶融粒子が多く観察できる。
- ・気泡の透明性はやや落ちる。
- ・呉須の発色は良い。呉須の浮遊粒子は気泡が多く観察が難しい。酸化鉄・酸化マンガンに由来する物質が釉薬表面に浮き出ている。
- ・適正な高温焼成に達していない。

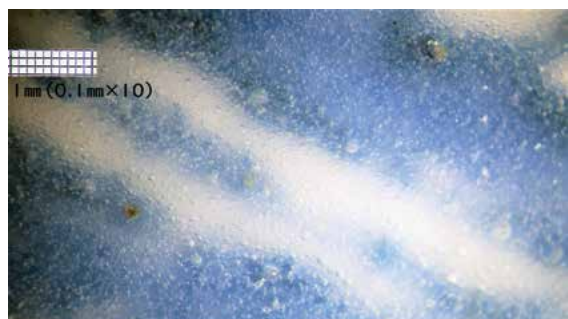
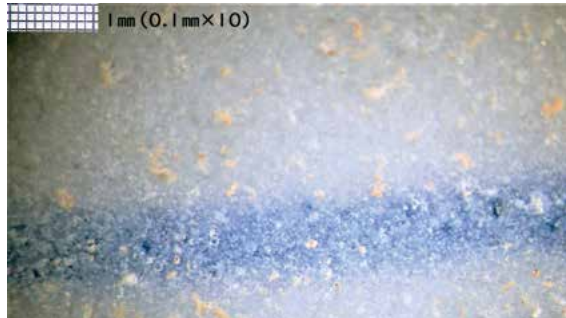


図 16

33. 染付皿 No. 35・樋口窯 (有田町)・素焼・1740-1750 年代



- ・高温焼成がうまくいかず全体に未熔融粒子が多い。失敗作の製品である。
- ・呉須の発色は良い。呉須の剥離は浮遊粒子が多く観察ができない。
- ・気泡も白濁している。



34. 染付皿 No. 40・樋口窯 (有田町)・素焼・1780-1790 年代



- ・未熔融粒子がわずかにある。現代製品でも未熔融粒子は存在する。
- ・呉須の発色も良い。完全な還元焼成に達している。呉須の浮遊粒子はある。
- ・気泡も透明性がある。

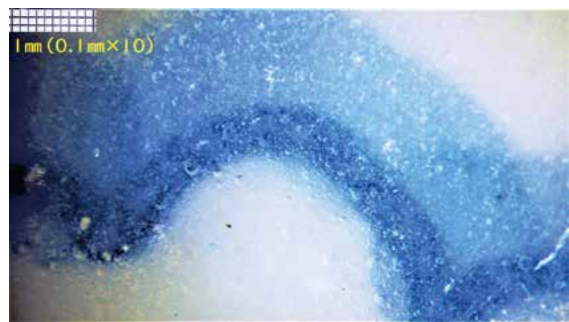


図 17

35. 染付皿 No. 43・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



- ・未熔融粒子が多く釉薬層の透明度が落ちる。
- ・透明度が悪いので呉須の観察は困難である。濃色個所で呉須浮遊粒子が観察できる。
- ・気泡も濁り透明度が落ちる。



36. 染付皿 No. 44・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1820 年代



- ・釉薬層内に未熔融粒子が観察される。
- ・気泡が多いが呉須浮遊粒子が観察される。呉須発色は良い。
- ・気泡の透明度は落ちる。

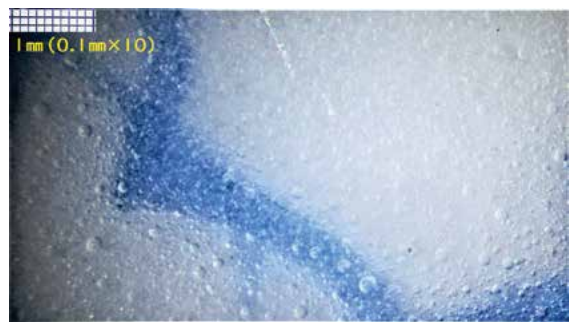
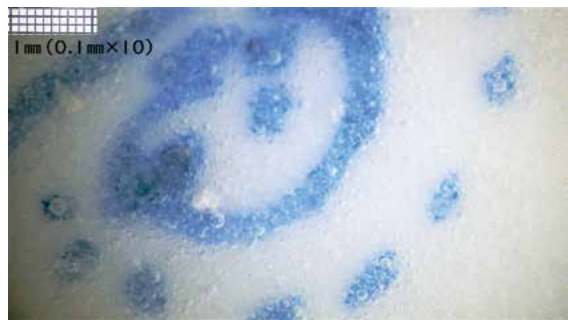


図 18

37. 染付皿 No. 42・樋口窯 (有田町)・素焼・1780-1810 年代



- ・呉須の絵は剥離し表層に浮き上がるもの、浮遊粒子となって釉薬層内に多くみられる。呉須材料が変わったか？
- ・長石、石英などの未熔融粒子はある。
- ・気泡の透明度は落ちる。・高温焼成は適正である。



38. 染付皿 (色絵素地) No. 47・樋口窯 (有田町)・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未熔融粒子はない。素地もガラス質で適正な高温焼成に達している。
- ・龍の眼と思われる。呉須の剥離中の段階から浮遊粒子になるまでが分かる。
- ・気泡は透明度が高い。

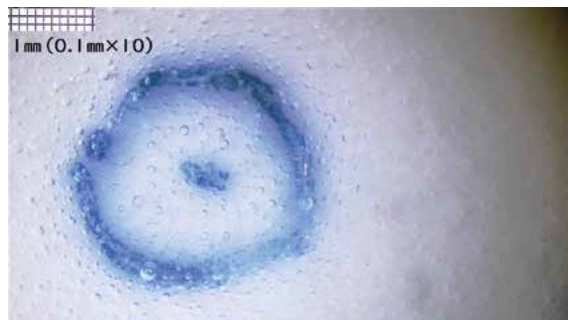
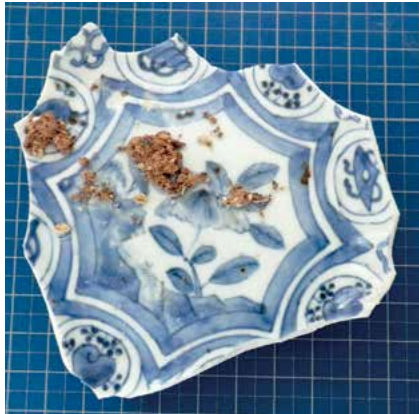
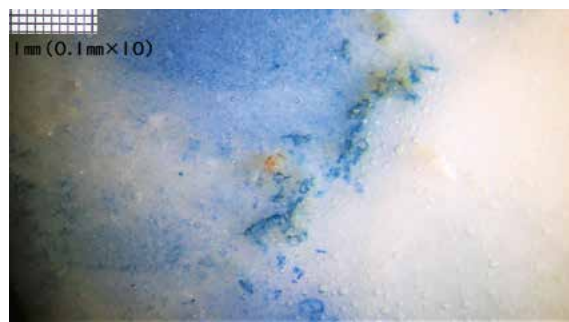


図 19

39. 染付皿 No. 41・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



- ・呉須の絵は剥離し表層に浮き上がるもの、浮遊粒子となって釉薬層内に多くみられる。呉須材料に問題がある。
- ・長石、石英などの未溶融粒子はある。・気泡は透明である。
- ・高温焼成は適正である。



40. 染付皿 No. 45・樋口窯（有田町）・素焼・1810-1840 年代



- ・釉薬層内の未溶融粒子が僅かにある。この程度は現代製品でもある。
- ・呉須は全体の浮遊粒子となっている。左側の白磁部との境に乱れた線として残っている。

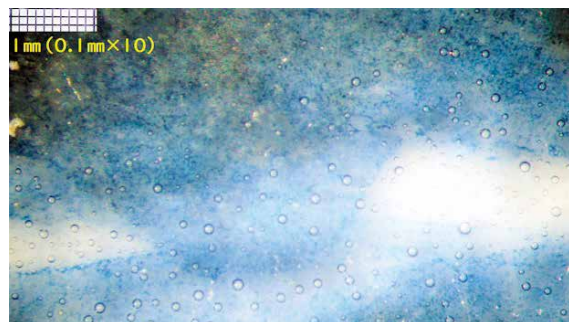


図 20

41. 染付皿 No. 46・樋口窯 (有田町)・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層の未熔融粒子が多い。
- ・呉須の発色は良い。呉須の浮遊粒子は多く、左上の線は呉須の剥離段階が分かる。
- ・未熔融粒子はあるが気泡は透明度高い。適正な高温焼成より低い。



42. 染付皿 No. 55・樋口窯 (有田町)・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬内に未熔融粒子ある。右上から右にかけて特に多い。
- ・呉須発色は悪い。呉須は剥離状態から浮遊粒子となっている。
- ・気泡の透明度も落ちる。還元焼成時に酸素の遮断がうまく行かなかった可能性がある。

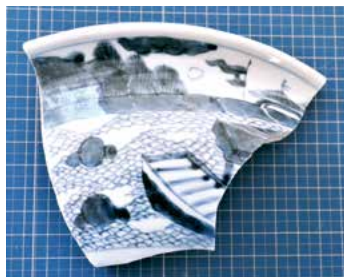
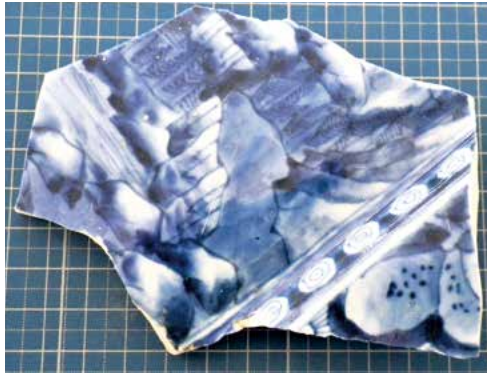


図 21

43. 染付皿 No. 50・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子が僅かにある。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し、線は斑状になっている。剥離した呉須から浮遊粒子に変わりつつあるのも観察される。
- ・気泡の透明度が高い。



44. 染付皿 No. 49・樋口窯（有田町）・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子が僅かにある。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し斑状になっている。剥離した呉須は浮遊粒子に変わり線が不鮮明になっている。
- ・気泡の透明度が高い。

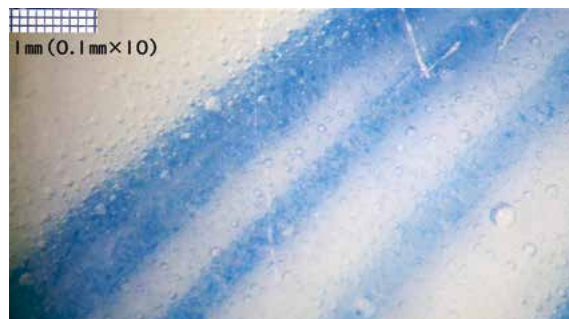
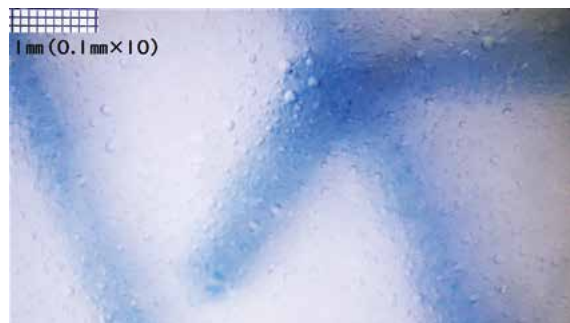


図 22

45. 染付皿 No. 51・樋口窯 (有田町)・素焼・1820-1860 年代



- ・釉薬層の透明度は高い。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し浮いているのが分かる。剥離した呉須から浮遊粒子に変わりつつあるのも観察される。
- ・気泡の透明度が高い。



46. 染付皿 No. 48・樋口窯 (有田町)・素焼・1820-1860 年代

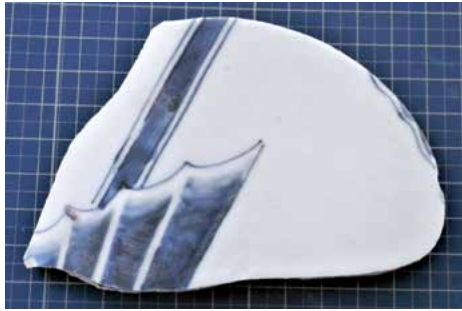


- ・釉薬層に未溶解粒子が僅かにある。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離し浮いているのが分かる。剥離した呉須から浮遊粒子に変わりつつあるのも観察される。
- ・気泡は透明度が高い。



図 23

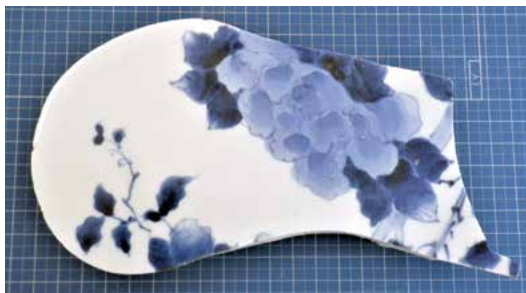
47. 染付皿（蔵春亭三保）No. 53・樋口窯（有田町）・素焼・1840-1870 年代



- ・釉薬層に未溶解粒子はない。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離中あるいは浮遊粒子となっている。写真の左側は剥離後の斑状の模様がみえる。
- ・気泡の透明度が高い。



48. 染付皿（蔵春亭三保）No. 52・樋口窯（有田町）・素焼・1840-1870 年代



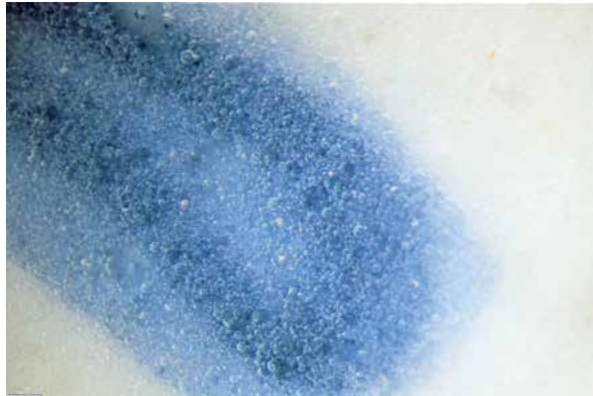
- ・釉薬層に未溶解粒子はない。
- ・呉須の発色良い。呉須は剥離中あるいは浮遊粒子となっている。
- ・気泡の透明度が高い。



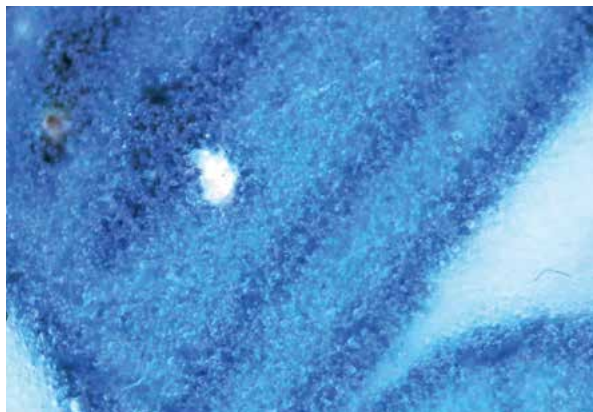
図 24

呉須の比較 1 良い（より明るい）色調

6. 染付皿 No. 9・窯ノ辻窯（武雄市山内町）・生掛け・1630-1640 年代



13. 染付皿 No. 20・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



19. 染付猪口 No. 23・樋口窯（有田町）・素焼・1690-1730 年代

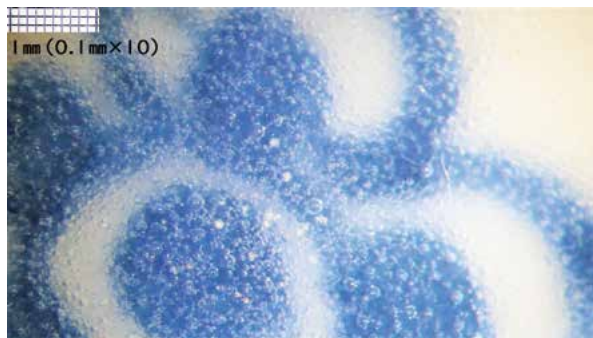
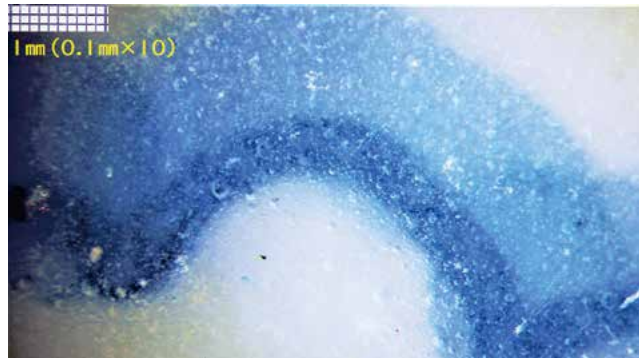
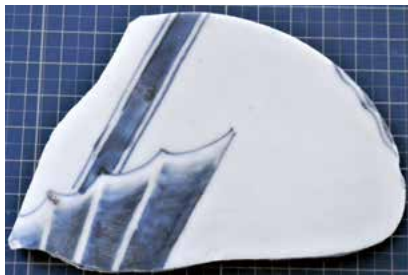


図 25

35. 染付皿 No. 43・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1810 年代



47. 染付皿（蔵春亭三保）No. 53・樋口窯（有田町）・素焼・1840-1870 年代



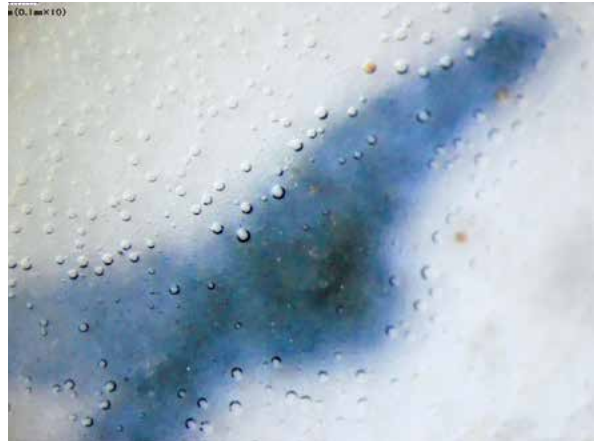
呉須の比較2 黒ずんだ色調

4. 染付皿 No. 4・天神森窯（有田町）・生掛け・1610-1630 年代



図 26

17. 染付皿 No. 16・長吉谷窯（有田町）・素焼・1655-1670 年代



34. 染付皿 No. 40・樋口窯（有田町）・素焼・1780-1790 年代



40. 染付皿 No. 45・樋口窯（有田町）・素焼・1810-1840 年代

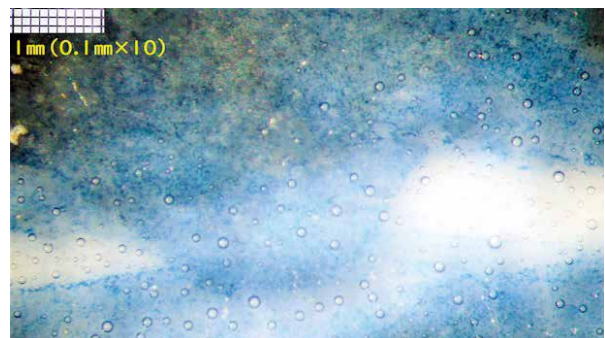


図 27

19 世紀後半における有田と三川内の輸出品に関する研究

—薄手磁器を中心として—

鈴田由紀夫

はじめに

海外に輸出された 17 世紀後半から 18 世紀前半の肥前磁器は、世界各地の宮殿や美術館などにおいて多く目にすることができる。この年代の製品に次いでみられるのが、19 世紀後半の有田焼と三川内焼である。中でも極端に薄く軽く作られた蓋付碗類は、大型の花瓶類とともにその時代の輸出品の特徴を示している。この薄手磁器は原料等の要因により三川内素地が優位とされ、有田に素地が移入されることが行われた。また商社や窯元のブランド銘がこの時代から製品に入れられるようになった。本論考は薄手磁器を中心とした三川内素地の有田焼利用と、ブランド銘の変遷に着目して 19 世紀後半の製品の特長について考察するものである。

1. 有田と三川内の薄手磁器



図 1 皿 蓋 碗
館蔵（山口裕也氏寄贈）

（1）三川内素地の有田利用

この色絵碗皿には皿、蓋、碗それぞれに染付で「満宝山枝栄造」と記され、その上から赤絵で「肥前山信甫造」と記されている。満宝山枝

栄とは明治 4 年（1871）に設立された三川内焼の貿易商社満宝山商舗のブランド銘である。肥前山信甫とは安政 3 年（1856）に佐賀藩から許可を得て貿易を開始した田代紋左衛門のブランド銘である。この二つのブランド銘が重なっている製品は何を意味しているのか。

『肥前陶磁史考』に「薄手物の三河内注文」という項があり「真白の色相と、軽き薄手物を愛する欧米人は、有田焼よりも寧ろ三河内焼を嗜好した。然も有田よりは、三河内の方が安値にて、製し得る素地の可能性がある。故に蔵春亭の貿易時代より、薄手物の普通級品丈は、三河内へ注文製作の上、それを有田にて赤絵附を施した物であった。」と記述されている^{註1}。この色絵碗皿はまさにこうした生産構図を証明する資料である。

江戸末期から明治初期にかけて、こうした生産の仕組みにより作られた輸出品は多いと考えられるが、図 1 のように有田側の製品として仕上げられたものに三川内側の銘を記したものは少ない。多くは白磁のまま有田側へ渡され、有田で「蔵春亭三保造」や「肥前山信甫造」のブランド銘が上絵付けされて輸出されている。この三川内素地・有田上絵付けの色絵製品と有田素地・有田上絵付けの薄手色絵製品は区別が困難であり、曖昧なまま最終的なブランド銘による製作者を表示しているのが実状である。



図2 大英博物館所蔵
©The British Museum



図3 館蔵
(高取家コレクション)

三川内素地の問題は薄手磁器に限らず、置物においても見受けられる。図2の鯉置物は久富与次兵衛によるもので「蔵春亭三保造」の銘がある^{注2}。

図3は国内に伝世した白磁の鯉置物である。素地は白く、釉薬の溜まりが僅かに黄緑色がかかり、目に染付の点を施すなど随所に三川内焼の特徴がみられる。銘はないが、箱書きには「三河内焼 飛龍床置」と墨書されている。「三河内」という表記は「三川内」と併用されてきたが、古くは「三河内」の方がより多く用いられている。三川内の窯業は薄手磁器生産とともにこうした細工物を得意とし、置物類に優れた作品がみられる。有田でも17世紀から各種の細工物が作られているが、19世紀においては素地の白さや細工の細かさでは三川内の方が優位である。こうした状況において久富与次兵衛は素地を三川内から仕入れ、有田で上絵付けて輸出した。薄手碗皿ほど事例は多くないが、置物素地の三川内外注は江戸末期の輸出品生産の特色を示している。

久富や田代による三川内素地利用は、貿易商としては合理的な方策であったと考えられる。品質が良く低価格であれば製品の発注は自ずとそちら側に向けられよう。久富は生産組織を持たないが、田代は登り窯を保有し自前の生産組織を有していた。しかし田代も久富と同じく薄手磁器については三川内から仕入れていた^{注3}。この三川内素地に有田上絵付けの手法は、形式上は違法となっていた。前掲書の『肥前陶磁史考』には「勿論宗藩の典法としては、堅く之を禁制されあるも、長崎奉行は国益上の見地より、黙許してゐたのである。」と書かれている^{注4}。販売される有田焼は、素地から上絵付けまですべて有田で完結しなければならないというのが当時の産地の認識である。この認識は商人としての久富や田代にとっては不合理であったと考えられるが、この実態との齟齬が有田の生産者である窯元達的不满となり、田代は慶応2年(1866)に窯元達から糾弾された^{注5}。このことが契機となり明治元年(1868)には、田代の他に長崎輸出の鑑札が9枚増加され、深川栄左衛門などの窯元が新たな貿易商として輸出事業に参入した^{注6}。結果的にみると久富や田代の手法が廃止された訳ではなく、明治4年以降の資料である図1の製品のように三川内と有田の組み合わせは再開しており、糾弾側であった深川栄左衛門も明治6年(1873)のウィーン万国博覧会出品に際して、薄手珈琲器を三川内に注文している^{注7}。

図4の珈琲セットは蘭のマークと深川製の銘が赤絵で入れられている。香蘭社は深川・辻・深海の3つの窯元によって明治8年(1875)に設立され、製品にはどの工場で作られたか分かるように蘭のマークとそれぞれの名前をいれることになっていた。この場合は深川の製品とい



図4 赤絵金彩人物文碗皿揃物 館蔵（山口智也氏寄贈）

うことになる。碗皿等の素地は薄く作られ、三川内製の可能性は高い。また絵付けは赤と金彩でなされ、これも三川内の得意とする表現である^{注8}。

三川内の色絵については「金爛（ママ）錦附二度焼は慶応元年金氏多三郎、田中数之助、今村豊寿、森利喜松、之を始む」とある^{注9}。金爛錦付とは金彩を伴う上絵付のことであるが、恐らく赤絵金彩を意味していると考えられる。二度焼きをするのは赤絵を施したあと一度目の上絵付焼成を行い、さらに金彩を赤絵の上から描いて二度目の焼成を行う方法である。この手法は赤絵と金彩の発色温度が通常は金彩の方が低いため、最初に焼成温度の高い赤絵を仕上げ、金彩を後で施し二度目の焼成は少し低い温度で行う。最初に描いた赤が焼成によって定着しているため、金彩の文様を鮮明に描くことができる^{注10}。この技法が慶応元年（1865）に始められたことになるが、4名の赤絵業者の中に森利喜松の名がある。『三川内窯業沿革史』には「明治五年博覧会出品の目的を以て有田深川栄左右（ママ）エ門より紅茶々碗錦付の注文に接し之か焼付をなし高評を博す 但六ヶ仙画極彩色、赤絵付人森利喜松」と書かれている^{注11}。明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に出品するために有田の深川栄左衛門が三川内の森利喜松に六歌仙の文様を施した紅茶碗を発注し、さらに森は「明治九年有田深川栄左右（ママ）エ門より錦付の注文を受け之か焼付をなし大に高評を博す爾来十有余年の間に於ける有田香蘭社発売の金蘭（ママ）付は殆ど氏の手に成る」と記されている^{注12}。図4の揃い物も六歌仙と思われる文様であり、深川栄左衛門から森利喜松に発注された一連の赤絵金彩の製品と推測される。

香蘭社から明治9年（1886）のフィラデルフィア万国博覧会に出品されたリストには、三川内製の「錦六歌仙外葵金欄画二度焼」や「錦二度焼六人武者外葵画」の「カヒー碗」12揃が載せられている^{注13}。

明治10年（1887）の第1回内国勸業博覧会佐賀県出品目録には「錦二度焼浪兎画」の花生が香蘭社から出品されている^{注14}。また明治11年（1888）のパリ万国博覧会には同社から「錦二度焼武者絵」の花生と「錦二度焼六ヶ仙画」の茶碗が出品されている^{注15}。両者とも多くの錦付けの製品の中で二度焼の製品は極めて少数であるため、かなり特殊な技法であったと考えられる。

図5の花瓶はビクトリア&アルバートミュージアムの所蔵品で、三川内素地に有田の香蘭社で上絵付けを施した製品である^{注16}。底部には「大日本三河内製」と呉須で記され無釉部であるため黒く発色している。その周囲には上絵赤で「於香蘭社（蘭マーク）西山製」と記され、蘭マークは金彩で描かれている^{注17}。



図5 香蘭社製 「大日本三河内製」(呉須の黒色)、
©Victoria and Albert Museum, London 「於香蘭社(蘭マーク)西山製」
(蘭マークは金彩、他は赤色)

当資料は明治9年(1876)のフィラデルフィア万国博覧会へ出品され、1877年にV&Aが購入したものである^{注18}。製作年代は1875年頃とされている。万国博覧会出品であるため、その前年作という解釈であろう。香蘭社は明治8年

(1875)に設立されており、最初期の製品ということになる。蘭マークの形がまだ整っておらず、初期の特徴を示している^{注19}。上絵付けを施した西山は有田中野原の西山孝蔵(前名孫一)と推定され、赤絵屋16軒の一人で明治22年(1889)に55歳で没している^{注20}。明治4年の廃藩によって営業が自由になったとはいえ、香蘭社で上絵付部門まで一貫して整備する前の段階では、各種の工程が外注で賄われていた様子をうかがうことができる。また薄手素地以外にも三川内と有田の連携があったことを物語る資料である。注1 中島浩気1985年(原著1936年)『肥前陶磁史考』p537

注2 大橋康二名誉顧問のご教示による。またチェコフルボカ城(Hluboka castle)に類品が2点あり(IDNo755とID不明の同型品)、フランスからの里帰りの個人蔵品もある(表1No32)。チェコ情報は名誉顧問と山本文子学芸員によって2019年3月に実施された「伝統的有田焼再認識プロモーション事業」在外資料所在調査による。

注3 『肥前陶磁史考』p537

注4 同前p537

注5 同前p538

注6 同前p548

注7 高橋久満治1911年『三川内窯業沿革史』p22、『肥前陶磁史考』p241・539

注8 赤絵金彩の表現は、有田焼においては17世紀末の柿右衛門様式の色絵龍鳳凰文皿にすでにあり、また19世紀の九谷焼や湖東焼において流行しているが、肥前においては有田焼より三川内焼の薄手磁器に多用されている(鈴田由紀夫2020年「有田の赤絵金彩と九谷焼」p76-80『九谷を拓く』第3号 石川県九谷焼美術館紀要)。

注9 『三川内窯業沿革史』p21およびp70にも類似の表現あり。

注10 佐賀県窯業技術センター寺崎信氏のご教示による。

注11 『三川内窯業沿革史』p22

注12 『三川内窯業沿革史』p70

注13 森谷美保 2015年「香蘭社の誕生と『温知図録』編纂を巡ってー納富介次郎とフィラデルフィア万博を中心にー」p30 目録130号、p31 目録141号『明治有田 超絶の美 万国博覧会の時代』論考集

注14 前山博「明治前期、内外博覧会出品の陶磁器についてー佐賀・長崎県行政資料などからー」表1 佐賀県立九州陶磁文化館 1983年『近代の九州陶磁展』p135No87

注15 同前書表2p140No146・147

注16 松下久子2014年「ヨーロッパに現存する平戸焼についての一考察」p42・43『東洋陶磁 第43号』

注17 松下久子2016年「明治期の三川内焼顕在化への取り組みについてー国内外の博覧会出品をめぐるー」『長崎歴史文化博物館 研究紀要 第10号』p120及び図6にはカラー図版が載せられており、銘の色や作品の別面が確認できる。

注 18 前掲書注 13 の p31 目録 155 号の「錦鳳凰金外ダミ松竹梅画」の花生一對 5 寸 5 分が文様寸法ともに該当する。

注 19 鈴木由紀夫 2022 年『香蘭社－歴史と作品変遷－』p17 の蘭マーク変遷図参照。

注 20 『肥前陶磁史考』p575

（２）19 世紀における有田と三川内の輸出について

17 世紀に始まるオランダ東インド会社による有田焼の海外輸出は、宝暦 7 年（1757）に公式輸出が終止した。しかし輸出が完全になくなった訳ではなく、私貿易によって輸出は行われたと考えられる。『皿山代官旧記覚書』には明和 7 年（1770）・9 年（1772）、安永 5 年（1776）、天明 7 年（1787）の項にそれぞれの時期の輸出状況についての記述がある^{注1}。明和 7 年の項では「近年有田皿山陶器唐阿蘭陀向不景気」とあり、中国とオランダ向けの輸出が不振であったことが伺える。

三川内については『平戸藩窯（三川内焼）と鶴峰園 三猿』では文化文政の間に「三川内の商人、大野慶介、大野甚造、中里利助等、長崎に往来して蘭人との貿易を為す。」とある^{注2}。また『三川内窯業沿革史』には「天保元年蘭人長崎に來り本山製の珈琲具を嗜好す茲に貿易取引をなす則ち海外輸出の濫觴なり」と記されている^{注3}。天保元年（1830）に三川内産の珈琲具が輸出され、これが海外輸出のスタートとなっている。同前書には「茲に於て今村槌太郎より領主松浦家に上申し盛に茄菲具を作る領主より役員を長崎に遣し平戸焼物産会所なる物を設置し貿易をなす爾來貿易に従事したる主なる者は福本栄太郎、田中数之助、福本市治、藤本熊二、今村豊寿、棕尾仙太郎、金氏佐五郎、田中喜代作、等にして又棕尾平八郎、口石慶治、古川類造、池田仙之助、中里丑太郎、等は専ら製造に従事せり」とも記されている^{注4}。

三川内焼貿易の切っ掛けとなったのが珈琲具であったのが注目される。また三川内焼の貿易を管轄する平戸焼物産会所が設置されたとあり、この文脈では設置年が天保元年と断定できる訳ではないが輸出の開始に伴っての行政的な組織の必要性から、天保元年に近いころに設置されたと推定される。以後平戸物産会所は明治 4 年（1871）に満宝山商舗として民営化されるまで、三川内焼（平戸焼）輸出の窓口となった。満宝山商舗時代の製品には「満宝山枝栄造」「平戸産枝栄造」「平戸産枝栄製」の銘が用いられている^{注5}。平戸産物会所時代の銘は不詳であるが、恐らく「三川内」や「三川内福本造」「三川内今村造」などのように福本、今村、金氏、田中など輸出の関係者名を伴う銘が用いられたと推測される^{注6}。

江戸末期の三川内地区の生産規模については「弘化嘉永の間、御用焼は勿論、諸方商人よりの注文繁多となり、染付物、赤絵付、捻り物等を盛に製出す。当時御用人十八名、窯業手伝五十一名、赤絵付六戸、三川内山、三百余戸、木原山、江永山、合して五百余戸に及べり。」と書かれている^{注7}。赤絵付が 6 戸とあり、江戸末期に三川内で上絵付けが行われていたことが

示された記録として注目される。有田の赤絵屋が当時16軒であったことからすると、有田の4割近い赤絵付業者がいたことになる。

有田における輸出再興は、天保12年(1841)に久富与次兵衛が佐賀藩から貿易の一手販売の許可を得たことに始まる^{注8}。有田白川の南里嘉十、南川原の柿右衛門や樋口等の一流窯元に製作させ、薄手碗や珈琲碗などの普通物は三川内に注文し、オランダ向けには赤絵で武者絵が描かれたとある^{注9}。この武者絵は江戸末期から明治初期の輸出品ではよほど人気があったと思え、蓋付碗に限らず皿類にも多くみられる。

安政3年(1856)に久富は田代紋左衛門へ貿易商の一枚鑑札を条件付きにて譲与し、さらに万延元年(1860)にはアメリカなど異国向けの貿易を田代が占有することとなった^{注10}。しかし久富の蔵春亭三保のブランド品が輸出されなくなったわけではなく、田代の肥磔山信甫銘とともに久富与平(蔵春亭西畝)が没する明治4年(1871)までは蔵春亭銘の製品は輸出されたと考えられる^{注11}。

明治元年(1868)には前述したように、従来の田代紋左衛門に加えて9名が新たに貿易商として許可された。泉山の深海平左衛門、百田多兵衛、鶴田次兵衛、上幸平の石川太左衛門、大樽の平林伊平、本幸平の深川栄左衛門、武田弥吉、赤絵町の富村森三郎、岩谷川内の山口伊右衛門である^{注12}。彼らのブランド銘は田代に倣って「肥磔山・・・」をこの時点から用いたと推測しているが、深海平左衛門は以前から用いている「年木庵喜三」を使ったと考えられる^{注13}。

深川栄左衛門の「肥磔山深川」や平林伊平の「肥磔山伊平」は生産者を特定できるが、そのほかの銘は不明である。伝世品にみられる銘は表4に示した種類がある。

明治4年(1871)に廃藩となると藩の規制が無くなり、窯焼や赤絵屋、貿易商の営業権も自由となったため生産者や貿易商も増大したと推測される。注1『皿山代官旧記覚書』p263・357・266・497・498、個々の内容については表3の年表参照のこと。

注2『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園 三猿』p124

注3『三川内窯業沿革史』p14

注4『三川内窯業沿革史』p14・15

注5表1のNo126～129参照。

注6表1のNo116～125および表4参照。

注7大畑三千夫 1992年『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園 三猿』p129 (原本『平戸焼沿革一覧(旧松浦藩伯爵家文庫編原稿写し)』佐藤独嘯 1918年)

注8『肥前陶磁史考』p527・528

注9同前書p528

注10 9同前書p530・531

注11 表1のNo1～37および表4参照。

注12『肥前陶磁史考』p548

注13図7及び表1のナールステック博物館の所蔵品と銘の使用時期変遷表(表4)を参照。

(3) 薄手磁器について

1830 年代から輸出が始まったとされる三川内の薄手磁器は、「薄手」や「薄手物」と表現され、「薄手兜形茶碗」^{注1}や「薄手珈琲器」^{注2}の記述がみられる。明治 9 年 (1886) のフィラデルフィア万国博覧会への香蘭社出品目録には「錦割内外梅画」の「薄手皿附大高猪口」や「染錦附」の「薄手皿附奈良茶」などの薄手表記がある^{注3}。明治 10 年 (1887) の第 1 回内国勸業博覧会への香蘭社出品目録には「薄手桜画染錦」の高猪口や「薄手 但台皿付」の奈良茶碗などの表現がみられる^{注4}。こうしたことから今回取り上げている製品が有田や三川内で当時「薄手」と呼ばれていたことが分かる。



図 6 館蔵
(山口智也氏寄贈)

碗の口径 8.2 cm、
皿の径 11.4 cm

また「天保元年長崎に於て蘭人と貿易を開始するに当て茄菲具の如きは非常に薄手となり身蓋合計の量八匁（ママ）内外の品を製出す」とある^{注5}。兜形茶碗は図 6 のような鰐緑の碗と考えられ、蓋付を基本とする。

碗の身と蓋を合わせて 8 匁とあるが、1 匁は 3.75g であるため 30g となる。図 6 の碗は身と蓋で 32g である。ほぼ当時の珈琲具として記載された重量に該当している。碗のみの重量は 20g、碗の口径は 8.2 cm、蓋の重量は 12 g である。碗の 20g を口径で割ると 2.4g/cm となる。皿のみの重量は 27g、径は 11.4 cm であり、径に対する重さは 2.3g/cm である。これを薄さについての大きな基準として他の製品と比較してみると、2g/cm 台は最も薄い部類であり、5g/cm 台になると特別薄いという感じではなくなる^{注6}。また図 6 の碗の口径 8.2 cm は表 1 の薄手碗の口径が確認できる 19 点の中では最小であり、他は 9.1 cm から 12.9 cm の間であった。



図 7 文久 2 年箱入

館蔵 (竹田貞子氏寄贈)

図 7 は文久 2 年 (1862) の墨書銘木箱入りの蓋茶碗 10 客の内の 1 点である。碗と蓋にそれぞれ「年木庵喜三製」の染付銘がある。年木庵喜三は江戸末期から明治にかけて活躍した有力窯元深海家の銘である。当該資料は佐賀の旧家に伝世したものであり、国内向けの実用品である。この蓋付碗の重量は 5 点平均で 194g、碗のみの重量は 134g で口径は 11.0 cm。通常の染付より瑠璃釉の分だけ外面の釉は多少厚くなっている。サイズは図 6 の碗より口径で 2.8 cm 大きい。図 7 の重量を口径で割ると 12g/cm であり、図 6 の 2.4g/cm に比べてかなり重いと言える。こうした実用主体の蓋茶碗と比べて、輸出専用の薄手碗がいかに特殊な薄手の品目であったが伺える。

三川内焼の産地での薄手磁器の出土例としては、伝世品と一致するものは少ないが、伝代官所跡からの出土陶片がある (図 8)。当跡では 17 世紀後半から 19 世紀までの各種陶片が出土



8-1

8-2

8-3

図8 伝代官所跡出土陶片
佐世保市教育委員会蔵



9-1 東窯

9-2 西窯

9-3 下窯

9-4 下窯

図9 三川内窯跡出土陶片 佐世保市教育委員会蔵

しているが、19世紀の薄手磁器も少量出土している^{注7}。8-1は上絵の具の赤で彩色されたもので、金彩を伴わない表現である。伝世品では表1 No112の公家文蓋付碗が赤のみによる絵付け表現であり、8-1と同じタイプである。8-2は

染付の薄手小碗である。表1 No1やNo7の蔵春亭三保銘の皿に葉の文様が類似している。8-3は白磁の皿であり、見込に円形の窪みがあることから碗皿の受け皿と考えられる。

伝代官所跡に近接する東窯、西窯、下窯の3窯跡からは9-1から9-4のような薄手磁器が出土している。東窯出土の9-1は、小碗で内面に椿の文様が染付で描かれている。西窯出土の9-2は白磁の小碗であり、素地は白く薄いが熔融により変形している。下窯出土の9-3は白磁の皿であり、内面に碗受けの窪みがある。下窯の白磁皿には釉薬が極めて薄く掛けられ、釉薬の光沢が弱いものがある。これらは素地が白い割に釉薬の艶があまり無く、有田の素地とは明らかに異なってみえる。染付小碗の9-4は、細い線描きで公家文が描かれている。三川内の素地は天草陶石を原料とする陶土と、地元三ツ岳から産出する陶石を原料とする陶土（網代土）を混合して作られた。上手物は天草4分に網代1分とされ、下手物は天草と網代が半々とされている^{注8}。

輸出用の薄手碗皿はコーヒー具と書かれているが、この手の蓋付碗はコーヒーを飲むための器として用いた記録は確認し難い。素地が極めて薄いため熱が伝わり、熱い液体を飲むには扱いにくいはずである。ほとんどが装飾品として鑑賞されたものではないだろうか。

コーヒー具のほかに「皿付の高形碗」や「金欄染付高猪口」という表現がある。「皿付の高形碗」は、明治元年（1868）に薄手焼を研究していた深海平左衛門（年木庵喜三）が井鉢及び皿付の高形碗を製作して大いに蘭人と取引したとある^{注9}。また明治6年（1873）のウィーン万国博覧会に満宝山枝栄製の「金欄染付高猪口」が12箇ずつ2組、コーヒー碗とともに出品されている^{注10}。当時の輸出品で蓋付碗とともによくみられるのは図10の高形碗である。「皿付の高形碗」



図10 館蔵
（山口智也氏寄贈）

碗「三川内 福本造」、皿「大日本 岩田造」

碗の口径 8.1 cm、高さ 8.6 cm
皿の口径 12.9 cm

や「金欄染付高猪口」とは図10のような器と考えられる。碗の高台内には赤絵で「三川内 福本造」、皿の高台内には染付で「大日本 岩田造」と記されている。染付の窓絵に上絵の組み合わせであ

り、赤地に金線で細かな文様が描かれており、二度焼きの赤絵金彩と判断される。

この器種は 18 世紀の有田焼の輸出品にもみられ、用途は一般にチョコレートカップとされ



図 11 館蔵
(山口智也氏寄贈)

「岩田造」口径 7.9 cm、
高さ 9.2 cm、底径 4.1 cm

ている。図 10 も同様の用途が考えられるが、図 11 のような取っ手付きのカップも作られている。高台内には赤絵で「岩田造」と記され、図 10 の受け皿の「大日本 岩田造」と同じ窯元であろうか。

図 10、図 11 の高形碗はいずれも三川内産と考えられるが、図 12 と図 17 は有田産と考えられる製品である。

図 12 の高形碗は高台内に「蔵春亭三保造」の染付銘がある。図 10 や図 11 の碗ほど薄くは



図 12 館蔵
(高取家コレクション)

染付銘「蔵春亭 三保造」
口径 9.1 cm、高さ 10.9 cm、
底径 4.3 cm

ないが、内部を覗くと外面の染付が透けてみえる。銘の書体は蔵の戈づくりが長いが多い。図 13 と図 14 は染付碗の銘であるが、同様に戈づくりが長く引かれている。また亭の字の丁が下向きに直線的に伸びているのに特



図 13 館蔵
(高取家コレクション) 図録 No344・
ID6931



図 14 館蔵
(高取家コレクション) 図録 No345・
ID6933

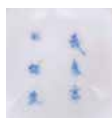


図 15 年木谷 3 号窯表面
採集
有田町教育委員会蔵



徴がある。図 15 は有田の年木谷 3 号窯で表面採集された皿の高台内の銘款である^{注11}。

有田で出土する薄手磁器は、輸出品にみられるような蓋付碗レ

ベルの薄いものは数が少ない。図 16 は年木谷 3 号窯から出土した薄手染付碗である^{注12}。素地は極めて薄く作られ、三川内の素地と遜色ない精度である。久富与次兵衛からの注文により「蔵春亭三保造」の銘をいれた製品がこの窯でも生産されたが、こうした薄手磁器は泉山陶石を原料とする陶土では歩留まりが三川内に比べて不利であっ



図 16 年木谷 3 号窯出土
有田町教育委員会蔵

たため三川内へ素地が発注されたと考えられる。

図 17 は「肥礫山信甫製」の染付銘を伴う高形碗である。極めて薄く白磁であれば三川内と判断されそうな薄手である。染付による文様が施されており、図 10 から図 12

までの高形碗より 2.5 cm から 4.8 cm 高い大振りのカップである。

有田町内では「肥礫山信甫造」の赤絵銘の陶片は出土しているが、窯跡等から染付銘の「肥礫山信甫造(または製)」の出土例は現時点では確認されていない^{注13}。よって信甫銘の染付製品だからと言って有田産と断定はできないが、蔵春亭銘の薄手磁器が有田の年木谷 3 号窯で



図 17 館蔵
(百溪正明氏寄贈)
「肥磔山 信甫製」
口径 10.5 cm、高さ 13.4 cm、
底径 5.0 cm



図 18 染付高形碗皿
「蔵春亭三保造」銘 個人蔵

生産されているため、この製品も有田産の可能性が高い。

図 18 は図 17 の高形碗と形状および文様が類似する「蔵春亭三保造」銘の高形碗である。皿に描かれた人物文は図 17 の碗と共通している。図 18 の碗は受け皿を伴っており、図 17 の高形碗も皿が付随していた可能性がある。

注 1 『三川内窯業沿革史』 p14

注 2 『三川内窯業沿革史』 p22

注 3 前山博 1983 年「明治前期，内外博覧会出品の陶磁器について—佐賀・長崎県行政資料などから—」表 1 p133No24・No26 『近代の九州陶磁展』 佐賀県立九州陶磁文化館

注 4 森谷美保 2015 年「香蘭社の誕生と『温知図録』編纂を巡って—納富介次郎とフィラデルフィア万博を中心に—」p27 目録 15 号・19 号 『明治有田 超絶の美 万国博覧会の時代』 論考集

注 5 『三川内窯業沿革史』 p22

注 6 重さを計測した小皿類 34 点のうち表 1 No110 の 2.3g/cm が最軽量であり、No3 と No108 の 2.9g/cm が次点である。

注 7 佐世保史談会 2002 年 『平戸藩御用窯総合調査報告書』 p60・61 第 49 図・第 50 図

注 8 『肥前陶磁史考』 p232

注 9 『肥前陶磁史考』 p548

注 10 東京国立文化財研究所 1997 年 『明治期万国博覧会美術品出品目録』 p110

注 11 有田町教育委員会 1997 年 『枳藪窯・年木谷 3 号窯 町内古窯跡群詳細分布調査報告書 第 10 集』 p87PL. 66No3

注 12 同前書 p60Fig22No2・p71PL. 50No2

注 13 村上伸之氏（有田町歴史民俗資料館館長）のご教示による。赤絵銘については泉山口屋番所跡から「肥磔山信甫造」銘の陶片が出土している（佐賀県立九州陶磁文化館 2018 年『幕末明治 有田の豪商—蔵春亭と肥磔山信甫—』 p15No60）。

（４）エッグシェル磁器

薄手磁器は卵の殻のように薄いことから卵殻手とも呼ばれる。また欧米では同じ意味合いで egg-shell china または egg-shell porcelain と呼んでいる。松下久子氏の調べによるとイギリスのタイムズ紙では 1845 年に卵殻磁器に関する記事が初めて登場し、それ以降に頻繁に掲載されるという^{注1}。1845 年の卵殻磁器が日本製かどうかは不明であるが、日本製と判別できるものは論文中の表 1 によると、1859 年 5 月 11 日のオークション広告が最初である^{注2}。1860 年のオークション広告では何ダースもの卵殻磁器とあり、多くの薄手磁器製品がイギリスに渡っていたことになる。万延元年（1860）は田代紋左衛門がアメリカやイギリスなどの異国向けの権利を占有した年である。また文久 2 年（1862）にロンドン万国博覧会が 1851 年に次いで開

催され、駐日英国公使であったラザフォード・オールコックが収集した日本の工芸品を出品した。この万国博覧会関連記事で「全てのヨーロッパの製造業者が驚き憧れる素晴らしい卵殻磁器は、私たちの期待どおり十分に表現されている。」と絶賛されている^{注3}。

卵殻磁器に対する評価が高く、輸出された量の多さを裏付ける記述である。

注1 松下久子「ヨーロッパに現存する平戸焼についての一考察」p37『東洋陶磁 第43号』2014年

注2 同前書 p37

注3 同前書 p37

2. 有田と三川内の薄手磁器の分類

有田と三川内のそれぞれの産地における考古学的な発掘調査においては、薄手磁器についての十分な資料が得られている訳ではない。一方伝世品においては比較的多くの資料が残されている。これらには商社のブランド銘や生産者銘が記されているものが多く、生産の構造や製作年代をある程度考察することができる。

ここでは素地使用の複雑な様相を、①素地成形、②染付施文、③上絵施文、④販売者（最終製作者）の4つの観点から分類して考察してみることとする^{注1}。

表2では①から④までの組み合わせで薄手磁器をAからHまでのタイプに分類している。AからCは素地が有田で作られたものであり、その中でもAは素地成形、染付け、上絵付け、販売の4工程とも満たす染付色絵製品。Cは4つの工程の内、染付けがなく上絵付けのみによる有田の色絵製品。

DからHは素地が三川内で作られたものであり、Dは三川内で作られた白磁素地に有田で上絵付けされた色絵製品。Eは三川内で染付けを行った素地に有田で上絵付けされた色絵製品。

Fは三川内で作られた白磁素地に、三川内で上絵付けされた色絵製品。Gは上絵付のない三川内の染付製品。Hは三川内で染付けを行い三川内で上絵付けされた色絵製品。こうした産物としての種類を今日的な呼び方で言えば、AからEまでが有田焼、FからHまでが三川内焼である。

Aで示した事例1は、型打ちによる薄作りの小皿であり、染付文の上から金彩で装飾されている。染付の銘が「蔵春亭三保造」であるため素地は有田産と判断した。また久富が上絵を三川内に発注するとは考えにくいため有田で上絵付けを行い、有田焼として販売したとみなしている。事例2は銘が染付の「肥礪山深川造」であり、深川は窯元であるため素地を有田産とした。上絵付けは有田の赤絵屋もしくは自前の赤絵師に絵付けさせたと判断した。事例3は染付銘が有田深海の「喜三製」であり、上絵が蘭マークの「深川造」であるため有田産に分類した。深海と深川が共同で製作した製品であるため、深海が香蘭社に関わった明治8年（1875）から明治12年（1879）の期間に作られたと考えられる。事例4は染付で香蘭社の蘭のマークが記さ

れ、また上絵は香蘭社が得意とした褐色地の表現であることから有田産とした。

Bの事例1の染付童子文蓋付碗皿は、「蔵春亭三保造」の染付銘入りであるため有田産とした。事例2の八角碗皿はAの事例1と同様に型打ちにより成形され、「蔵春亭三保造」の染付銘がある。事例1の碗ほど薄手ではない。事例3の高形碗の同様に「蔵春亭三保造」の染付銘がある。事例4の高形碗は「肥礫山信甫製」の染付銘がある。これは図17と図18の解説で論じたように蔵春亭三保造の高形碗との類似性から有田産と判断している。

Cの事例1は上絵付けのみの装飾であるが、赤絵で「年木庵喜三造」の銘が入れられ、年木庵の深海家は窯元であるため成形も深海によると判断してCに分類した^{注2}。事例2は三組小皿の1つであり、赤絵で「肥礫山深川造」の銘が入れられている。素地は三川内の薄手素地より厚めであるため有田産と判断した。事例3の珈琲碗皿は型打ちで輪花に作られている。武者絵が描かれているがDの事例3より遥かに厚く重い。薄手には入れられないものであるが、有田素地の武者絵の参考として取り入れた。事例4も同様に型打ちによる輪花で、三川内のロクロ引きによる薄手碗よりかなり厚く重い。有田素地の有田上絵と考えられる。

Dの事例1は「蔵春亭三保造」の銘入りであるが、赤絵であるため白磁素地は三川内と判断した。事例2も赤絵で「肥礫山信甫製」と記されており、三川内素地に分類した。事例3も赤絵の「蔵春亭三保造」の銘入りであり、事例1と同じタイプである。武者絵はCの事例4より丁寧である。事例4は赤絵で「肥礫山信甫製」記され、白磁素地は三川内産に分類した。

Eの事例1は論考中の図1で取り上げた製品であり、染付で「満宝山枝栄造」と描かれ、赤絵で「肥礫山信甫造」と記されている。三川内の染付素地に有田で上絵付した典型例である。事例はこの一点であるが、染付文様まで入れた三川内素地の供給は伝世品の少なさからすると白磁素地供給より少なかったと考えられる。

Fの事例1は図6で示した製品である。「大日本平戸産福本造」と赤絵で描かれているため、三川内素地の三川内上絵と考えられる。今回掲載の蓋付碗の中では最も薄くて軽い。事例2は赤絵で「三川内」と記されている。六歌仙風の人物文が描かれているが、金彩はなく赤のみの表現である。事例3は赤絵で「三川内」と記され、武者絵が描かれている。口縁は無釉であり上絵の赤が塗られている。高台は透明釉で施釉されているため、伏せて本焼きされたと分かる。薄い素地であるため焼成による歪みを避けるための手法である。事例4は「平戸産枝栄造」と記され、全体に明るい色調で江戸期の人物文が描かれている。

Gの事例1は染付で「三川内田中造」と記され、三川内素地の三川内焼と判断される。事例2は染付で「平戸産枝栄造」と記され、事例1と同様に素地、絵付けともに三川内産に分類される。

Hの事例1はGの事例1と同じ名前で「三川内田中造」と染付で記され、素地が三川内産で

あると分かる。事例 2 との装飾の類似性から上絵付けも三川内で行われたと考えられる。事例 2 は蓋に赤絵で「大日本三川内」、碗に赤絵で「三川内福本造」、皿には染付で「岩田造」と書かれている。染付で人物文を窓に描き、周囲を赤地とし、その上から金の線描きで文様を描いている。赤地に金彩は図 4 で述べた二度焼きの手法で施されたと考えられる。二度焼きは慶応元年 (1865) に始まるとされるため、この製品の製作年は慶応元年以降ということになる。事例 3 も染付と赤絵金彩の組み合わせであり、碗には事例 2 と同じ「三川内福本造」の赤絵銘、皿には染付で「大日本岩田造」と記されている。事例 2 と事例 3 は染付による「岩田造」、図 11 の取っ手付きカップは赤絵の「岩田造」とあり、窯元であり赤絵付けも行っている陶業者とみられる。しかし事例 2 における赤絵は「福本造」であり、製作年代の差なのか作業の分担が一樣ではない。事例 4 は染付で「満宝山枝栄造」と記された色絵の製品である。千鳥が染付で描かれ、金彩を主とした上絵付けが施されている。

表 2 の分類表を概観してみると有田製の D と三川内製の F が、薄手製品の主流ではないかと思える。共通しているのは白磁素地に華やかな上絵を施した色絵製品であり、伝世品としての量も多い。それらの供給を支えていたのは三川内産の白磁素地であったと言える。また両者ともに武者絵の製品が多いことである。輸出品として外国人の好む絵柄だったことが伺える。赤絵金彩による表現は、伝世品からみると有田より三川内の方が多い。慶応元年 (1866) に始まったとされる三川内の上絵窯二度焼の成果もその一因と考えられる。

注 1 表中に用いた製品についての寸法や所蔵等のデータは、表 1 の各欄を参照のこと。

注 2 この皿の銘は上絵で描かれているが、江戸時代は上絵付業が赤絵屋 16 軒に限定され、窯元 (窯焼) である深海家は上絵付けができなかったはずである。この皿が江戸時代であれば銘は赤絵屋が入れたことになる。しかし銘の特徴は図 7 の染付銘に似ており、深海による可能性が高い。深海が上絵を公式に行えるのは明治 4 年 (1871) の廃藩以降であり、この皿の製作年代の上限も明治 4 年となる。絵付けに用いられている紫色や薄墨色は明らかに洋絵具であり、このことから有田で洋絵具が用いられ始まる明治 3 年以降の製作と推定される。

3. 有田と三川内における銘の種類と使用期間

有田や三川内など肥前の生産地において、奉納品など特別の製品を除けば製造者の銘を入れる習慣はなかった。製品には「太明成化年製」など中国風の装飾銘を入れるのが一般的であった。ところが 19 世紀になると有田では久富与次兵衛による「蔵春亭三保造」や田代紋左衛門による「肥礪山信甫造」などの銘が入られるようになる。これらは輸出品のブランド名としての必要性から始められたと考えられるが、9 代から 10 代ごろの酒井田柿右衛門による「酒柿」など必ずしも輸出品に限らない銘入りの製品が作られるようになる。京都の仁清や乾山など他地区においては作者銘を入れる習慣は以前からあったが、有田でもこうした製作者銘を入れる事例が出てくる。ここでは有田と三川内の輸出品に伴う銘款を伝世品で確認できる範囲で網羅

している。これらは薄手磁器以外の輸出品にみられる銘款も取り上げている。

表4は各種の銘の使用時期の変遷を一覧表にしたものである。銘の出現する時期と終止する時期を特定できれば、製品の製作年代をおさえることができる。

(1) 有田の銘款

表中左端の「蔵春亭三保」は第1章の「(2) 19世紀における有田と三川内の輸出について」でふれたように天保12年(1841)を上限としている。下限は久富与次兵衛昌常が文久元年(1861)に没しているため^{注1}この年までを実線としているが、厳密な銘の終止年は確認できないため以後は破線としている。次の「蔵春亭西畝」は、久富与平の銘である。一般には「西畝」と表記されるが、銘款では異体字の「西畝」と記されている。与平は久富与次兵衛昌常の弟であるが、継嗣となり宗家を相続した^{注2}。相続した年は久富与次兵衛昌常の没した文久2年と推測されるが、銘の開始はその前から破線で示している。終止は久富与平が没した明治4年(1871)としている^{注3}。

「肥礫山信甫」は貿易を許可された安政3年(1856)を上限としている。銘の下限は田代紋左衛門の長男田代助作の没した明治23年(1890)とした。田代紋左衛門は明治33年(1900)に没したが、輸出業の実務は江戸期から田代助作が行っていたため下限は助作の没年と解釈している。

「蔵春亭三保」の銘はほとんどが「蔵春亭三保造」であるのに対して、「肥礫山信甫」の銘は「肥礫山信甫造」と「肥礫山信甫製」の両方がある。「造」と「製」の使い分けに明確な根拠はないが、全般に「造」の方が古く「製」の方が新しい傾向がある。「肥礫山」という名称は肥前の皿山を意味し、有田皿山の別称として用いられている。田代紋左衛門の銘以降にみられるようになるが、佐賀藩の貿易の鑑札が増やされると、新規の貿易商が田代に倣って用いたと推測される。

「肥礫山平林」は明治元年(1868)に新しく佐賀藩から貿易の許可を得た平林伊平のことであり、銘の使用上限を明治元年とし、下限は明治26年(1893)の没年とした^{注4}。

「肥礫山深江」は明治元年の新貿易商の9名の中に名前がないため、上限は廃藩の明治4年(1871)とした。深江は泉山の窯元深江鶴次郎のことと考えられ、年木谷3号窯からは「深江製」銘の染付蓋が出土している^{注5}。下限は深江鶴次郎が没する明治22年(1889)とした。

「肥礫山川崎」と「肥礫山南里」も明治元年の新貿易商にその名前がなく、貿易業は明治4年以降と考えられる。川崎の下限は不明であるため、実線の下限の明治20年(1887)と破線の下限の明治23年(1890)も製品の特徴から推定した便宜上の推定年である。南里は江戸末期から明治初期に活躍した有田白川の南里嘉十と考えられる。南里は明治13年(1880)に没してい

るため銘の下限を同年にした^{注6}。

「肥蝶山如仙」「肥磔山山嘉」「肥磔山武茂」「肥磔山春信」「肥磔山漱月」は明治元年の9名の該当者かどうか不明であり、銘の始まりを明治元年(1868)からの破線とし、明治4年からを実線としている。また実線の下限の明治20年(1887)と破線の下限の明治23年(1890)は、「肥磔山川崎」と同様に製品の特徴から推定した便宜上の推定年である。「肥蝶山如仙」は「蝶」の字を書き、他の「肥磔山」の「磔」と異なっている。また「観水亭如仙」は「肥蝶山如仙」と同じ業者と考えられ、銘の使用年代も作風から判断して同時期としている。

「再春亭新屋好」と「采真亭圭子製」は作者が不明であるが、製品は肥磔山信甫造の輸出品に類似し、赤絵で「再春亭新屋好」の銘の入った武者絵高形碗などがある。樋口窯跡では「采真亭圭子製」や「蘭谷亭定左造」銘のものがみられるという^{注7}。銘の使用年代は明治前期と推定される。使用期間の表示は上記の「肥蝶山如仙」「肥磔山山嘉」「肥磔山武茂」「肥磔山春信」に合わせている。

「肥磔山辻」は明治8年(1875)に深川栄左衛門とともに香蘭社を設立する辻勝蔵の銘である。9人の新規貿易商に入っていないため明治4年(1871)以降と判断され、香蘭社設立までとしている。

「肥磔山深川」は明治元年(1868)に新貿易商となった八代深川栄左衛門の銘である。明治8年(1875)に香蘭社を設立し、蘭のマークを会社の商標としたため、この銘は明治8年で終止したと解釈できる。しかし明治9年(1876)に開催されたフィラデルフィア万国博覧会に「肥前深川製」銘の色絵龍文大花瓶や「肥磔山深川製」銘の大皿が出品されており^{注8}、明治8年以前の製品を出品したのか8年以降も暫くこの銘を使用したのは判然としない。よって表では終止年を2年分破線で表示した。同様の用いられ方をした銘に「日肥山深川造」がある。

「深川造」も基本的には輸出の許可を得てから用い始めたと考えられ、また香蘭社設立までの間と解釈される。銘の字数が少なく、小形の製品に記されることが多い。

蘭マークと「深川造(製)」は明らかに会社設立の明治8年(1875)以降であり、明治20年(1887)までは伝世品で使用例が確認されている^{注9}。

蘭マークと「辻製」、および蘭マークと「年木庵喜三製」「喜三製」は明治8年の香蘭社設立に参画した辻勝蔵と深海墨之助・竹治兄弟の銘である。辻と深海は明治12年(1879)に精磁会社を設立するため、この銘の使用期間は明治8年から12年に限定される。

「年木庵喜三製」の銘については図7で示したように文久2年(1862)以前から使用されていたとみなされる。使い始めは不明であり、表中では文久2年の3年前から破線で示している。下限は香蘭社に参画する明治8年までとした。深海平左衛門は明治元年(1868)に新貿易商として許可されており、チェコのナールプステック博物館には赤絵で「年木庵喜三製」と記され

た薄手の高形碗が所蔵されている^{注10}。年木庵は優れた技術を持つ窯元であり、泉山陶土を用いた薄手磁器は成形可能と考えられるが、この赤絵銘は他の草書体の年木庵喜三銘と異なり、楷書体であり稚拙な筆致である。明治元年(1868)に深海平左衛門が輸出業を開始した段階では赤絵屋は自由化されていない時期であり、外注の可能性はある。年木庵は明治8年(1875)に香蘭社設立に関わり、明治12年(1879)に精磁会社を設立するまでは蘭のマークに「年木庵喜三製」「喜三製」を記し、明治12年以降は「精磁会社製之」等の銘を用いた。

注1 生没年については表3の年表参照のこと。

注2 『肥前陶磁史考』 p554

注3 同前書 p555

注4 同前書 p573・689

注5 有田町教育委員会 1997年『枳莪窯・年木谷3号窯 町内古窯跡群詳細分布調査報告書 第10集』p70PL. 49No1-2

注6 『肥前陶磁史考』 p573

注7 陶器全集刊行会 1973年復刊・1937年発行『日本古陶銘款集 全六巻 九州篇』 p145

注8 「肥前深川製」銘の色絵龍文大花瓶(ID1897-352)、「肥前山深川製」銘の大皿(ID97-213)、「肥前山深川造」の色絵秋草文碗皿(ID97-228ab)などがフィラデルフィア美術館に収蔵されている。色絵秋草文碗皿には「天百号十三揃内」のラベルが貼っており、フィラデルフィア万国博覧会香蘭社出品リスト(第1章(1)注13 森谷美保)p30 目録中の「天百号 薄手皿附奈良茶 陶器 染錦秋ノ画 十三揃 三寸二分 肥前有田 深川製 一揃二付二円 原價二十六円」に該当する。

注9 『香蘭社—歴史と作品変遷—』 p17

注10 表1のNo106・107

(2) 三川内の銘款

三川内の薄手磁器の輸出品にみられる銘款の種類は有田ほど多くはないが、「平戸」や「三川内」という銘から有田と産地を容易に区別できる。また「満宝山」を伴う銘は、明治4年(1871)以降に用いられた銘として製作年代を特定できる。

天保元年(1830)から始まる三川内焼の輸出は平戸焼物産会所で管轄されたが、明治4年(1871)に満宝山商舗に引き継がれるまでの銘は不明である。「平戸」や「三川内」などの銘が入れられた可能性はあるが、確証はない。

表4の左端の「平戸三福寿」は、大英博物館所蔵品の蓋付碗と受け皿に赤絵で記された銘で



図19 大英博物館所蔵

©The Trustees of the British Museum
1986, 1011. 14. a-c

ある(図19)。器には金彩で鴛鴦と水草文が描かれている。「平戸三」は平戸産の意味と解され、また福寿は吉祥を意味するが「福寿製」と記されているため製造者銘の可能性もある。この銘は類例が希少で、上絵の色数も少なく、輸出品の早い段階のものと推測している。銘の年代の上限は輸

出が始まったとされる天保元年（1830）であるが、「純白なる地質にして紙の如き薄手物を製作することに成功」したのは天保 8 年（1837）とされるため^{注1}、天保 8 年以降を実線に表示した。下限は満宝山に引き継がれる明治 4 年（1871）としている。

「平戸産枝栄」「平戸枝栄」「満宝山枝栄」は上限が明治 4 年であるが、下限の終止年が不明である。実線を明治 20 年（1887）、破線を明治 23 年（1890）としたのはいずれも伝世品の観察により推定した便宜上の表示である。

満宝山関係以外の銘の上限の考え方は、「平戸三福寿」の場合と同様である。下限については福本、今村、金氏、田中の活躍ぶりが『三川内窯業沿革史』にそれぞれ明治末期まで記されているため、明治 33 年（1900）までの実線としている。

図 20 は碗に赤絵で「三川内福本造」、蓋に赤絵で「大日本三川内」、皿に染付で「岩田造」の



図 20 蓋付碗皿 碗 蓋 皿
館蔵（百溪正明氏寄贈）



碗 蓋 皿

銘が記されている。文様は共通しているが、書体と書かれている内容もすべて異なっている。丸窓の染付文は碗と蓋は同質であるが、受皿は明らかに異なる。また受皿の金彩は碗と蓋より光沢が強い。碗と蓋の金彩は同文であるが、赤地は蓋の方が僅かに明るい。図 20 と類似する

表 1 No116 の高形碗皿をみると、染付文の表現が同様に異なっており、碗と皿は別工程で作っている推測される。伝世するうちに組み合わせが変わる可能性はあるが、有田ではほとんどみられない傾向であり、三川内焼生産の分業の特色と思える。

注 1 『肥前陶磁史考』 p239 および表 3 の年表参照。

4. 製作年代について

19 世紀後半における有田焼と三川内焼の製作年代は、銘が記されていればある程度判断することができる。特に有田の場合は久富と田代の貿易開始年、明治元年（1868）の貿易商の追加許可、明治 4 年（1871）の廃藩による貿易自由化によって各銘の出現時期が推定され、下限は曖昧な部分があるが、全般に製作年代を把握しやすい。また洋絵の具の導入開始がほぼ明治 3 年（1870）以降と考えられるため^{注1}、絵の具の判別ができればさらに製作年代の幅を狭めることができる。

三川内焼については銘の使用年代を絞ることが困難であるため、表 1 の No109 から No127 に示したように、有田焼より製作年代の表示が幅広くなりがちである。今後文様や器形の特徴などから製作年代をより絞る必要がある。



図21「安政年新上造」銘皿
館蔵（山口裕也氏寄贈）

図21は赤絵で「安政年 新上造」と記された色絵皿である。薄手に作られているが、三川内産と特定されている訳ではない。素地や上絵の具の特徴から、有田を含めた肥前産とみられるが、安政年間（1854-1860）の資料

として貴重である。素地は極めて白く、重さは37gで口径に対する比率は2.9g/cmであり、他の薄手と比べてもかなり薄い方である^{注2}。上絵の具には青白濁した白盛り絵の具が使われており、上から紫色の斑点が施されている。黒線は灰色がかり、細いがラフな線描である。赤は濃くて少し光沢があり、裏の銘の色も同質である。緑は薄青と草色の二種が使い分けられている。こうした上絵の具に明治3年（1870）以降洋絵の具が加わることになる。

注1『肥前陶磁史考』p551 および『香蘭社－歴史と作品変遷－』p24・25において洋絵の具の導入について論じている。

注2表1の中でNo110の2.3g/cmが最も軽く、2.9g/cmはNo3と共に次点である。

おわりに

薄手磁器を中心に19世紀後半の有田と三川内の輸出品を概観してきたが、三川内素地の有田焼利用については第2章で様々な組み合わせを想定して分類してみた。この表2により考察の視点が多少整理されたと思うが、各種の輸出品を厳密に素地分類するのは現状では極めて困難である。今後は科学的な素地分析によって産地が解明されることが望まれる。併せて洋絵の具の分析も進めば、製作年代の判断ももう少し幅を狭めることができると考えられる。

『肥前陶磁史考』や『三川内窯業沿革史』などに書かれている有田と三川内の交流は、銘を伴う幾つか伝世品の事例を示すことである程度検証することができた。こうした現象は、素地の提供に限らず19世紀後半の貿易の状況に応じて窯業の在り方が変化し、明治維新によってさらに産業の形態が激変したことを示している。海外に多く残るこの年代の伝世品の調査が進むにつれ、未確認の銘や製作年代、生産構造の解明が一層進展すると期待される。

この論考執筆にあたり、今回の資料の多くをご寄贈いただいている山口裕也氏・智也氏ご兄弟、その他の各寄贈者の皆様、また当館名誉顧問の大橋康二氏、チェコのフィリップ・スホメル氏、長崎県文化振興課の松下久子氏、有田町歴史民俗資料館館長の村上伸之氏、佐世保市教育委員会の溝上隼弘氏、ロンドン在住の佐藤桂子氏、当館の山本文子学芸員から多くの助言と協力が得られた。記して感謝を申し上げたい。

表 1 有田三川内銘入磁器リスト

No.	話	絵写真	写真1	写真2	写真3	写真4	写真5	写真6	写真7	写真8	製作年代	口径 cm	高さ cm	全高 cm	底径 cm	寸法と重 さの補足 cm・g	所蔵・ID 番号	寄贈者名
1	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.2	1.6		6.5	皿53g 4.3g/cm	館蔵 593	
2	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.3	2.3		6.4	皿左52g 4.2g/cm 皿右50g 4.0g/cm 2.3 2.3 6.5	館蔵 594	
3	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	11.9	2.0		5.2	皿35g 2.9g/cm	館蔵 595	
4	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	10.2	2.1		6.3		館蔵 6949	高取家コレ クション
5	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	13.8	2.1		7.4		館蔵 3304	柴田夫妻コ レクション
6	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.0	2.1		6.7		館蔵 6939	高取家コレ クション
7	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.3	2.2		6.6	皿65g 5.2g/cm	個人蔵	
8	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.1	1.9	7.0	5.9	寸法は皿 の方。皿 13.8、4、6、4 3.8	個人蔵	
9	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	9.8	5.5	7.9	3.4		館蔵 6931	高取家コレ クション
10	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	9.7	5.2		3.5		館蔵 6933	高取家コレ クション
11	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.1	2.3	8.0	6.1	皿47g 3.9g/cm 皿14 4.9g/cm 皿25g 2.8g/cm 皿径9.1cm	個人蔵	
12	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.5	2.4	8.5	5.9		館蔵 14603	山口智也氏 寄贈
13	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.7	2.4	7.8	5.8	皿9.5 5.7 3.5 皿8.6 2.5 3.1	館蔵 14604	山口智也氏 寄贈
14	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	12.7	2.3	8.2	6.4		個人蔵	
15	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	9.1	10.9		4.3		館蔵 14806	高取家コレ クション
16	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	8.0	7.8	11.2	3.7		館蔵 6930	高取家コレ クション
17	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1849年頃	12.9 × 10.2		8.1	10.5 ×7.5		館蔵 6384	柴田夫妻コ レクション
18	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	23.4	3.4		12.3		個人蔵	
19	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	24.5	3.5		13.2 ×7.5	底径は二 重高台の 外と内の 径	個人蔵	
20	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	2.7	28.4		8.9		館蔵 14605	山口智也氏 寄贈
21	寛永平 三保造	三保造 蔵春亭									1841年-1861年頃	31.2	61.0		17.5		館蔵 3349	柴田夫妻コ レクション

22	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	13.3	35.7	14.0	館蔵 14159	山口裕也・ 智也氏寄贈	
23	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	31.2	16.6	16.6	15.0	館蔵 14020	山口智也氏 寄贈
24	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	19.9	2.6	11.54 5.0	底径は二 重高台の 外と内の 径。	個人蔵	
25	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	17.2 × 23.0	3.7	12.3 × 16.0		個人蔵	
26	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	31.0	4.2	18.0	館蔵 14154	山口裕也氏 寄贈	
27	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	3.7	12.5	9.8× 7.1	館蔵 3213	栗田夫妻コ レクション	
28	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	3.7	12.4	12.4 × 7.1	館蔵 15291		
29	(唐書紙)										1869年頃	4.5	9.1	9.9× 7.0	館蔵 5653	西幾多氏寄 贈	
30	民田仲夏/ ?										1880年	3.4	9.9	9.9 × 7.2	最大径9.5 ×7.6	館蔵 4549	家永健成瑠 氏寄贈
31	— (三川内様)										1837年頃-1890年 頃	23.4 × 17.9	32.2	17.1 × 1.3	館蔵 7143	高取家コレ クション	
32	寛永平 三保造										1837年頃-1861年 頃					個人蔵	
33	寛永平 三保造										1841年-1861年頃	21.2 × 15.2	17.5	16.1 × 12.2	館蔵 14019	山口裕也・ 智也氏寄贈	
34	寛永平 西鉄造										1861年頃-1871年	14.3	2.9	6.0	幅29.9 5.4 4.7	個人蔵	
35	寛永平 西鉄造										1861年頃-1871年	10.6	22.2	6.2	館蔵 14606	山口智也氏 寄贈	
36	寛永平 西鉄造										1861年頃-1871年	25.3	3.6	14.5		個人蔵	
37	寛永平 西鉄造										1861年頃-1871年	6.1	29.6	10.8	館蔵 14602	山口裕也・ 智也氏寄贈	
38	肥後山 依南造										1856年-1890年頃	12.6	2.3	5.6	幅29.7 3.5 5.1 3.5	館蔵 14021	山口智也氏 寄贈
39	肥後山 依南製										1856年-1890年頃	12.7	2.2	6.0	底53g 4.1g/cm 幅37g 3.7g/cm 幅29.8 3.5 5.5 3.5	個人蔵	
40	肥後山 依南製										1856年-1890年頃	9.6	5.4	3.5		館蔵 7683	有田田代家 寄贈
41	肥後山 依南製										1856年-1890年頃	9.1	5.3	7.4	3.5	館蔵 7682	有田田代家 寄贈
42	肥後山 依南製										1856年-1890年頃	10.5	13.4	5.0		館蔵 6708	百歳正明氏 寄贈
43	肥後山 依南造										1856年-1890年頃	12.6	2.0	7.0		館蔵 14808	高取家コレ クション
44	肥後山 依南造										1856年-1890年頃	10.0	2.9	9.5 身の口径 8.2		個人蔵	

45	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	10.6	2.5	6.3	6.2 5.1 5.8 3.3	個人蔵	
46	肥前山 有田製	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	24.4	3.9		13.1	個人蔵	
47	肥前山 有田製	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	25.2	3.4		14.5	個人蔵	
48	肥前山 有田製	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	34.0 × 26.0	4.9		15.0	個人蔵	
49	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	25.7	61.0		15.0	館蔵 345	
50	大日本 肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	24.7	55.8		13.5	館蔵 7663	有田田代家 寄贈
51	大日本 肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	20.8	41.0		10.4	館蔵 7685	有田田代家 寄贈
52	大日本 肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	11.1	27.1		11.8	館蔵 7666	有田田代家 寄贈
53	大日本 肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	8.4	18.7		6.8	館蔵 14612	山口智也氏 寄贈
54	大日本 肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	9.0	10.1		4.7 口径5.5	館蔵 14613	山口智也氏 寄贈
55	大日本 肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	66.0	10.0		36.5	館蔵 21	
56	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	19.6	2.7		10.8	個人蔵	
57	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	19.8 × 29.0	7.2		16.3 × 21.0	個人蔵	
58	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	4.5	6.5	6.6	4.8	館蔵 14611	山口智也氏 寄贈
59	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	21.7	2.4		12.1	館蔵 14160	山口智也氏 寄贈
60	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	22.0	3.3		11.9	館蔵 14610	山口智也氏 寄贈
61	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	13.2	2.5		2.5 碗9.0 3.5 3.2	館蔵 14022	山口智也氏 寄贈
62	肥前山 有田造	信楽山 肥前山									1856年-1890年頃	16.7	3.4		9.9	館蔵 7684	有田田代家 寄贈
63	青森平 新屋好	信楽山 肥前山									1868年-1890年頃	8.4	8.3		3.4	館蔵 14607	山口智也氏 寄贈
64	肥前山 三川製	信楽山 肥前山									1868年-1875年頃	12.0	2.2		5.5 皿59g 4.9g/cm	館蔵 12788	福田ちづ子 氏寄贈
65	肥前山 三川造	信楽山 肥前山									1868年-1875年頃	11.8	2.4		5.9 皿49g 4.1g/cm	館蔵 12794	福田ちづ子 氏寄贈
66	三川造	信楽山 肥前山									1868年-1875年頃	12.5	2.3		5.3 皿75g 6.0g/cm	館蔵 12791	福田ちづ子 氏寄贈
67	肥前山 三川造	信楽山 肥前山									1868年-1875年頃	12.5	3.4		5.5 中11.8 8.4 5.3 小10.7 3.0 5.0	個人蔵	

68	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	8.7	7.4		3.8	個人蔵	
69	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	12.2	2.3	7.1	6.0 5.9	館蔵 14613	山口智也氏 寄贈
70	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	14.4	2.5	6.5	7.2 5.7 3.5	個人蔵	
71	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	10.7	2.8		6.3 3.3g/cm	館蔵 12786	福田ちづ子 氏寄贈
72	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	13.2	2.5		7.7 5.3g/cm	館蔵 12792	福田ちづ子 氏寄贈
73	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	4.4	28.1	32.5	10.0 口徑の内 法123.0, 蓋5.0 6.6 2.2	個人蔵	
74	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	23.9	15.1	26.6	14.1	館蔵 7065	高坂家コレ クション
75	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	10.0	2.0		5.0 3.6g/cm	館蔵 14615	山口智也氏 寄贈
76	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	12.3	2.2		5.5 4.9g/cm	館蔵 12787	福田ちづ子 氏寄贈
77	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	13.7	2.5		7.6 10.0g/cm	館蔵 12793	福田ちづ子 氏寄贈
78	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	12.2	2.5		5.9 4.8g/cm	館蔵 12790	福田ちづ子 氏寄贈
79	肥前山 深川製									1868年-1875年頃	10.8	2.0		5.2 3.7g/cm	館蔵 12785	福田ちづ子 氏寄贈
80	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	5.7	6.1		5.2	館蔵 14617	山口智也氏 寄贈
81	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	38.1	5.3		25.1	館蔵 14616	山口智也氏 寄贈
82	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	11.9	2.3		5.8 4.4g/cm	館蔵 12781	福田ちづ子 氏寄贈
83	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	12.3	2.5		5.5 5.3g/cm	館蔵 12779	福田ちづ子 氏寄贈
84	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	11.8	2.1		5.3 4.0g/cm	館蔵 12789	福田ちづ子 氏寄贈
85	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	10.6	1.8		4.9 3.7g/cm	館蔵 12776	福田ちづ子 氏寄贈
86	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	12.3	2.0		5.5 4.5g/cm	館蔵 12780	福田ちづ子 氏寄贈
87	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	10.2	2.0		5.7 3.6g/cm	館蔵 12777	福田ちづ子 氏寄贈
88	(商マーク) 深川製									1880年頃-1890年 頃	15.6	2.3		8.0 5.1g/cm	館蔵 12782	福田ちづ子 氏寄贈
89	(商マーク) 深川製									1875年頃-1890年 頃	10.8	1.9		5.5 3.9g/cm	館蔵 12778	福田ちづ子 氏寄贈
90	第三製 (商マーク) 深川製									1875年-1879年	12.6	2.2		7.0 7.5g/cm	館蔵 12783	福田ちづ子 氏寄贈

91	高三製 (商マーク) 美川造										1875年-1879年	12.3	2.2	7.4	重93g 7.5g/cm	館蔵 12784	福田ちづ子 氏寄贈
92	辻製										1868年-1875年頃	12.5	2.3	6.2	重77g 6.1g/cm	館蔵 12795	福田ちづ子 氏寄贈
93	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	6.5	31.7	12.7		ナール ステック 博物館 16531	
94	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	23.5	3.2	12.9		館蔵 14155	山口裕也氏 寄贈
95	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	26.0	3.1	13.5		館蔵 14609	山口裕也氏 寄贈
96	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	22.4	3.3	13.5		館蔵 14157	山口裕也氏 寄贈
97	肥後山 如仙造										1868年頃-1890年 頃	18.8	2.9	10.9		館蔵 14627	山口裕也氏 寄贈
98	肥後山 如仙造										1868年頃-1890年 頃	4.9	5.0	2.5	寸法は4-1 の寸。	個人蔵	
99	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	24.2	3.7	13.4		個人蔵	
100	肥後山 如仙造										1868年-1890年 頃	47.1	5.7	27.8		館蔵 7019	高取家コレ クション
101	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	21.9	2.6	11.9		館蔵 14628	山口裕也氏 寄贈
102	肥後山 如仙造										1868年-1890年頃	21.6	3.5	13.1		館蔵 5631	西幾多氏寄 贈
103	肥後山 如仙造										1862年頃-1875年 頃	47.8	8.4	26.2		館蔵 125	
104	肥後山 如仙造										1862年頃	11.0	5.8	7.7	4.4	館蔵 12285	竹田貞子氏 寄贈
105	肥後山 如仙造										1868年頃-1875年 頃	13.8	2.4	7.3	重75g 5.4g/cm	個人蔵	
106	肥後山 如仙造										1868年頃-1875年 頃	7.1	2.5	12.0	3.0	ナール ステック 博物館 496943a	
107	肥後山 如仙造										1868年頃-1875年 頃	13.1	2.5	6.9		ナール ステック 博物館 49544c	
108	肥後山 如仙造										1854年-1860年	12.5	2.0	4.6	重37g 2.9g/cm	館蔵 14153	山口裕也氏 寄贈
109	肥後山 如仙造										1830年頃-1900年 頃	12.8	2.1	6.1	重74g 5.7 g/cm 銅 41g 4.3g/ cm 蓋26g 2.9g/cm	館蔵 6507	百瀬正明氏 寄贈
110	肥後山 如仙造										1830年頃-1900年 頃	11.4	2.1	6.5	重27g 2.3 g/cm 銅 20g 2.4g/ cm 蓋12g 1.6g/cm 銅8.2	館蔵 14618	山口裕也氏 寄贈
111	肥後山 如仙造										1830年頃-1900年 頃	9.5	5.2	7.6	蓋と碗で 83g	館蔵 576	
112	肥後山 如仙造										1830年頃-1900年 頃	9.5	5.5	7.7	蓋8.6 3.2 3.0	館蔵 4567	
113	肥後山 如仙造										1830年頃-1900年 頃	9.5	5.3	3.4	重42g 4.4g/cm	館蔵 7814	有田田代家 寄贈

114	三川内 田中造										1830年頃-1900年頃	9.9	5.1	7.0	3.5	碗43g 4.3g/cm 蓋20g 4.6g/cm 蓋径6.5 2.6	館蔵 14619	山口晋也氏 寄贈
115	萬宝山 佐栄造 肥後山 佐栄造										1871年-1890年頃	12.3	2.6	8.1	5.2	碗42g 3.3g/cm 碗径4c 5.6g/cm 蓋12g 3.2g/cm 碗径6	館蔵 14629	山口裕也氏 寄贈
116	大日本 佐栄造 三川内 福本造										1830年頃-1900年頃	12.9	1.9	9.2	4.5	皿50g 3.3g/cm 碗72g 5.6g/cm 碗径8.1 8.6 3.9	館蔵 14138	山口晋也氏 寄贈
117	大日本 福本造										1830年頃-1900年頃	9.4	7.1		4.4		館蔵 14624	山口晋也氏 寄贈
118	新田造										1830年頃-1890年頃	7.9	9.2		4.1		館蔵 14625	山口晋也氏 寄贈
119	三川内										1830年頃-1900年頃	11.1	1.6	6.7	5.0	碗5.7 6.1 5.5	館蔵 14622	山口晋也氏 寄贈
120	三川内										1830年頃-1900年頃	10.3	1.7		4.9		館蔵 363	中島政利氏 寄贈
121	三川内 今巻造										1830年頃-1900年頃	10.8	1.8	6.9	5.1	碗6.2 6.4 5.2	館蔵 14621	山口晋也氏 寄贈
122	三川内 田中造										1830年頃-1900年頃	5.7	5.7		5.1		館蔵 14623	山口晋也氏 寄贈
123	松尾造										1830年頃-1890年頃	11.1	2.3	7.6	4.6	碗5.7 5.7 5.3 蓋2.1 1.6 2.7	館蔵 14620	山口晋也氏 寄贈
124	三川内 金共造										1830年頃-1900年頃	12.4	2.3		4.8	水金使用	館蔵 7137	高取家コレ クション
125	三井倉										1830年頃-1900年頃	12.7	1.9		5.8	水金使用	館蔵 7136	高取家コレ クション
126	平戸屋 佐栄造										1871年-1890年頃	12.9	2.3	7.2	5.7	皿41g 3.1g/cm 碗7.5 4.4 3.5 裏付高さ 7.2	館蔵 6666	百瀬正明氏 寄贈
127	平戸屋 佐栄造										1871年-1890年頃	2.0	13.8		14.9 × 10.5	蓋が大きい方の高さは16.4	館蔵 7135	高取家コレ クション
128	萬宝山 佐栄造										1871年-1890年頃	9.6	5.5		3.6	皿12.5 2.4 5.4 蓋8.6 2.7 2.8	ナールス タック博物館 蔵 33022, 1160 5, 33018	
129	平戸屋 佐栄造										1871年-1890年頃	3.9	2.7		8.5	皿の寸法	ナールス タック博物館 蔵 48566	

表 2 有田三川内素地使用分類表

	①素地成形	②染付施文	③上絵施文	④販売者	事例 1		事例 2		事例 3		事例 4	
A	有田	有田	有田	有田								
B	有田	有田	-	有田								
C	有田	-	有田	有田								
D	三川内	-	有田	有田								
E	三川内	三川内	有田	有田								
F	三川内	-	三川内	三川内								
G	三川内	三川内	-	三川内								
H	三川内	三川内	三川内	三川内								

※資料の所蔵・寸法等のデータは表 1 参照

表3 有田三川内比較年表

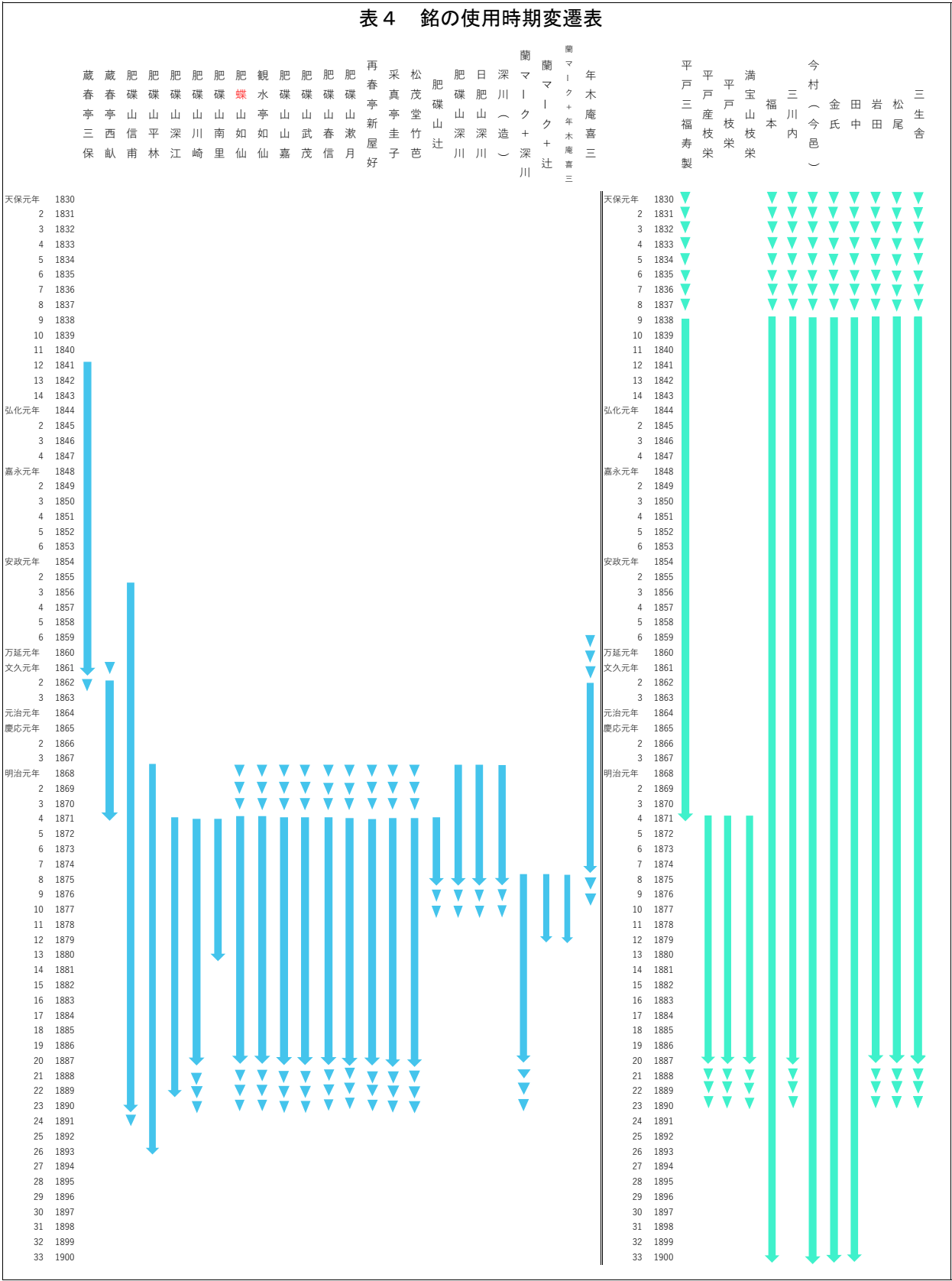
和暦	西暦	事項(有田)	事項(三川内)	出典
明和7	1770	「一、近年有田皿山陶器 唐阿蘭陀向不景気 ニ付而、今般吟味之上、当年よりハ右商人拾人相定、聊疎末之陶器不相渡様御敷申付儀候、・・・」		『皿山代官旧記覚書』p 263
	9	1772 「明和九辰申渡候 一、岩谷川内山 幸兵衛 其外拾人 其方共、阿蘭陀向徒物商先被差免置候ニ付、已前より出嶋致出入候處、今般御吟味之上、御奉行所被差留候ニ付、・・・」		『皿山代官旧記覚書』p 357
安永5	1776	「一、阿蘭陀向仕入之儀拾人ニ被相定置、其内弥惣右エ門・利惣次・喜兵衛儀ハ出嶋へも罷通商先仕儀候、右ニ付而ハ、阿蘭陀方読之品々毎歳九月廿日前、無間違作立、可相納儀候、・・・」		『皿山代官旧記覚書』p 266
天明7	1787	「一、一筆致敬達候、有田皿山阿蘭陀徒物商人吉富弥惣右エ門其外ハ先達而相願候ハ、嬉野湯宿罷在候酒屋好右エ門と申者、阿蘭陀水賣商売仕度、六府方へ相願被差免候旨相候儀由、・・・」		『皿山代官旧記覚書』p 497～498
寛政年間	1789～1801		寛政年間田中興兵衛尚儀は藩用器に染付松唐子絵を創案。	『肥前陶磁史考』p234
文化元～文政12	1804～1829		「文化(十四年にして改まる)文政(十二年にして改まる)の間に三川内の商人、大野慶介、大野基造、中里利助等、長崎に往來して蘭人との貿易を為す。」	『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三猿』p124
天保元年	1830		「天保元年蘭人長崎に來り本山製の茄菲具を嗜好す茲に貿易取引をなす則ち海外輸出の盛騰なり(之より前き文化文政年代に涉り本山の商人大野慶助、大野基造、中里利助、等長崎に往來し之か貿易の端緒を開きしに起因す)則ち本山は我が國に於ける茄菲具(一名薄手売形茶碗と云ふ)製作の元祖にして又海外輸出の率先者なり」(※1) 「茲に於て今村槌太郎より領主松浦家に上申し盛に茄菲具を作る領主より役員を長崎に遣し平戸焼物産会所なる物を設置し貿易をなす爾來貿易に従事したる主なる者は福本栄太郎、田中数之助、福本市治、藤本熊二、今村豊寿、梶尾仙太郎、金氏佐五郎、田中喜代作、等にして又梶尾平八郎、石口慶治、古川類造、池田仙之助、中里丑太郎、等は専ら製造に従事せり」(※2) 「天保元年長崎に於て蘭人と貿易を開始するに當て茄菲具の如きは非常に薄手となり身蓋合計の重八匁内外の品を製出す」(※3) 「大野慶助、大野基造、中里利助、は蘭人貿易の開祖なり」(※4) 「高橋平助、池田安次郎、古川正作、中里丑太郎は共に薄手珈琲具製作の名匠なり」(※5) 製造家藤本家九代目藤本熊治は「天保初年より長崎に往來して貿易業に熱心す明年初年厳密なる竹巻を発明し花瓶、皿、其他の磁器に応用し貿易品として賞用せらる」(※6) 「長崎の蘭人、三川内製の珈琲具を好むより、長崎の商人來りて取引を為す。茲に於て、今村槌太郎、領主(松浦家三十五世、源熙公)に上申し、盛に珈琲具を製す。領主、役人を長崎に遣し、平戸焼物産会所を設けて貿易をなさむ。蓋し薄手珈琲具製作の祖は池田安次郎、高橋平助、中里丑太郎、古川庄作なり。」(※7) 三川内の中里利助と古川類蔵は初めて和蘭人三川内焼売込の約束を締結。これより類蔵の兄正作及び大野慶助、大野基造等は蘭人の嗜好に必ずべく改作し、平戸焼の海外貿易を率先実行した(※8)。 今村槌太郎正文(今村家8代、文久元年)は藩主松浦藩に上申して蘭人向け珈琲器を盛んに製作(※9)。 「藩主は又長崎に平戸物産会所を設けて貿易を開始することゝ成つた。そして此薄手珈琲器製作の創始者は、池田安次郎、高橋平助、中里丑太郎、古川正作等といはれてゐる。」(※10)	※1『三川内窯業沿革史』p14・※2p14・15・※3p22・※4p22・※5p22・※6p64 ※7『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三猿』p125 ※8『肥前陶磁史考』p 238・※9p230・238・※10 p 238
	8	1837	予て和蘭人向けの珈琲器を研究していた池田安次郎は、天保8年に至り純白なる地質にして紙の如き薄手物を製作することに成功した。	『肥前陶磁史考』p239
	12	1841	久富と次兵衛昌常が藩の許可を得てオランダ貿易を始める。白川の喜十や南川路の柿右衛門、及び樋口等の第一流窯徒に製作させた。また薄手碗や珈琲器など普通物は三川内に注文し、オランダ向けには多く赤絵で武者絵が描かれた。	『有田町史 索引・年表編』p353 『肥前陶磁史考』p527・528
	14	1843	針尾島大崎の石で如猿大明神の神祠が建設され3月9日(如猿の忌日)に毎年例祭日と定められる。 「そして此頃藩は御手当米と称して米一千俵を三河内皿山庄屋に備える事と成つたのである。」	『肥前陶磁史考』p240
弘化3	1846		木原山の石丸一右衛門、樋口頼一等は江永山の有志と計り、代官川瀬庄兵衛へ上願して網代土の使用をされることとなった。土太白は三川内藩窯の他は使用が禁じられ、上白以下を三川内の民窯、下白の分を木原と江永の使用が許可された。維新後はこの制度は消滅(※1)。 「当時は三河内藩窯に使用さるゝ御用工人十八名窯焼手伝五十一名、赤絵屋六名にて、三河内山の戸数三百余、それに木原山と江永山を合して、三陶山の戸数五百余と称せられた。」(※2) 「弘化嘉永の間、御用焼は勿論、諸方商人よりの注文繁多となり、染付物、赤絵付、捺り物等を盛に製出す。当時御用工人十八名、窯業手伝五十一名、赤絵付六戸、三川内山、三豆倉科、木原山、江永山、合して五百余戸に及べり。此頃、土ッ店の上を夜中採掘し船積となし、他頭の皿山に転売するものあるを発見し、領主(松浦家三十六世源隆公)に上申し、御番宅を設けらるることとなる。」(※3)	※1・※2『肥前陶磁史考』p240 ※3『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三猿』p129
嘉永元	1848	藩は山方に国産方を置き長崎の蘭人へ肥前の国産品を販売し、有田焼の製造を奨励。翌2年6月より国産方から山方を分離して内廷に別局を建て側頭及び側目付が兼任して有田大川内等の陶器製造を監督することとなった。		『肥前陶磁史考』p529
	7	1854	「嘉永7年に及び汎く蘭人の賞用する所となり貿易益々殷盛となる此時代に於ては田中数之助、梶尾市良二、中里茂二郎、稲田代助、里見二郎助、等最盛に製造せり」	『三川内窯業沿革史』p15
安政3	1856	田代紋左衛門が異国向け磁器の製造販売を許可される(※1・2)。 久富は田代紋左衛門へ貿易商の一枚鑑札を条件付きにて譲与(※2)。		※1『有田町史 索引・年表編』p353 ※2『肥前陶磁史考』p530・531
万延元	1860	田代紋左衛門が有田焼輸出の利権を占有する。		『肥前陶磁史考』p536
文久元	1861	7月10日久富と次兵衛昌常(橘齋)没。		『肥前陶磁史考』p535
	2	1862	文久2年6月17日轆轤薄手物の名工今村利右衛門没。	『肥前陶磁史考』p245
元治元	1864		元治元年7月27日三川内風花鳥絵の名工今村利右衛門没。	『肥前陶磁史考』p245
慶応元	1865		「翌慶応元年には福本栄太郎が、平戸焼物産会所の業務を担当した。」(※1) 「平戸焼物産会所担当者として福本栄太郎、専ら貿易に従事す。」(※2) 「此年金氏太三郎、今村常作、森利喜松等の工夫に依つて、赤絵の二度付を創始した」(※3) 「金澤錦付二度焼は慶応元年金氏多三郎、田中数之助、今村豊寿、森利喜松、之を始む」(※4) 「八月四日領主(松浦家三十七世源詮公)幕府に伺済の上、朝廷へ年々貢献の品四種の内、本年は陶器(三川内焼)並に潮煮鮑を献上の旨届出らる。」(※5)	※1・3『肥前陶磁史考』p241 ※2『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三猿』p130・※5p131 ※4『三川内窯業沿革史』p 21・※間違p70
	2	1866	年末、佐賀藩が田代・久富の長崎支店から仕入れた陶器(異国向きの大花生、薄手の茶碗など)を長崎から上海へ積み出す(※1)。 田代紋左衛門が行っていた三川内素地へ有田で赤絵を施す生産手法が窯焼き等から糾弾される(※2)。	※1『有田町史 陶業編Ⅰ』p435・436 ※2『肥前陶磁史考』p 537～539・※3p241

和暦	西暦	事項（有田）	事項（三川内）	出典
	3	1867		
		パリ万国博覧会に幕府、薩摩藩、佐賀藩が参加。佐賀藩は佐野榮寿左衛門（常氏）と小出千之助を派遣し、販売担当として佐賀の商人野中元右衛門と深川長右衛門を随行させた（※1）。 パリ万国博覧会においてヨーロッパ向きの品（花瓶等）は高価で売れたが皿、茶碗、井、重ね物、蓋物は全く不向きであった（※2）。		※1『有田町史 陶業編Ⅰ』p433・※2p441
明治元	1868	八代深川栄左衛門（真忠）等は長崎輸出の一枚鑑札を拾枚に増加し、窯焼の名代札二百四十枚を二百四十枚に、赤絵屋名代札十六枚を二十二枚に、増加すべく主張した（※1）。 従来の田代紋左衛門に加えて泉山の深海平左衛門、百田多兵衛、鶴田次兵衛、上幸平の石川太左衛門、大樽の平林伊平、本幸平の深川栄左衛門、武田弥吉、赤絵町の富村森三郎、岩谷川内の山口伊右衛門の9名が新たに貿易商として許可された（※2）。 深海平左衛門は此時薄手焼を研究し、弁鉢及び皿付の高形碗を製作して大いに蘭人と取引した（※3）。 深川栄左衛門は長崎出島バザールに支店を設け蘭人との直接貿易を開始（※4）。この出島バザールの陶器販売店は後年深川忠次の所有となる（※5・6）。	「磁器白帆は明治三年今村喜八郎始む」（※7）	※1『肥前陶磁史考』p547・※2p548・※3p548・※4p657・※5p463 ※6大正11年に出島が国史跡に指定された時の官報告示では21番地の所有者は深川忠次、地種は宅地、地積は109.35坪となっている（出島復元整備室山口美由紀氏告示） ※7『三川内窯業治草史』p21
	2	1869		
		皿山代官は皿山郡令となる。皿山郡令は百武作十（前名は作右衛門）（※1）。百武郡令は新顔料の使用伝授のため清水卯三郎を有田に招聘（※2）。9月百武郡令は深海竹治など有田大川内の陶工を選抜し腹部各画を教授する仏国式陶技習得のため6ヶ月間東京へ派遣（※3）。 百武郡令は清水の陶工三代高橋道人を有田へ招聘し、轆轤法や楽焼の趣味、京窯錦付の伝習を嘱託。一ヶ月の滞在の中製品には肥前官窯の銘が記されている（※4）。	製造家中里庄之助は「明治二年当山里長拜命」（※5）	※1『有田町史 索引・年表編』p354 ※2『肥前陶磁史考』p551・※3p551・※4p550～551 ※5『三川内窯業治草史』p49
	3	1870		
		ゴットフリート・ワグネルは4月下旬から8月上旬まで（『肥前陶磁史考』p559の明治4年説は誤り）有田に滞在しコパルトの使用法等各種の西洋陶技を教える。深海墨之助、辻勝蔵等5名は本窯彩料即ちコパルト青、クローム鉄、金襴脂等の製法を習う（※1）。 4月伊万里商社設立されるが翌年廃藩により中止。支配人は平林伊平、元締役は手塚亀之助ほか（※2）。	今村喜八郎は磁器白帆を創作（※3）。	※1『有田町史 陶業編Ⅰ』p466 ※1『陶磁工芸の研究』p332・337 ※1『肥前陶磁史考』p559～565・※2p553・554・※3p245
	4	1871		
		6月21日久富と平路陶器厚海岸の船中にて没（※1）。 7月14日、廃藩置県が実施され皿山郡令所廃止。佐賀本藩は佐賀県となり、支藩はそれぞれが城・運池、鹿島県となる（※2）。 9月4日、佐賀県と厳原県を合併して伊万里県となる（※3）。 9月14日辻喜平次（辻家10代）没（※4）。 深川栄左衛門工部省電信局の命により低圧電気碍子を製造（※5）。 12月2日年木庵主人深海平左衛門（前名喜三）没す（※6）。	「明治四年王政復古となるや、藩は当時の郡令古川澄二（運吉）に、平戸焼物産会社一切の業務を譲り渡すこととなり、澄二は福本榮太郎と図りて個人経営となし、満貫山商舗と改めた。故に当時の製品には満貫山枝榮製、又は平戸産枝榮造の銘がある。」（※7） 「旧藩主源詮公より当時の代官、古川澄二に平戸焼物産会所一切の業務を譲り渡さる。古川は福本榮太郎等と図り、満貫山商舗を開き、製品には満貫山枝榮製と銘記す。」（※8）	※1『肥前陶磁史考』p555・※4p573・※5p571・※6p572・※7p241 ※2『有田町史 索引・年表編』p354・※3p354 ※8『平戸藩窯（三川内焼）と鶴峰園 三猿』p131
	5	1872		
		5月29日伊万里県を佐賀県と改称する（※1）。 平林伊平は横浜本町に支店を開設し有田焼の洋卓食器貿易を開始（※2）。	「明治五年博覧会出品の目的を以て有田深川栄左右（ママ）衛門より紅茶々碗錦付の注文に接し之が焼付をなし高評を博す 但六ヶ仙画極彩色、赤絵付森利喜松」（※3）	※1『有田町史 索引・年表編』p354 ※2『肥前陶磁史考』p582 ※3『三川内窯業治草史』p22
	6	1873		
		平林伊平エは一尺四寸のプラ形・錦鳳凰刺画花瓶などをウィーン万国博覧会に出品（※1）。 深川栄左衛門は博覧会出品物として薄手珈琲器を三河内に注文、森利喜松は六歌仙画極彩色の赤絵を施す（※2・3）。 深川栄左衛門、百田多兵衛らは陶業盟約2巻を制定（※4）。 深川栄左衛門はウィーン万国博覧会で名誉之章（DIPLOMA OF HONOR）受賞（※5）。 審査官納富次郎、同通弁緒方惟直、肥前有田陶器製造所はウィーン万国博覧会にて名誉状を受賞（※6）。 6月16日今泉今右衛門（9代）没（※7）。	有田の深川栄左衛門より博覧会出品物として薄手珈琲器の注文があり、これに応じた森利喜松は六歌仙画極彩色の赤絵を施して高評を博した（※8）。 長崎縣三河内・枝榮はウィーン万国博覧会に金襴袷高猪口十二箇ツツ二組、コープヒー碗二箇ツツ三組出品（※9）。 中里庄之助は明治六年「三ツ岳陶土取締役となる」（※10）	※1『明治期万国博覧会美術品出品目録』p110・※6p199・※9p110 ※2『肥前陶磁史考』p241・242・※3p539・※4p584・※7p575・※8p241～242 ※5香蘭社ラベル『香蘭社130年史』p180 ※10『三川内窯業治草史』p49
	7	1874		
		2月佐賀の乱起こる。 深川栄左衛門と手塚亀之助は上京し久米邦武に面会、フィラデルフィア万国博覧会開催のことを聞く（※1）。 10月有田新村字外尾村の松村九助は長崎の商人よりコパルト青を数千斤購入し名古屋の七軒町で尾濃の陶山に希薄土の中樽保屋谷のギチ土とともに販売（※2）。	「明治七年前記古川澄二の甥に当り、桑古場藩の豪農にて元里正の職にありし豊島政治は、家政を舍弟菊蔵に委ねて自ら三河内に来り、前期満貫山商舗を一切引受くることと成った。」（※3） 製造家豊島政治は満貫山商舗について「明治七年古川運吉より一切の業務を譲り受け斯業の発展を謀り明治十八年当山旧平戸藩主御代官屋敷に商店を開設し更に規模を拡張し盛に製造をなさしめ貿易に従事す」（※4） 明治7年12月13日藩窯松唐子絵の名画工今村幾太郎没（※5）。 金襴錦付窯森利喜松は「明治七年内国博覧会に出品し賞牌を受く之れ実に本山受賞者の機転なりとす」（※6）	※1『肥前陶磁史考』p586～587・※2p587・※3p242・※5p245 ※4『三川内窯業治草史』p71・※6p70
	8	1875		
		2月深川栄左衛門、手塚亀之助、深海墨之助、辻勝蔵の四人協同で香蘭社設立、社長は深川栄左衛門。工場は栄左衛門と墨之助及び勝蔵邸とす（※1）。 深海竹治含味蔵を発明（※2）。 4月10日付で深川栄左衛門等から佐賀県令北島秀朝宛に「会社願」が出され、同日付の37条からなる「香蘭社則」が作成される（※3）。 4月28日東上を命ぜられた川原忠次郎は納富次郎とともに官立國式陶業伝習所にて全国陶業者の子弟に石膏模型の造法、匠鉢重積法、水金使用法等を教授（※4）。 内務省勅業寮出身仕納富次郎は有田で米国費府大博覧会出品物の製造を指導することとなった（※5）。 10月2日富村森三郎没。赤絵屋16軒の一人芳右衛門の子。長崎石灰町に支店を設けて貿易に従事（※6）。	「明治七年前記古川澄二の甥に当り、桑古場藩の豪農にて元里正の職にありし豊島政治は、家政を舍弟菊蔵に委ねて自ら三河内に来り、前期満貫山商舗を一切引受くることと成った。」（※3） 製造家豊島政治は満貫山商舗について「明治七年古川運吉より一切の業務を譲り受け斯業の発展を謀り明治十八年当山旧平戸藩主御代官屋敷に商店を開設し更に規模を拡張し盛に製造をなさしめ貿易に従事す」（※4） 明治7年12月13日藩窯松唐子絵の名画工今村幾太郎没（※5）。 金襴錦付窯森利喜松は「明治七年内国博覧会に出品し賞牌を受く之れ実に本山受賞者の機転なりとす」（※6）	※1・2『肥前陶磁史考』p589 ※3『有田町史 陶業編Ⅱ』p73～86 ※4『肥前陶磁史考』p589・※5p590・※6p591 ※7『平戸藩窯（三川内焼）と鶴峰園 三猿』p132
	9	1876		
		3月から開催のフィラデルフィア万博へ参加のため香蘭社社員手塚亀之助、深海墨之助、深川卯三郎等渡米。滞在1ヶ年余、翌10年3月帰朝（※1）。 香蘭社の深川栄左衛門、深海墨之助、辻勝蔵はそれぞれ獅子置物他、地紋花井画ランプ台他、結手錦千鳥割面花生他を出品（※2）。 香蘭社はフィラデルフィア万国博覧会で名誉大賞受賞（※3）。 フィラデルフィア万国博覧会で深川栄左衛門、深海墨之助、辻勝蔵が受賞（※4）。 香蘭社はフィラデルフィア万国博覧会へ深川製の「薄手皿附大猪口」「薄手皿附奈良茶」、三川内製の「錦二度焼六武者外装皿」の「カヒー碗」等を出品（※5）。 8月佐賀県が長崎県に合併される（※6）。 黒牟田の梶原友太郎は初めて径4尺の大鉢を製作。地型製作は大工の小林恵七、轆轤地伸への細工は福島利次郎（※7）。	中里庄之助は明治9年「本山製陶業取締役となる」（※8）。 金襴錦付窯森利喜松は「明治九年有田深川栄左右（ママ）エ門より錦付の注文を受け之が焼付をなし大に高評を博す爾来十有余年の間に於ける有田香蘭社発売の金襴（ママ）付は殆ど氏の手に成る」（※9） フィラデルフィア万国博覧会へ香蘭社は「三河内磁器、小壺（1個赤焼紋浪二獅子彫画）、薄手ノ茗碗（各種126個）、花瓶（5対）」を出品（※10）。	※1『肥前陶磁史考』p591・※7p605 ※2『明治期万国博覧会美術品出品目録』p224～226・※4p235 ※3『香蘭社130年史』p207〔資料5〕香蘭社の受賞 ※5森谷美保 2015年「香蘭社の誕生と『温知図録』編纂を巡ってー納富次郎とフィラデルフィア万博を中心にー」別表p27～31 ※6『有田町史 索引・年表編』p355 ※8『三川内窯業治草史』p49・※9p70 ※10『明治期の三川内焼産在化の取り組みについてー国内外の博覧会出品をめぐるー』p112
	10	1877		
		香蘭社は第1回内国勸業博覧会で名誉之賞、龍紋褒賞、褒状受賞（※1）。 第1回内国勸業博覧会で香蘭社は竜紋賞牌を受賞（※2）。 7月21日田代紋左衛門の弟田代慶右衛門没。慶右衛門は紋左衛門と協力して長崎西長町にて貿易を伸展し、上海及び横濱（明治7年）等に支店を設けた（※3）。 香蘭社は第1回内国勸業博覧会へ「薄手 但台皿付」の「奈良茶碗」、「錦二度焼浪竜皿」の「花生」等を出品（※4）。	明治10年5月12日彫刻細工の名工今村良作没（※5）。 「天保初年に及長崎に於て貿易を開始す其最隆盛を極めたるは明治十年より十四年の間なり」（※6） 第1回内国勸業博覧会で「中里茂三郎外一名」は「加非碗酒蓋各種茶碗」を出品し花紋賞牌を受賞（※7）。	※1『香蘭社130年史』p207〔資料5〕香蘭社の受賞、および「近代の九州陶磁展」p127に受賞内容の解説文 ※2『内国勸業博覧会美術品出品目録』p311 ※7p332 ※3『肥前陶磁史考』p607・※5p245 ※4『近代の九州陶磁展』p133No4-26、p135No87 ※6『三川内窯業治草史』p26

和暦	西暦	事項（有田）	事項（三川内）	出典
11	1878	深川栄左衛門バリ万国博覧会のため渡欧、金牌賞を得る。欧州各地の陶業を視察し、簡単な仏国式製陶機一式を購入（※1）。 香蘭社はバリ万国博覧会に「磁器各種」を出品し金牌を受賞（※2）。 香蘭社はバリ万国博覧会へ磁器、水鉢、三道長、ラング台、珈琲碗、スープ皿、肉皿等を出品し金牌を受賞（※3）。 香蘭社はバリ万国博覧会へ「 錦二度焼武者画 」の「花生」、「 錦二度焼六ヶ仙画 」の「茶碗」、「 錦二度焼松竹梅菊画 」の「カーヒー碗」等を出品（※4）。 6月21日久富与次兵衛昌保（始め三保助と称し、藤草亭三保の銘款使用）没（※5）。 7月手塚亀之助は内務省勸商局長河瀬秀治に洋器海外輸出の保護を嘆願。12月起立工商会社を通じて欧米各国へ5千円分の香蘭社製品を明治12年12月20日までに販売することとなった（※6）。	長崎県庁はバリ万国博覧会へ「三河内磁肉皿、 珈琲碗 、 麦酒盞 、酒鍾」を出品し、賞状を受賞（※7）。 長崎県庁は「三河内磁器肉皿、 麥酒盞 等」を出品し賞状を受賞（※8）。 長崎県庁はバリ万国博覧会に中里茂三郎・白石蔵治製作の「肉皿、 緑金太白 、6個」「酒盃、 緑金太白 、 麦酒盞 、6個」「酒盃、 緑金太白 、 麦酒盞 小形、6個」「 カーヒー 茶碗、 緑金太白 、竹筒形、6個」「 カーヒー 茶碗、 緑金太白 、筒形、4個」「 カーヒー 茶碗、 緑金太白 、丸形、5個」を出品し名誉賞を受賞（※9）。 製造家福本九市は「明治十一年要盛焼を始め則ち元祖なり」（※10）。	※1『肥前陶磁史考』p608・※5p608・※6 p 609～611 ※2『海外博覧会本邦参同資料（第2輯）』p53 ※3『明治期万国博覧会美術品出品目録』p244～245、249・※7p243、252 ※4『近代の九州陶磁展』p140No146～148 ※5『海外博覧会本邦参同資料（第2輯）』p65 ※9『明治期の三川内焼頭在化の取り組みについて―国内外の博覧会出品をめぐる―』p112 ※10『三川内窯業治草史』p 57
12	1879	1月22日深川栄左衛門横浜に帰着（※1）。 3月深川栄左衛門パリから帰朝し、白川小学校へ1千円を寄贈（※2）。 薄墨色彩料は「 艶なし丹黄（ウランニウム彩料に酸化コバルトを混用せしもの） にて、 是が最初のものであり。 」とある（※3）。 2月に手塚、深海兄弟、辻、川原の連名で精磁会社の「盟約書」が締結される（※4）。 3月深川栄左衛門、深海墨之介、辻勝蔵、手塚亀之助、深海竹治名で商務局長大蔵省大書記官河瀬秀治宛に「香蘭社分離願」出される（※5）。 手塚亀之助は深海墨之介・竹治兄弟、辻勝蔵と精磁会社を創立し百田恒右衛門、川原忠次郎が入社（※6）。 7月深川栄左衛門は香蘭社を独立して経営し、合名会社を組織、専ら外国貿易の製品を主とし、長崎出島21番地及び横浜本町4丁目56番地に支店を開設（※7）。 香蘭社はシニエ万国博覧会で銅牌、長崎県共進会で一等賞金牌受賞（※8）。 香蘭社はシニエ万国博覧会で特絶一等、一等、銅牌を受賞（※9）。 9月起立工商会社は「約定書」を精磁会社と締結（※10）。 精磁会社明治12年12月開業（※11）。 「明治十一年栄左衛門自カラ仏国大博覧会ニ渡航シ同国リモージュ府製ノ製土機ヲ購入シ帰来事故アリテ今タ（※明治19年時点）之ヲ設立運用スルニ至ラス」（※12）	口石本家八代目口石丈之助は「明治十二年対州に於て陶土を発見し窯業上に貢献すること頗る多き現今重要な原料の一なり」（※13）	※1『有田陶業側面史（明治編）』松本静二の生涯 上』p139・※4p144・※6p143・144 ※2『肥前陶磁史考』p611・※3p564・※6p611・※7p612 ※5『有田町史 陶業編Ⅱ』p89・90・※11p109 ※6『香蘭社130年史』p207 ※9『海外博覧会本邦参同資料（第2輯）』p83 ※10鍵谷親善「精磁会社（明治12～26年）に関する資料と解説」資料12『約定書』 ※12『府縣陶器治草陶工傳統』p 142 ※13『三川内窯業治草史』p 59
13	1880	香蘭社はメルボルン万国博覧会で名誉賞牌、愛知県博覧会で優等賞牌、宮城県博覧会で特別優等賞牌を受賞（※1）。 香蘭社はメルボルン万国博覧会で五等褒状を受賞（※2）。 11月29日南里嘉十没（※3）。	「磁器基石は明治十三年藤本熊二、藤本源吉之を始む」（※4） 製造家藤本本家九代目藤本熊治は「明治十三年磁器基石の製作を發明す品質の佳良と値の廉なるを以て彼等の費用する所となる則ち基石製作の元祖なり」（※5）	※1『香蘭社130年史』p207 ※2『海外博覧会本邦参同資料（第2輯）』p109 ※3『肥前陶磁史考』p573 ※5『三川内窯業治草史』p 21・※5p64
14	1881	香蘭社は第2回内国勲業博覧会で有功一等賞金牌受賞（※1）。 第2回内国勲業博覧会が開かれ精磁会社は進歩賞牌二等、香蘭社は有効賞牌一等、香蘭社出品工人職工総衆と精磁会社出品工人職工総衆は有効賞牌三等、白川小学校出品協賛人江越礼太、土岐田守は協賛賞牌三等を受賞（※2）。 10月手塚亀之助は米国ボストンの陶器商フレンジを有田に同伴し、50余日有田に滞在しフレンジ助言を受けて外国輸出品の雛形170種を製作（※3）。		※1『香蘭社130年史』p207 ※2『内国勲業博覧会美術品出品目録』p244～245、249・※3p397、および『近代の九州陶磁展』p131に受賞内容の解説文 ※3『肥前陶磁史考』p616
15	1882		「今村豊寿、貿易事業に努め、長崎に於て、盛に取引を為す。」「口石丈之助、香戸の透影を試む。」「中里森三郎、(中里家傍系九代の孫なり、丑太郎は薄手珈琲具製の元祖)長崎及び阪神地方、横浜への販路に拡張に努め、貿易に従事す。」	『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三狼』p133
16	1883	5月9日佐賀県が長崎県から分離独立する（※1）。 精磁会社はオランダアムステルダム万国博覧会で金牌受賞（※2）。 精磁会社の川原忠次郎、リモージュで製陶機購入契約（※3）。 香蘭社はオランダアムステルダム万国博覧会で名誉賞金牌、アメリカ外国製品・美術博覧会（ボストン）で金牌受賞（※4）。 ボストン技術工芸万国博覧会へ「精磁社(ママ)」と香蘭社が出品（※5）。		※1『有田町史 索引・年表編』p356 ※2『肥前陶磁史考』p633・※3p633 ※4『香蘭社130年史』p207 ※5『海外博覧会本邦参同資料（第3輯）』p15
17	1884	香蘭社はニューオリンズ世界産業・綿業100周年記念博覧会で銅牌受賞（※1）。	豊島政治は富田熊三と協力して旧代官屋敷に商店を開き、爾来東京、横浜、神戸長崎等の貿易に従事（※2）。 6月中里庄之助は興産会社を組織しその取締りとなった（※3）。 口石丈之助は明治15年頃より香戸等の透影を研究し同17年頃に及んで逸品を製作。明治33年12月6日没（※3・※4）。 藤本恒太郎は磁器基石を創作（※5）。 「藤本恒太郎、磁を以て基石の製作を發明す。(恒太郎は藤本家十代の孫、先祖治左衛門は手伝窯焼の元祖、 九代熊治は嘉永年間赤給付を發明し、天保年間以來長崎貿易に従事し、明治初年の頃より緻密なる竹巻を發明し、花瓶、皿、其他に応用し、高評を博す) 」（※6） 「此頃より送付物素質優等なること、内外人の賞する処となり豊嶋正治、富田熊三郎と図り、協力して三川内山田平戸領主代官屋敷に商店を開き、爾来東京、横浜、神戸、長崎、其各地に製品を販売せり。」（※7）	※1『香蘭社130年史』p207 ※2『肥前陶磁史考』p242・※3p 245・※5 p 245 ※4『三川内窯業治草史』p59 ※6『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三狼』p133～134・※7p134
18	1885	東京上野において五品共進会が開かれ、香蘭社が2等賞、精磁会社が3等賞、田代助作等4人が5等賞、瀬戸口富右衛門等6人(小田志の松尾喜三郎と樋口平兵衛を含む)が6等賞、今泉藤太等17人(伴島郡戸原の副島亀三と養父郡白壁の協利会社を含む)が7等賞を受賞（※1）。	製造家今村兵作は「明治十八年上野共進会に出品し賞を受く」（※2） 画師田中佐十郎は「明治十八年東京上野共進会に出品し賞を受く」（※3） 製造家豊島政治は「明治十八年山田平戸藩主御代官屋敷に商店を開設し更に規模を拡張し盛に製造をなすに貿易に従事す」（※4）	※1『肥前陶磁史考』p637 ※2『三川内窯業治草史』p39・※3p 53・※4p71
19	1886	2月2日深海墨之助41歳で卒去。		『肥前陶磁史考』p640
20	1887	7月1日精磁会社の蒸気機関による製陶工場落成式挙行さる（※1）。	藤本熊次郎と同源吉は磁器養畫を創作（※2）。 「養畫は明治二十年、藤本熊二、藤本源吉之を始む」（※3） 「『ボカシ』画其他に蠟塗を使用する便法は明治二十年本山に於て今村寅之助之を發明す以来追々他山に使用するに至る」（※4） 画師今村虎之助は「明治二十年『ボカシ』蠟塗の至便法を發明し大に着画上の革新をなす」（※5） 「此頃より成形に石膏型を用ゆ、多くは精密なる小形のものに応用す。」（※6）	※1『有田陶業側面史（明治編）』松本静二の生涯 上』p187～189 ※2『肥前陶磁史考』p245 ※3・※4『三川内窯業治草史』p 21・※5p42 ※6『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三狼』p134
21	1888	深海竹治は堆土彫り技法を完成（※1）。 バルセロナ万国博覧会で深川与太郎(9代深川栄左衛門)および久米桂一郎(起立工商会社取扱)が金牌を受賞。深川は香蘭社製品、久米は精磁会社製品を出品か（※2）。	6月21日薄手の筆の長軸など轆轤細工の名工古川正作没（※3）。	※1『肥前陶磁史考』p652・※3 p 245 ※2『海外博覧会本邦参同資料（第3輯）』p83・89および『有田町史 陶業編Ⅱ』p145・146
22	1889	1月26日川原忠次郎没（※1）。 10月23日8代深川栄左衛門真忠卒去。行年58歳。7代栄左衛門忠顕の長男、前名森太郎、号龍阿。卒去当時長男与太郎はバリ万国博覧会のため渡欧中であり15ヶ月仏英地の各地を巡視し、製陶機械及び陶器顔料等を購入し、帰途米国王トの製陶地を視察中であった（※2）。 香蘭社はバリ万国博覧会で金牌受賞（※3）。 バリ万国博覧会で香蘭社は金賞、小栗虎一(香蘭社)と香蘭社製造人は銅牌を受賞（※4）。 7月10日辻勝蔵、精磁会社を退社（※5）。 深江鏡次郎没（※6）。 手塚亀之助は精磁会社を整理し後事を深海竹治と百田恒右衛門に托して翌年の秋東京に移住した（※7）。	「明治二十二年意匠伝習所を開設し東京美術学校其他の学校より図案科教師を聘請し大に改良を施しつつあり」（※8） 「中里森三郎、仏国巴里万国博覧会に出品す。」（※9）	※1『肥前陶磁史考』p652・※2 p 656～657・※6p572 ※3『香蘭社130年史』p207 ※4『明治期万国博覧会美術品出品目録』p263・264 ※5『有田陶業側面史（明治編）』p199・※7p60 ※8『三川内窯業治草史』p 23 ※9『平戸藩窯(三川内焼)と鶴峰園三狼』p134

和暦	西暦	事項（有田）	事項（三川内）	出典
	23	1890 2月15日深川与太郎フランスから帰朝。9代栄左衛門を襲名（※1）。 香蘭社は第3回内国勲業博覧会で有功一等賞金牌受賞（※2）。 第3回内国勲業博覧会において精磁会社は「牡丹置上ケ藍地香炉」で二等紗技賞、香蘭社は「箆中子母鶏置物」で三等紗技賞を受賞（※3）。 田代助作没（※4）。	口石丈之助は透影製品を皇室に献納（※5・※6）。 福本源七は東京浅草松浦伯邸御用焼の担任者となり明治27年まで勤務（※5）。 「明治二十三年 明治天皇陛下佐世保鎮守府へ御臨幸の朝、御在所陳列品中なる今村克次郎出品の太白鶏の置物一対が、御買上の光栄に浴したのである。」（※5） 「明治二十三年 天皇陛下佐世保御臨幸の朝（行在所陳列品）太白鶏の置物一対御買上の光栄を担ふ」（※7） 製造家今村十九郎は「明治二十三年 天皇陛下佐世保御臨幸の際（行在所陳列品）唐子吉の香炉一個御買上の光栄を担ふ」（※8） 画師田中佐十郎は「明治二十三年 天皇陛下佐世保御臨幸之際松画花瓶一個御買上の光栄を担う（行在所陳列品）」（※9） 製造家椋尾寅四郎は「明治二十三年 天皇陛下佐世保御臨幸の際（行在所陳列品）小形人形二個御買上の光栄を担ふ」（※10） 金襴錫付糸森利喜松は「明治二十三年 天皇陛下佐世保御臨幸の際（在所陳列品）錫付珈琲具一打御買上の光栄を担ふ」（※11） 口石丈之助は「同年東京上野博覧会に三段香炉一個、二段香炉一個を出品し陳列の当日直に外国人の購求する所となる」（※12）	※1『肥前陶磁史考』p661・※5p242 ※2『香蘭社130年史』p207 ※3『内国勲業博覧会美術品出品目録』p448・449 ※4『明治有田偉人伝』p12 ※6『三川内窯業治革史』p60・※7p36・※8p39・※9p54・※10p67・※11p70・※12p60
	25	1892 城島岩太郎が愛知、岐阜両県の陶業視察後に有田で石灰軸が普及（※1）。〈深海竹治は明治14年には石灰軸を完成させているが一般には応用されていない。〉（※2）。 1月31日江越礼太道容没（※3）。	「明治二十五年里見政七は、三河内山窯焼總代に推選され、地渡山林及江上村土場（網代）並びに早岐港原土貯蔵倉庫等、一切の監督をなすことと成った。」（※4） 「此歳中里与茂作（茂右衛門の傍系）松浦家御用焼を命ぜられた。」（※5）	※1『肥前陶磁史考』p682・※2p617・※3p681・※4・5p242
	26	1893 2月26日深川栄左衛門の弟深川忠次、シカゴ万博のため出発（※1）。 深川栄左衛門、藤井喜代作等は肥前屋と称する有田焼輸出一手間屋を神戸に設置。3年で任意解散（※2）。 7月3日平林伊平没（※3）。 12月5日片岡侍従来社（※4）。 香蘭社はシカゴ万国博覧会で銅牌受賞（※5）。 シカゴ・コロンブス万国博覧会で福島幸次郎、樋口寛左衛門、樋口治実、岩尾虎一、岩尾久吉、城島栄吉、松尾徳助、松村清吾、前田儀右衛門、酒井田柿右衛門、精磁会社、山本柳吉、香蘭社、鶴田治平、辻そでが受賞（※6）。	米国王俄古博覧会へ出品（※7）。 シカゴ・コロンブス万国博覧会で古川又造、豊島政治が受賞（※8）。	※1『肥前陶磁史考』p688・※2p690・※3p573/689・※4p691 ※5『香蘭社130年史』p207 ※6『明治期万国博覧会美術品出品目録』p276・※8p276 ※7『三川内窯業治革史』p24
	27	1894 1月深川忠次、深川製磁を創業（※1）。	製造家口石傍系七代口石安太郎は「明治二十七年より三ツ岳陶土取締役をなす又頗る研究家にして嘗て斬新なる「キビス」を発明世の賞用する所となる」（※2）	※1『有田町史 陶業編Ⅱ』p125 ※2『三川内窯業治革史』p61
	28	1895 小松宮妃香蘭社へ宿泊（※1）。 香蘭社は第4回内国勲業博覧会で有功一等賞金牌受賞（※2）。 第4回内国勲業博覧会で精磁会社は有功一等賞、同社の深海竹二（治）は有功二等賞、香蘭合名会社は有功二等賞を受賞（※3）。 第4回内国勲業博覧会に「肥前国西松浦郡有田町香蘭合名会社業務担当員 深川栄左衛門」は「磁器花瓶（雲竜様機）」を出品（※4）。 10月1日有田徒弟学校開校式（※5）。	京都内国勲業博覧会へ出品（※6）。	※1『肥前陶磁史考』p692・※5p691 ※2『香蘭社130年史』p207 ※3『有田町史 商業編Ⅱ』p135・136 ※4『内国勲業博覧会美術品出品目録』p288 ※6『三川内窯業治革史』p24
	29	1896 3月24日大隈重信泉山磁石場を視察し香蘭社へ1泊（※1）。 深川栄左衛門は自費を投じて西松浦郡同業者の製品々評会を桂雲寺に於いて開会。之が爾後毎年開会さるる有田陶磁器品評会の嚆矢。（※2） 深川栄左衛門は宮内省御用品の製作を命じられる（※5）。		※1『肥前陶磁史考』p692・※2・3p693
	30	1897 精磁合資会社は製土機械を除く製造機械一式を中村亀一に譲渡（※1）。		『有田陶業側面史（明治編）』p206
	31	1898 1月2日深海竹治50歳で卒去。（『肥前陶磁史考』p695には明治30年1月2日に卒去と記されるが、深海竹治墓碑には31年1月2日死亡とある。）		『肥前陶磁史考』p695 『幻の明治伊万里 悲劇の精磁会社』p179
	32	1899	「明治三十二年当山に於て陶磁器意匠伝習所を開設す」	『三川内窯業治革史』p28・72
	33	1900 2月2日田代紋左衛門守護没（※1）。 3月14日西松浦郡陶磁器同業組合（窯焼91名、赤絵屋54名、陶磁器商87名）組織され、深川栄左衛門会長に推薦さる（※2）。 3月14日深川忠次パリ万国博覧会視察のため佐賀県出品者総代として出発。仏国からの帰途英国でエイログラフ（吹掛器械）を購入しその中の1個を有田工業学校へ寄贈、これより一般に使用されるに至った（※3）。 4月有田徒弟学校は佐賀県立佐賀工業学校有田分校として設立され泉山の新校舎へ移転（※4）。 10月深川栄左衛門真忠の記念碑陶山神社境内に建設さる（※5）。 香蘭社はパリ万国博覧会で金牌受賞（※6）。 香蘭社はパリ万国博覧会に百田理二郎、深川忠次、香蘭合名会社深川栄左衛門、今泉藤太、山口徳一、上滝徳之助、藤崎太平、青木甚一郎、酒井田柿右衛門、富水源六等33人が出品し、香蘭合名会社と深川忠次が金牌、小栗虎一（香蘭社）と後藤隆一（深川忠次）が銀牌協賞、山本周蔵と江上熊之助と松尾徳三が銅牌、諸隈徳造（香蘭社）と山口五左衛門（深川忠次）が銅牌協賞、藤崎太平、酒井田柿右衛門、榎野の富永源六が褒状、小栗善作（香蘭社）と泉山貞次（深川忠次）が褒状協賞を受賞（※7）。	「明治三十三年豊島政治は里見政七、中里利一、今村虎之助、中里巳午太等と計り、県費の補助を得て、陶磁器意匠伝習所を開設し、陶面と整型の二実科を教科目とした。」（※8） 図案の改良のため夏季休暇を利用して東京より島田佳実、有田より徳見知歌が招聘された（※9）。 所長は豊島政治、副所長は里見政七及び古川又造（※10）。 福本源七は群馬県群馬郡生田山長命寺の五百羅漢を製作（※11）。 皇太子殿下御成婚の大典に際し、今村克次郎製作の高さ1尺8寸の透影香炉一対を佐世保市から献納（※12）。 「明治三十三年 皇太子殿下御結婚の大典に際し組合名義を以て花瓶一個を奉祝献納し陛下御満足御献納の光栄を担ふ」（※13） 製造家中里巳午太は「明治三十三年皇太子殿下御結婚の大典に際し佐世保より献納の香炉一対製造の嘱託を受たり」（※14） 仏国巴里万国博覧会へ出品（※15）。 製造家中里泰三郎は「明治三十三年巴里万国博覧会に出品し賞を受く」（※16） パリ万国博覧会に中里利平、中里利平、立石代吉、立石治助、森小一郎、中里巳午太、小栗卯平、今村寅之助、豊島政治、里見竹四郎、里見政七、山口島之助、横石鹿吉、横石政太郎が出品し、里見政七と豊島政治が磁器花瓶其他で褒状を受賞（※17）。	※1『肥前陶磁史考』p698・※2p699・※3p699～700・※4p700・※5p700・※8・9・10・11・12p243 ※6『香蘭社130年史』p207 ※7『明治期万国博覧会美術品出品目録』p296・297・322・328・331・337・340・344・※17p297・340 ※13『三川内窯業治革史』p72・※14p49・※15p24・※16p44
引用文献 池田史郎編 1966年『血山代官旧記覚書』血山代官旧記覚書刊行会 中島浩気 1985年（原著1936年）『肥前陶磁史考』香蘭社 大畑三千夫 1992年（原本『平戸焼治革一覽（旧松浦藩伯爵家文庫編原稿写し）』佐藤独嚙 1918年）『平戸藩窯（三川内焼）と鶴峰園 三猿』 高橋久満治 1911年『三川内窯業治革史』 塩田力蔵 1927年『陶磁工芸の研究』 東京国立文化財研究所 1997年『明治期万国博覧会美術品出品目録』 博覧会倶楽部 1928年（復刻版1997年）『海外博覧会本邦参同資料（第2輯）』 「明治期の三川内焼顕在化の取り組みについてー国内外の博覧会出品をめぐるー」松下久子 2016年『長崎歴史文化博物館研究紀要 第10号』長崎歴史文化博物館 東京国立文化財研究所美術部 1996年『内国勲業博覧会美術品出品目録』 前山博『明治前期，内外博覧会出品の陶磁器についてー佐賀・長崎県行政資料などからー』表1・表2 1983年『近代の九州陶磁展』佐賀県立九州陶磁文化館 森谷美保 2015年『香蘭社の誕生と『温知図録』編纂を巡ってー納富次郎とフィラデルフィア万博を中心にー』『明治有田 超絶の美 万国博覧会の時代』論考集 「精磁会社（明治12～26年）に関する資料と解説（2）」鎌谷親善 1992年『技術と文明』7巻2号資料12『約定書』 「府縣陶器治革陶工傳統誌」（明治19年農商務省農務局、工務局）1994年『明治後期産業発達史料第187巻』 有田町史編纂委員会 1985年『有田町史 陶業編Ⅱ』有田町 有田町 2019年『明治有田偉人伝』 蒲地孝典『幻の明治伊万里 悲劇の精磁会社』2006年 山田雄久『香蘭社130年史』【資料5】香蘭社の受賞 香蘭社 2008年				

表 4 銘の使用時期変遷表



柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 2

— 延宝様式の時代 —

宮木貴史

1. はじめに

肥前磁器の裏には、「大明成化年製」や「福」などの文字やマークのようなものが染付や色絵で描かれていることがあり、一般に銘や銘款、底裏銘などと呼ばれる。肥前磁器では磁器創始段階から中国磁器を意識した製品作りを行っており、高台内の銘も中国磁器の影響を受けているが、それからさらに転化したものや肥前磁器独自のものなど様々な銘を施す。

柴田夫妻コレクションは肥前磁器を中心とした一大コレクションである。全体で 4,332 件 10,311 点を数え、体系的な収集によって、江戸時代から幕末明治にかけての肥前磁器の変遷をみることができる。コレクションの 4 割にあたる約 1800 件に銘が施されており、前稿（宮木 2021）から、江戸時代から幕末明治における肥前磁器銘の基礎資料を作成することを目的としてコレクションにみられる銘を集成、分類している。年代などの資料の基本データは大橋康二氏が報告した、『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』（九陶 2019）を参照している。佐賀県立九州陶磁文化館では、白く形が端正な素地に、非対称で絵画的な構図と繊細な描き方の絵付けを特徴とする様式が、延宝年間（1673～1683 年）に成立するものとして延宝様式と称している（九陶 1997）。今回はこの延宝様式が成立する前段階から展開後変容していく 1660 年代から 1700 年代までの肥前磁器のうち銘のある 433 件を集成、銘の分類を行う。

2. 銘の分類

肥前磁器の高台内に記される銘は基本的には中国磁器銘の模倣及びそれが転化したものであるが、これを大きく 7 つに分類し細分類を行う。すなわち、(A) 中国の国・年号及びその転化、(B) 吉祥語、(C) 合字・異体字・不明字、(D) 虫・草花等のマーク、(E) 生産地・生産者を表したもの、(F) 和暦、(G) その他、である。以下、分類ごとに年代順で紹介するが、細分類の数字は前稿からの通し番号を付している。なお、文末の（ ）内は該当する作品の図版番号であり、図版として「柴田夫妻コレクション肥前磁器銘一覧②」を付した。

A：中国の国・年号及びその転化

A 1：「大明」 中国明王朝（1368～1644 年）の国号を表す「大明」を銘としたもの。肥前磁器銘では最初期からみられ、1640～1650 年代に多い銘だが、今回は「太明」と表記されるものが一例のみである。（106）

A 3：「大明成化年製」 中国磁器銘に倣ったもので、江戸時代を通じて使用された。中国の明

王朝の年号「成化」(1465～1487年)を表す。1630年代から引き続き使用されるが、さらに数は多い。(116、117 他)

A5:「化年製」「大明成化年製」から「化年製」の1行3文字を分離した銘。1650年代以降から1680年代までにみられる。(062、069)

A6:「大明嘉靖年製」中国明王朝の「嘉靖」(1522～1566年)を表すもので、1650年代から引き続きみられる。(065、354 他)

A10:「宣徳年製」中国明王朝の「宣徳」(1426～1435年)を表す。17世紀後半にみられ、長吉谷窯跡、柿右衛門窯跡などに出土例がある。(049、078 他)

A11:「製」「年製」の「製」だけを分離したもの。柴田夫妻コレクションでは、1655～1670年代に3例みられたが、今回は002のみ。

A13:「嘉」中国明王朝の「嘉靖」(1522～1566年)からとったと考えられる「嘉」のみの銘で、1670年代以降は二重の角枠に入る。二重角枠の銘はいずれも丁寧で描き方に揺れがなく、柿右衛門窯跡の出土例に特徴的な銘である。無枠の「嘉」銘から一步デザイン化されている。(014、149 他)

A14:「青」「青」は「青明」や「青明年製」などのように、中国の年号銘から転化したものに使用されることが多い。「青」1字のものは17世紀後半以降にみられるが、柴田夫妻コレクションでは1680年代までで収まる。(015、089 他)

A16:「宣明年製」中国明王朝の「宣徳」からとって、中国磁器やA17に見られる「大明年製」の「大」を「宣」にしたもの(036、103 他)

A17:「大明年製」中国明王朝を表す年号銘。中国磁器銘には古くから使用されるが、肥前磁器銘では1660～1670年代から使用されるようになり、18世紀に顕著となる。(104、199 他)

A18:「宣嘉年製」「宣徳」及び「嘉靖」から1文字ずつとって銘としたもの。柿右衛門窯跡に出土例があり、17世紀後半に特徴的な銘である。(123、166 他)

A19:「宣明成化年製」「大明成化年製」の「大」を「宣」にしたもの。(162)

A20:「太明嘉化年製」「太明成化年製」の「成」を「嘉」にしたもの。208のみ。

A21:「宣真年製」「宣嘉年製」の「嘉」が「真」に置き換わったもの。(239、363)

A22:「嘉靖年製」中国磁器銘にもあり、「大明嘉靖年製」から国号を省略したもの。(241)

A23:「大明化製」「大明年製」の「年」が「化」となったもの。数は少ないが、柴澤コレクションに1680～1720年代の例が1つある(収蔵番号14308)。(295、397 他)

A24:「大明萬曆年製」中国明王朝の「萬曆」(1573～1619年)を表す。18世紀以降に多い銘だが、この時代から出現していたことが分かる。(315)

A25:「太明嘉成年製」「太明嘉靖年製」の「靖」が「成」となったもの。(316)

A26:「大勝蔵化弁製」 325B の 1 例のみだが、組となる他 4 点が A 3 (大明成化年製) であることから、これが転化したものだろう。

B: 吉祥語

B 1:「福」 「福」の篆書体を銘としたものは肥前磁器銘の中でも早くから現れる。示偏に「畐」が旁となっているとみられるものを B 1 としているが、細かいバリエーションが多く見られる。前稿では B 類に限らず最も多い銘だったが、1670 年代以降は数を減らしていく。(001、003 他)

B 2:「福 (草書)」 中国磁器にも見られる「福」の草書体で B 6 より崩れた書体のもの。(059、086 他)

B 3:「朱 + 福」 「朱」の篆書体を偏としたもので 1640 年代からあるが、1680 年代には終息する。(012、033)

B 6:「福 (渦福)」 二重角枠に入り、「田」の部分をも状に描くいわゆる「渦福」を B 6 とした。1660 年代から出現し、1670 年代以降から 18 世紀にかけて B 1 に代わる「福」字銘の主流となる。渦三重を典型とし、二重でラフな書き方のものや四重になって粗雑化したものもある。18 世紀にはさらに崩れる。(039、083 他)

B 7:「斤? + 畐カ」 C21 の旁 (以下、仮に「斤」と称する) を偏とする福の変化銘。288 のみ。

C: 合字・異体字・不明字

C 1:「示 + 朱」 「朱」の篆書体と「示」の篆書体を組み合わせと考えられ、偏と旁が逆のものもある。1650 ~ 1660 年代に多かったが、1680 年代までで消えていく。(018、026 他)

C19:「朱 + 不明字 12」 偏に「朱」の篆書体を、旁に不明字 12 (𠂔) を入れた銘。(061)

C21:「不明字 14」 「析」の篆書体に似るとされる銘。B 1 から減画、形式化した可能性を想定している。1660 ~ 1670 年代に数を増やすものの、1680 年代以降消えていく。(022、024 他)

C31:「示 + 米」 「示」と「米」とされる文字の組合せ銘。1660 ~ 1680 年代に収まる。(025、028 他)

C35:「不明字 25」 原型不明の文字。1660 ~ 1680 年代に収まる。(010、021)

C36:「不明字 26」 二重角枠に入る不明な文字。原型は「嘉」ないし「喜」ではないかと考えている。長吉谷窯跡の出土例にみられ、1660 ~ 1670 年代と考えられる。(108)

C37:「百カ」 「百」の増画字と考えられ、1660 ~ 1680 年代に収まる。(004、006 他)

C40:「畐カ」 一重の円形枠に「畐」とみられる文字が入る。「畐」か「福」から転化したものかは不明である。(005)

C41:「不明字 29」 原型不明だが、「寿」の篆書体の一種に似ている。(008)

C42:「不明字 30」 二重角枠に入る不明な文字。「示」が簡略化された「福」を想定する。(009)

C43:「不明字 31」 原型不明の文字。旁は C35 に似ており、全体では C39 に似る。(020)

C44:「不明字 32」 原型不明の文字。区画線を有し、旁には不明字 12 (𠂔) が入る。(023)

- C45:「不明字 33」「舎」を増画したような字。長吉谷窯跡に出土例がある。(035)
- C46:「不明字 34」角印の印章のように配置された不明な 4 文字。(067)
- C47:「不明字 35」原型不明の文字。何かの篆書体かと考えられるが例は少ない。柴澤コレクションに 1 例ある(収蔵番号 14206)。(076)
- C48:「不明字 36」原型不明の文字。「黄」や「童」のようにみえるが他に例がない。(109)
- C49:「不明字 37」字体から「古へ人」や「古を倣う」と読まれてきた銘(山下 1974)。「斤」を偏とし、旁に「古」「入」「U」を組合せたような文字が二重角枠に入る。多少の違いはあるものの表記ゆれは少ない。1670～1680 年代に出現し 18 世紀まで残る。柿右衛門窯跡と南川原窯ノ辻窯跡に出土例がある。(113、124 他)
- C50:「金カ」「金」篆書体に似る銘。「余」や年木山の「年」とも読まれてきた。C49 と共に 17 世紀後半に出現し、数を増やす。(114、137 他)
- C51:「兵カ」「兵」と考えられる銘。柿右衛門窯跡にのみ出土例がある(大橋 1990)。(132)
- C52:「不明字 38」「嘉」の上部と C49 の「古」を除いた部分を組合せた銘。数は少ないが、この銘を施すものは丁寧に作られている。(154、194)
- C53:「不明字 39」偏に「斤」を、旁に車輪のような文字を入れた銘。C49 などとともにこの時期に多い。B 1 には「田」を円形かつ×で表現したものがあり、B 7 の例もあることから福字の転化を想定する。(160、161 他)
- C54:「不明字 40」「者」や「盾」のようにみえるが、他に例がなく定かではない。(429)

F: 和暦

F 2:「延寶年製」「延寶」とは日本の元号の一つであり 1673～1683 年に当たる。「承應貳歳」のように特定の年を表記した例を除けば、中国銘に倣った和暦の年製銘の最初である。(247)

3. 銘の消長と器種

柴田夫妻コレクションにみられる銘のうち 1660～1700 年代では、前の年代から出現したものを含め 47 種類の銘を確認した。この 47 種類の変遷を表 1 にまとめる。

概観すると 1660 年代までと比べ C 類に分類するような銘が減り、特定の銘に統一化されてくる。基本的には A 3 (大明成化年製)、B 1 ないし B 6 (渦福) が大半を占めるが、C21 (福) がピークを迎えた後、C49 (蔵)、C50 (金)、C53 (臚) がこの時期を特徴づける。この 7 種を 1660～1700 年代における主要な銘と位置づけ、1650 年代からの数量的な変化を示したものがグラフ 1 である。

A 類からみていくと、この年代には A 1 (大明) がほぼなくなり、A 3 (大明成化年製) が主体となる。グラフ 1 から A 3 は 17 世紀後半にかけて数を増やしていくことが分かる。また、

表 1 柴田夫妻コレクションにみられる銘の消長 (1660 ~ 1700 年代)

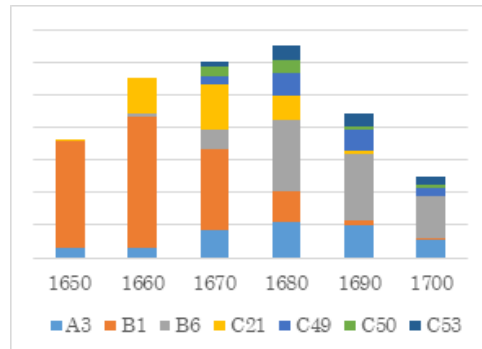
分類	1660	1680	1700	銘	件数
A 1				太明	1
A 3				大明成化年製	56
A 5				化年製	2
A 6				大明嘉靖年製	4
A 10				宣德年製	5
A 11				製	1
A 13				嘉(無杵)	1
A 13				嘉(二重角杵)	16
A 14				青	2
A 16				宣明年製	6
A 17				大明年製	9
A 18				宣嘉年製	10
A 19				宣明成化年製	4
A 20				太明嘉化年製	1
A 21				宣真年製	2
A 22				嘉靖年製	1
A 23				大明化製	3
A 24				大明萬曆年製	1
A 25				太明嘉成年製	1
A 26				大勝蔵化弁製	1
B 1				福	46
B 2				福(草書)	3
B 3				朱+富	2
B 6				渦福	108
B 7				斤+富力	1
C 1				示+朱	5
C 19				朱+不明字 12	1
C 21				不明字 14	39
C 31				示+米	4
C 35				不明字 25	2
C 36				不明字 26(嘉カ)	1
C 37				百カ	4
C 40				富カ	1
C 41				不明字 29(寿カ)	1
C 42				不明字 30(福カ)	1
C 43				不明字 31	1
C 44				不明字 32	1
C 45				不明字 33(舎カ)	1
C 46				不明字 34(四文字角印)	1
C 47				不明字 35	1
C 48				不明字 36	1
C 49				不明字 37(古へ人)	34
C 50				金カ	21
C 51				兵カ	1
C 52				不明字 38(嘉+古へ人)	4
C 53				不明字 39(斤+富カ)	20
C 54				不明字 40	1
F 2				延寶年製	1

※ A13 は杵があるものと二重角杵に入るもので分けている。

1670 年代から A13 の二重角杵銘と A18 (宣嘉年製) が出現する。どちらも柿右衛門窯跡で確認されるが、A18 が柿右衛門窯跡に続く南川原窯ノ辻窯跡にも残るのに対し、A13 の二重角杵銘は柿右衛門窯跡にのみみられる (大橋 1990)。いずれにしても C 類主要銘とともにこの年代を特徴づける銘と言える。数は少ないが、A17 (大明年製) や A24 (大明萬曆年製) などの 18 世紀に盛行する銘も出現している。

B 類では、肥前磁器に銘款を施すようになったと考えられる 1630 年代から使用され続けてきた B 1 が 1670 年代以降減少し、B 6 が 1680 年代には量的に逆転して主流となって 18 世紀まで使用される。B 6 の源流は中国磁器にあるが、福字銘は篆書体か楷書体が主であり、草書体も「田」が渦を成しても一重か二重である。これに対し、肥前磁器では二重角杵に入り三重

グラフ1 1650～1700年代における主要銘の量的推移



の渦を成す草書体として一定の形態が確立し、多くの製品に使用されている。

C類では、C1（示+朱）やC31（示+米）が僅かに残るものの、C10やC11（「寿福」の合字。いわゆる誉字銘）、C23（米+貢）などの1650～1660年代に見られた銘が確認されない。1660～1700年代

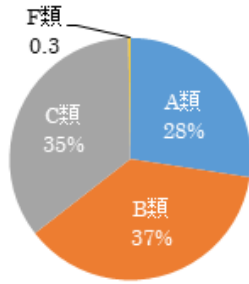
では、前半はC21、後半はC49、C50、C53が中心になる。C21は、「一」の下部に「示」と「斤」の篆書体のような文字が二重角枠に入るものを基本とする。区画線が入ったものや一重角枠に入るものなど、多少の表記ゆれはみられるが、B1ほどのバリエーションはない。1670年代から出現するC49、C50、C53は、さらにスタイルが一定で画一化されている。これら主要銘以外でも、1680年代までに消えていくものはラフな描き方で表記ゆれが多く、1670年代以降に出現するものは描き方が丁寧で形態が一定である。

B類、C類の状況を見ても、それまでの初期伊万里や初期色絵の素朴な絵付けや豪快で自由闊達なスタイルから、1670～1680年代を境としてより洗練されたスタイルへの変化と画一化していくことが分かる。その境となった時代は、和暦で年製銘を施す最初の例であるF2（延宝年製）が施された延宝年間に当たる。明清交代の混乱によって中国磁器の影響から脱し、技術的にも文様的にも日本磁器化が進んだこの年代に、銘もまた同じように和風化されていったと言える。

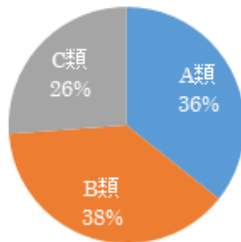
皿類、鉢類、碗類の3種類の器種毎の大分類の傾向をみていく。皿類にはほぼ全ての銘があるが、割合としてB類とC類が同程度を占め、A類がこれに続く（グラフ2）。鉢類はA類とB類が同程度で、C類がこれに続く形となっている（グラフ3）。碗類ではそもそも銘がある資料が8件で、A類の他はB1が1件確認されるのみである。前稿では皿類でB類が53%、鉢類でA類が60%と器種によって差がみられたが、今回は多少の傾向はあるものの偏りは少ない。事例が少ないものの碗類だけは、A類とB類でそれぞれ4割ずつ占めていた段階からA類が抜き出る形となった。A類が碗類に多くなった理由は分からないが、C類が確認できないことに関しては、この年代の代表的な窯でありC類銘の使用も多い柿右衛門窯跡が、中・小の高級皿を主製品とすることが影響しているのかもしれない。

最後に大皿、皿、小皿、手塩皿、碗、鉢（猪口を含む）の器種の細分類における主要銘の傾向について簡単に触れる。佐賀県立九州陶磁文化館では、基本的な器種を形態や寸法によって定義している（九陶2008）。詳細は省くが皿類では30cm以上を大皿、30cm未満を皿、16cm未満を小皿、11cm未満を手塩皿としており、本稿でもこの定義を使用する。皿・小皿については、口縁が花卉状をなすいわゆる「輪花皿」も抽出した（表2）。基本は大分類と器種の傾向と大

グラフ 2 皿類における銘の分類



グラフ 3 鉢類における銘の分類



グラフ 4 碗類における銘の分類

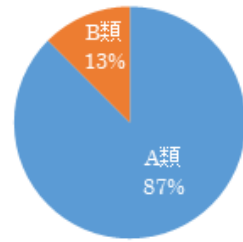


表 2 1660 ～ 1700 年代の主要銘が使用された器種について

	A3	B1	B6	C21	C49	C50	C53
大皿	0	0	0	0	1	0	0
皿（輪花皿）	31 (12)	29 (1)	55 (22)	22 (8)	14 (5)	13 (4)	13 (10)
小皿（輪花小皿）	16 (3)	12 (1)	39 (18)	15 (4)	11 (3)	8 (8)	6 (3)
手塩皿	2	1	0	0	0	0	0
碗	2	1	0	0	0	0	0
鉢	7	3	17	2	11	0	1

差ないが、手塩皿と碗類がどちらも A 3 と B 1 に限られている点は指摘できる。検討材料が少ないため、この共通点が何に由来しているのか定かではないが、柿右衛門窯跡での生産状況などが影響している可能性はあるだろう。B 1 と B 6 で比較してみると、輪花皿への使用は B 6 が圧倒的に多いことが分かる。延宝様式には型打ち技法を用いた輪花皿や角皿などが多いため、B 1 と B 6 の転換期である 1670 ～ 1680 年代以降に、輪花皿の生産が増えたことが影響していると考えられる。C 類はほぼ皿・小皿に集中しているが、C49 は皿と同程度、鉢にも使用が見られる。C 類の輪花皿への使用もいずれも 3 割程度だが、特に C50 と C53 は、それぞれ輪花小皿と輪花皿への使用が多い。

4. まとめ

柴田夫妻コレクションを対象に 1660 ～ 1700 年代の銘の集成、分類を行った。対象範囲の資料数として 1157 件の作品があり、このうち 433 件に 47 種類の銘が確認できた。分類した銘のうち、数としては前稿で最も多かった B 1 に代り B 6 が最も多くなる。また、C 類が最も多様である点は前稿と同様だが、種類は減ってより洗練された書体の銘に統一されていく。1670 ～ 1690 年代は肥前磁器が技術的に完成され、日本的な美意識のもとに柿右衛門様式が登場する。その一方で見込の五弁花文や裏文様などに画一化やパターン化の動きも出てくる。銘においても中国磁器に倣ったものから一步日本化したものが使用されるようになり、丁寧に描かれることが多くなる。多様だった銘の種類が減り、画一化されてくる時期が 1670 ～ 1680 年代であることは、肥前磁器全体の流れとも一致する。本稿では一部の器種と主要銘のみだが、細分類での対応関係もまとめた。1 対 1 関係とまでは言えないが、C50 と C53 の状況は銘と器種の対応関係を考えるうえで示唆的である。今後も引き続き基礎資料の作成を目的として進めていきたい。

引用・参考文献

- 有田町史編集委員会 1988『有田町史 古窯編』有田町
- 大橋康二 1988「17世紀後半における肥前磁器の銘款について」『東洋陶磁』第17号 pp.25～37 東洋陶磁学会
- 大橋康二 1990「柿右衛門古窯と17世紀後半の銘款」『古伊万里シリーズⅠ 盛期伊万里の美』pp.94～99 古伊万里刊行会
- 大橋康二 1991「肥前磁器の変遷－文様を中心として－」『寄贈記念柴田コレクションⅡ』pp.87～95 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 2001「肥前・有田磁器にみる紀年銘について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第89集下巻 pp.685～714 国立歴史民俗博物館
- 斎藤菊太郎 1972『古染付 祥瑞 陶磁体系 第四四巻』平凡社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1997『寄贈記念柴田コレクションⅤ 延宝様式の成立と展開』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999『柿右衛門様式総合調査事業報告書』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2008『古伊万里の見方 シリーズ5 形と用途』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2012『古伊万里の文様集成』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2019『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』
- 朱裕平 2018『中国瓷器銘文』上海科学技术出版社
- 関和男 1987『盛期伊万里』創樹社美術出版
- 富永樹之 1998「出土品に見る景德鎮青花の底裏銘」『青山考古』第15号 pp.35～65 青山考古学会
- 水町和三郎 1957「柿右衛門の製品」『柿右衛門』pp.65～150 金華堂
- 宮木貴史 2020「柴澤コレクションにみる肥前磁器の銘款について」『開館40周年記念・寄贈記念 特別企画展 柴澤コレクション』pp.117～130 佐賀県立九州陶磁文化館
- 宮木貴史 2021「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成1」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第6号 pp.30～51 佐賀県立九州陶磁文化館
- 山下朔郎 1974『盛期の伊万里』徳間書店

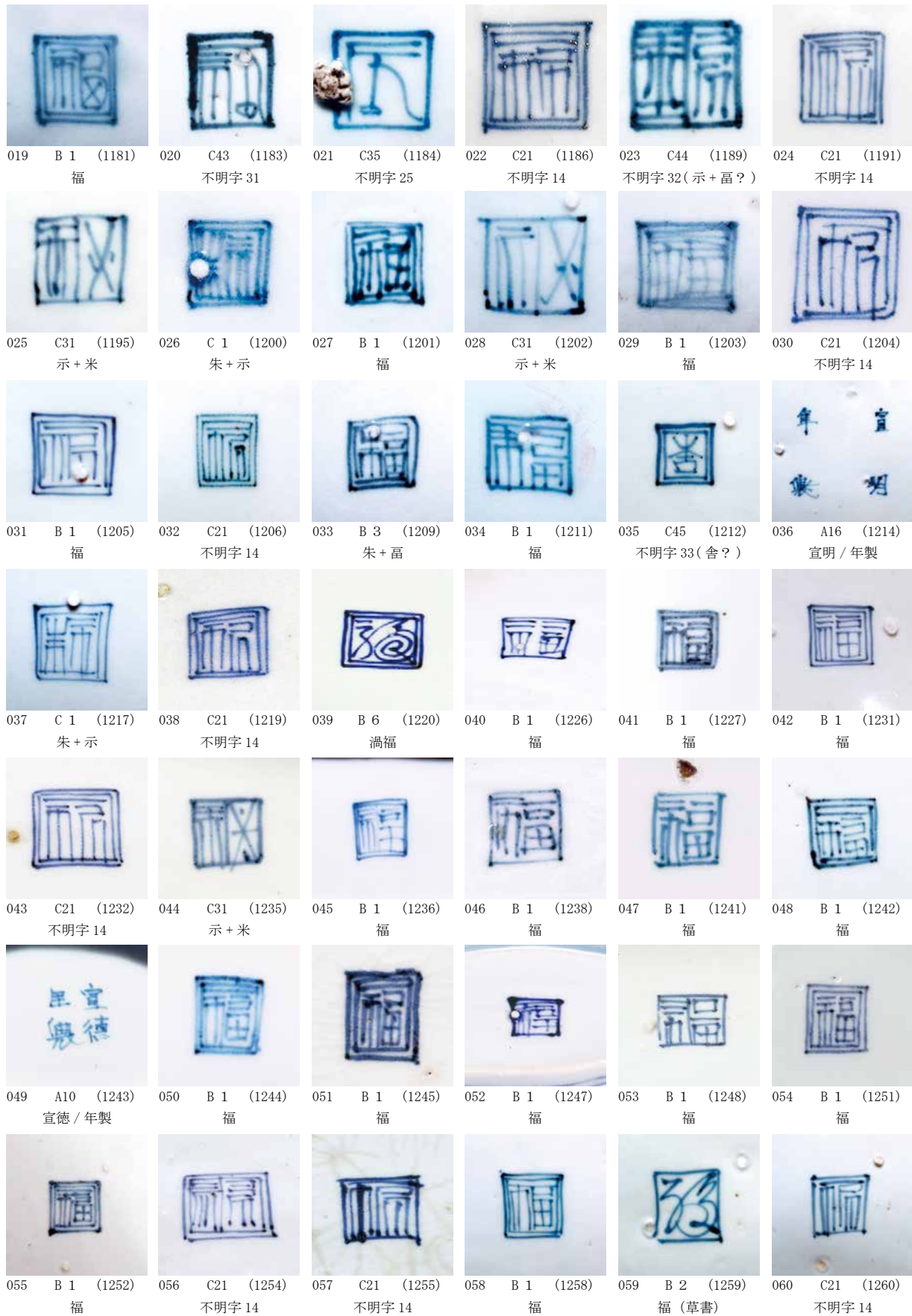
柴田夫妻コレクション肥前陶磁器銘一覧②

1660～1680年代

※（ ）内は『柴田夫妻コレクション総目録（増補改訂）』の目録番号



1660 ~ 1680 年代



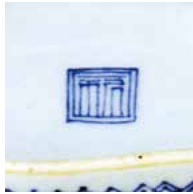
1660 ~ 1680 年代



061 C19 (1261)
朱 + 不明字 12



062 A 5 (1264)
化年製



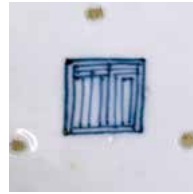
063 C21 (1267)
不明字 14



064 B 1 (1268)
福



065 A 6 (1269)
大明嘉 / 靖年製



066 C21 (1270)
不明字 14



067 C46 (1271)
不明字 34(四文字角印)



068 B 1 (1288)
福



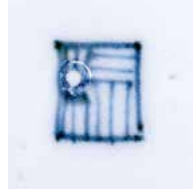
069 A 5 (1290)
化年製



070 B 1 (1292)
福



071 C31 (1293)
示 + 米



072 C 1 (1296)
朱 + 示



073 C37 (1297)
百力



074 C 1 (1298)
朱 + 示



075 C21 (1301)
不明字 14



076 C47 (1305)
不明字 35



077 C21 (1306)
不明字 14



078 A10 (1307)
宣德 / 年製



079 A10 (1311)
宣德 / 年製



080 B 1 (1312)
福



081 B 1 (1315)
福



082 B 1 (1316)
福



083 B 6 (1322)
渦福



084 C21 (1323)
不明字 14



085 C21 (1328)
不明字 14



086 B 2 (1329)
福(草書)



087 B 1 (1330)
福



088 B 1 (1333)
福



089 A14 (1335)
青



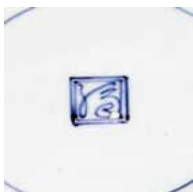
090 C21 (1336)
不明字 14



091 C21 (1337)
不明字 14



092 B 1 (1338)
福



093 B 6 (1341)
渦福



094 C21 (1342)
不明字 14



095 C21 (1345)
不明字 14



096 B 1 (1348)
福



097 C21 (1358)
不明字 14



098 C21 (1359)
不明字 14



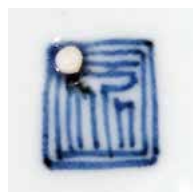
099 C21 (1360)
不明字 14



100 B 1 (1364)
福



101 B 1 (1368)
福



102 C21 (1369)
不明字 14

1670～1680年代



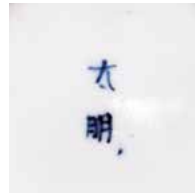
103 A16 (1373)
宣明 / 年製



104 A17 (1375)
大明 / 年製



105 B 1 (1376)
福



106 A 1 (1377)
大明



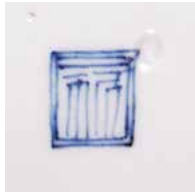
107 B 1 (1378)
福



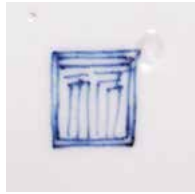
108 C36 (1443)
不明字 26(嘉カ)



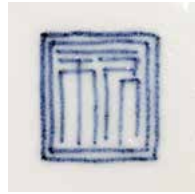
109 C48 (1447)
不明字 36



110 C21 (1448)
不明字 14



111 C21 (1452)
不明字 14



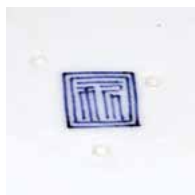
112 C21 (1454)
不明字 14



113 C49 (1455)
不明字 37(古へ人)



114 C50 (1457)
金カ



115 C21 (1458)
不明字 14



116 A 3 (1465)
大明成 / 化年製



117 A 3 (1468)
大明成 / 化年製



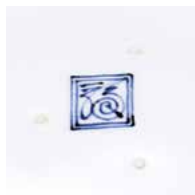
118 C21 (1469)
不明字 14



119 A 3 (1474)
大明成 / 化年製



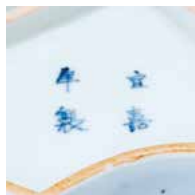
120 C21 (1476)
不明字 14



121 B 6 (1479)
渦福



122 B 6 (1482)
渦福



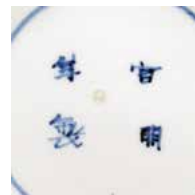
123 A18 (1487)
宣嘉 / 年製



124 C49 (1488)
不明字 37(古へ人)



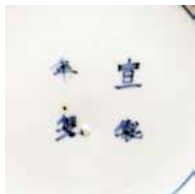
125 B 6 (1494)
渦福



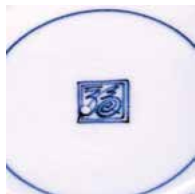
126 A16 (1495)
宣明 / 年製



127 A 3 (1498)
大明成 / 化年製



128 A10 (1501)
宣德 / 年製



129 B 6 (1502)
渦福



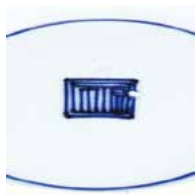
130 B 6 (1504)
渦福



131 C21 (1506)
不明字 14



132 C51 (1509)
兵カ



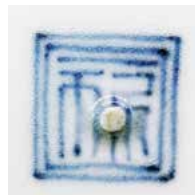
133 C21 (1511)
不明字 14



134 A 3 (1514)
大明成 / 化年製



135 A16 (1515)
宣明 / 年製



136 C21 (1517)
不明字 14



137 C50 (1518)
金カ



138 C50 (1520)
金カ



139 C50 (1521)
金カ



140 B 2 (1533)
福(草書)



141 C21 (1534)
不明字 14



142 A16 (1537)
宣明 / 年製

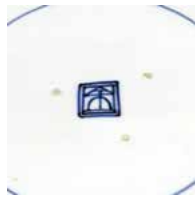
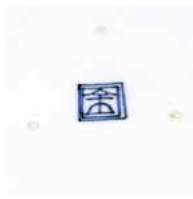
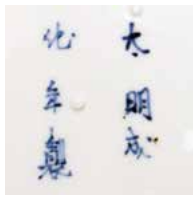
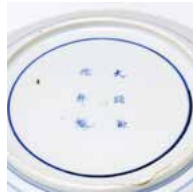
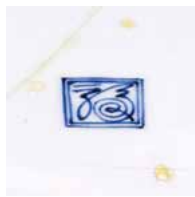
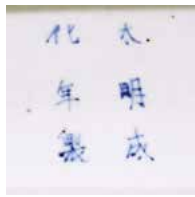
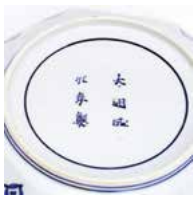
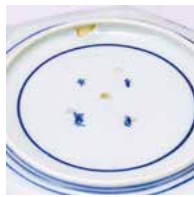
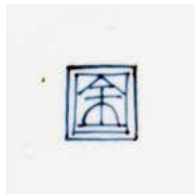
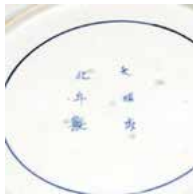
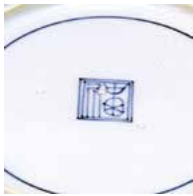
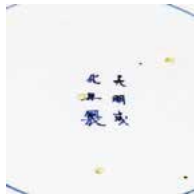
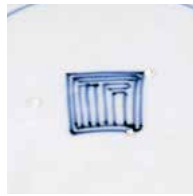
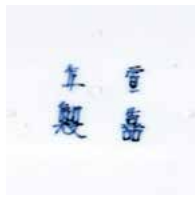
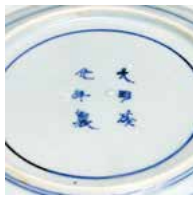
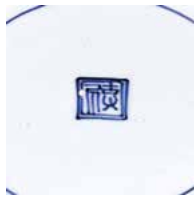
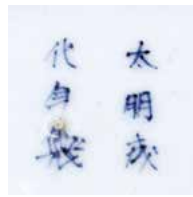
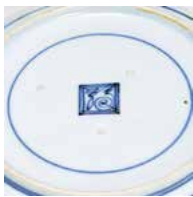


143 B 6 (1546)
渦福



144 C50 (1549)
金カ

1670 ~ 1690 年代

145 C50 (1550)
金力146 C50 (1551)
金力147 A 3 (1559)
大明成 / 化年製148 C50 (1563)
金力149 A13 (1565)
嘉150 C50 (1567)
金力151 C49 (1569)
不明字 37 (古へ人)152 B 6 (1571)
渦福153 A 3 (1572)
大明成 / 化年製154 C52 (1575)
不明字 38 (嘉+古へ人)155 A 3 (1579)
大明成 / 化年製156 B 6 (1580)
渦福157 B 6 (1581)
渦福158 C49 (1584)
不明字 37 (古へ人)159 A 3 (1586)
大明成 / 化年製160 C53 (1588)
不明字 39 (斤? + 畠)161 C53 (1589)
不明字 39 (斤? + 畠)162 A19 (1591)
宣明成 / 化年製163 A 3 (1592)
大明成 / 化年製164 B 6 (1593)
渦福165 A 3 (1594)
大明成 / 化年製166 A18 (1595)
宣嘉 / 年製167 A 3 (1596)
大明成 / 化年製168 A 3 (1600)
大明成 / 化年製169 C50 (1601)
金力170 A 3 (1602)
大明成 / 化年製171 C53 (1603)
不明字 39 (斤? + 畠)172 A 3 (1604)
大明成 / 化年製173 C21 (1605)
不明字 14174 C21 (1606)
不明字 14175 A18 (1607)
宣嘉 / 年製176 A 3 (1608)
大明成 / 化年製177 B 6 (1609)
渦福178 C49 (1610)
不明字 37 (古へ人)179 C21 (1612)
不明字 14180 A 3 (1613)
大明成 / 化年製181 C49 (1614)
不明字 37 (古へ人)182 C21 (1616)
不明字 14183 B 6 (1617)
渦福184 C50 (1618)
金力185 C53 (1624)
不明字 39 (斤? + 畠)186 A13 (1634)
嘉

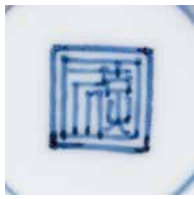
1670～1690年代



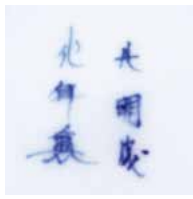
1670 ~ 1690 年代



229 B 6 (1771)
渦福



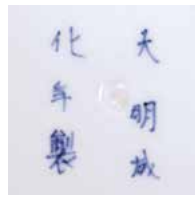
230 C49 (1773)
不明字 37 (古へ人)



231 A 3 (1790)
大明成 / 化年製



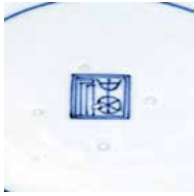
232 B 6 (4281)
渦福



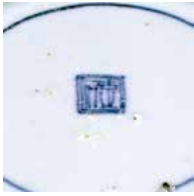
233 A 3 (1830)
大明成 / 化年製



234 A17 (1836)
大明 / 年製



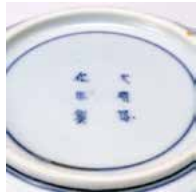
235 C53 (1837)
不明字 39 (斤? + 畠)



236 C49 (1843)
不明字 37 (古へ人)



237 A 3 (1845)
大明成 / 化年製



238 A 3 (1846)
大明成 / 化年製



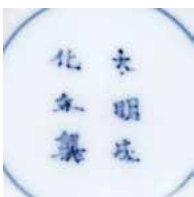
239 A21 (1864)
宣真 (嘉?) / 年製



240 A 3 (1869)
大明成 / 化年製



241 A22 (1870)
嘉靖 / 年製



242 A 3 (1877)
太明成 / 化年製



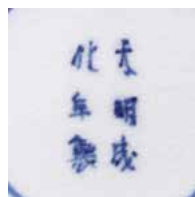
243 A17 (1881)
大明 / 年製



244 A10 (1882)
宣德 / 年製



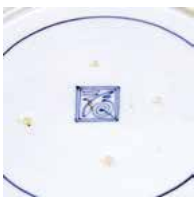
245 A17 (1883)
大明 / 年製



246 A 3 (1907)
太明成 / 化年製



247 F 2 (1922)
延寶 / 年製



248 B 6 (1926)
渦福



249 C50 (1927)
金力



250 B 6 (1928)
渦福



251 C21 (1929)
不明字 14



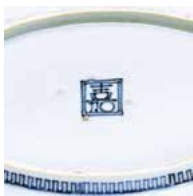
252 B 6 (1930)
渦福



253 B 1 (1931)
福



254 A 3 (1932)
太明成 / 化年製



255 A13 (1935)
嘉



256 B 6 (1937)
渦福



257 C49 (1938)
不明字 37 (古へ人)



258 B 6 (1939)
渦福



259 A13 (1940)
嘉



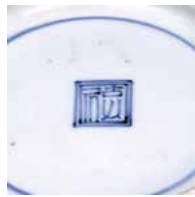
260 B 6 (1941)
渦福



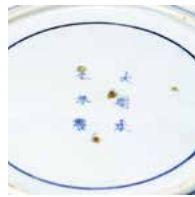
261 C49 (1942)
不明字 37 (古へ人)



262 B 6 (1943)
渦福



263 C49 (1945)
不明字 37 (古へ人)



264 A 3 (1946)
大明成 / 化年製



265 B 6 (1947)
渦福



266 C52 (1948)
不明字 38 (嘉+古へ人)



267 C53 (1949)
不明字 39 (斤? + 畠)



268 B 6 (1950)
渦福



269 B 6 (1953)
渦福

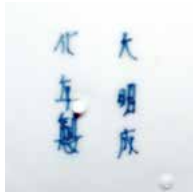


270 B 6 (1954)
渦福

1680 ~ 1690 年代



1680 ~ 1700 年代



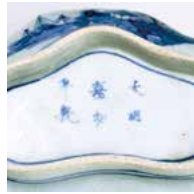
313 A 3 (2037)
大明成 / 化年製



314 B 1 (2038)
福



315 A24 (2039)
大明萬 / 曆年製



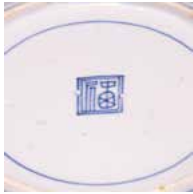
316 A25 (2040)
大明 / 嘉成 / 年製



317 B 6 (2041)
渦福



318 C53 (2042)
不明字 39 (斤? + 畠)



319 C53 (2043)
不明字 39 (斤? + 畠)



320 C53 (2044)
不明字 39 (斤? + 畠)



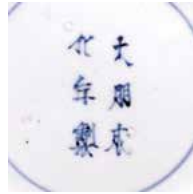
321 C49 (2045)
不明字 37 (古へ人)



322 C50 (2046)
金力



323 A13 (2047)
嘉



324A A 3 (2048)
大明成 / 化年製



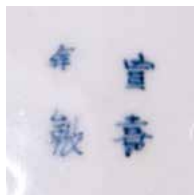
324B A26 (2048)
大明成 / 化年製



325 C49 (2049)
不明字 37 (古へ人)



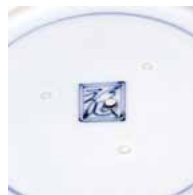
326 A 3 (2050)
大明成 / 化年製



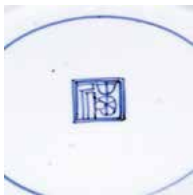
327 A18 (2051)
宣嘉 / 年製



328 A 3 (2052)
大明成 / 化年製



329 B 6 (2053)
渦福



330 C53 (2054)
不明字 39 (斤? + 畠)



331 B 6 (2055)
渦福



332 C49 (2056)
不明字 37 (古へ人)



333 B 6 (2057)
渦福



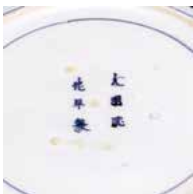
334 C50 (2058)
金力



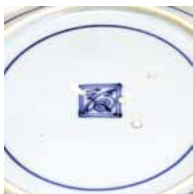
335 A18 (2059)
宣嘉 / 年製



336 B 6 (2060)
渦福



337 A 3 (2061)
大明成 / 化年製



338 B 6 (2062)
渦福



339 B 6 (2063)
渦福



340 C49 (2064)
不明字 37 (古へ人)



341 C53 (2065)
不明字 39 (斤? + 畠)



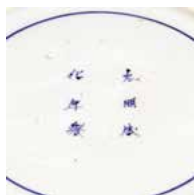
342 B 6 (2066)
渦福



343 B 6 (2067)
渦福



344 C53 (2068)
不明字 39 (斤? + 畠)



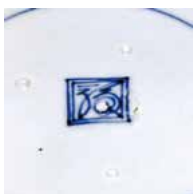
345 A 3 (2069)
大明成 / 化年製



346 B 6 (2071)
渦福



347 C53 (2072)
不明字 39 (斤? + 畠)



348 B 6 (2073)
渦福



349 C50 (2074)
金力



350 B 6 (2075)
渦福



351 B 6 (2076)
渦福

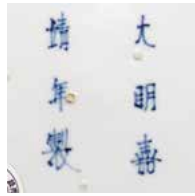


352 B 6 (2077)
渦福



353 B 6 (2078)
渦福

1680～1700年代



354 A 6 (2081)
大明嘉 / 靖年製



355 A 3 (2091)
大明成 / 化年製



356 B 6 (2104)
渦福



357 A 3 (2108)
太明成 / 化年製



358 A13 (2109)
嘉



359 A19 (2110)
宣明成 / 化年製



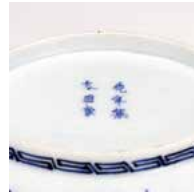
360 B 6 (2112)
渦福



361 B 1 (2113)
福



362 A21 (2114)
宣真 / 年製



363 A 3 (2116)
化年製 / 太明成



364 C53 (2118)
不明字 39 (斤? + 畝)



365 B 6 (2119)
渦福



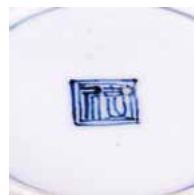
366 B 6 (2120)
渦福



367 B 6 (2121)
渦福



368 B 6 (2122)
渦福



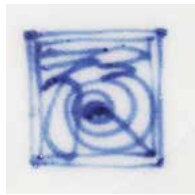
369 C49 (2123)
不明字 37 (古へ人)



370 B 6 (2124)
渦福



371 B 6 (2125)
渦福



372 B 6 (2126)
渦福



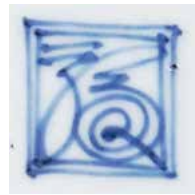
373 B 6 (2127)
渦福



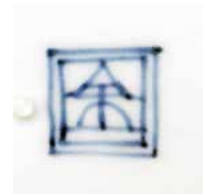
374 B 6 (2128)
渦福



375 C53 (2129)
不明字 39 (斤? + 畝)



376 B 6 (2131)
渦福



377 C50 (2132)
金力



378 B 6 (2133)
渦福



379 C49 (2134)
不明字 37 (古へ人)



380 B 6 (2135)
渦福



381 C49 (2136)
不明字 37 (古へ人)



382 A13 (2137)
嘉



383 B 6 (2138)
渦福



384 B 6 (2139)
渦福



385 A 3 (2140)
太明成 / 化年製



386 B 6 (2141)
渦福



387 B 6 (2142)
渦福



388 B 6 (2143)
渦福



389 B 6 (2144)
渦福



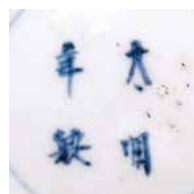
390 C49 (2146)
不明字 37 (古へ人)



391 C53 (2149)
不明字 39 (斤? + 畝)



392 A 3 (2152)
太明成 / 化年製



393 A17 (2158)
大明 / 年製



394 A17 (2159)
太明 / 化製



395 C49 (2160)
不明字 37 (古へ人)

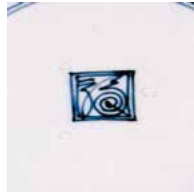
1680 ~ 1700 年代



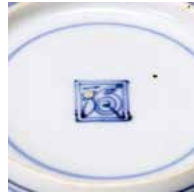
396 A23 (2161)
大明 / 化年製



397 A23 (2163)
大明 / 化年製



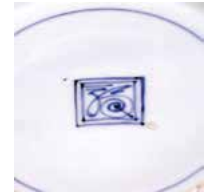
398 B 6 (2165)
渦福



399 B 6 (2166)
渦福



400 C49 (2167)
不明字 37 (古へ人)



401 B 6 (2168)
渦福



402 B 6 (2169)
渦福



403 B 6 (2170)
渦福



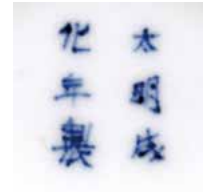
404 C53 (2177)
不明字 39 (斤? + 昌)



405 B 6 (2179)
渦福



406 A 6 (2180)
大明嘉 / 晴年製



407 A 3 (2181)
大明成 / 化年製



408 B 6 (2183)
渦福



409 A18 (2184)
宣嘉 / 年製



410 A 6 (2185)
大明 / 嘉靖 / 年製



411 A17 (2192)
大明 / 年製



412 B 6 (2193)
渦福



413 A 3 (2194)
大明成 / 化年製



414 B 6 (2200)
渦福



415 B 6 (2210)
渦福



416 B 6 (2212)
渦福



417 A17 (2213)
大明 / 年製



418 A 3 (2214)
大明成 / 化年製



419 B 6 (2217)
渦福



420 B 6 (2218)
渦福



421 B 6 (2219)
渦福



422 B 6 (2220)
渦福



423 B 6 (2221)
渦福



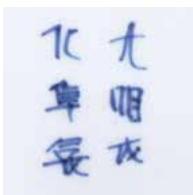
424 B 6 (2222)
渦福



425 B 6 (2230)
渦福



426 B 6 (2231)
渦福



427 A 3 (2232)
大明成 / 化年製



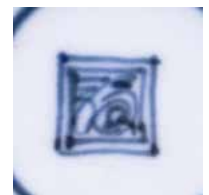
428 B 6 (2233)
渦福



429 C54 (2235)
不明字 40



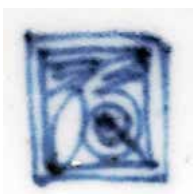
430 A 3 (2244)
大明成 / 化年製



431 B 6 (2254)
渦福



432 A 3 (2257)
大明成 / 化年製



433 B 6 (2260)
渦福

執筆者（掲載順）

井上 康彦（植物研究家）

大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問）

鈴田 由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館 館長）

宮木 貴史（佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員）

佐賀県立九州陶磁文化館

研究紀要 第7号

令和4年（2022年）3月18日

編集発行 佐賀県立九州陶磁文化館

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙 3100-1

印刷 山口印刷

〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙 3617-5

BULLETIN

OF

KYUSHU CERAMIC MUSEUM

No. 7

CONTENTS

Transition Analysis of *Gosu* (Oxidized Cobalt) in Arita Porcelain Derived from Stereo Microscope Images

• • • Inoue Yasuhiko , Ohashi Koji

Research on Exported Ceramics of Arita and Mikawachi in the Second Half of the 19th Century: A Focus on Egg Shell Porcelain

• • • • • • • • • Suzuta Yukio

Meikan Markings in the Mr. and Mrs. Shibata Collection Part. 2 -Style of the Enpo Period

• • • • • • • • • Miyaki Takafumi

2022

Kyushu Ceramic Museum

Toshaku Otsu 3100-1, Arita, Saga, 844-8585, Japan